



TITLE:

朱門弟子師事年攷 續

AUTHOR(S):

田中, 謙二

---

CITATION:

田中, 謙二. 朱門弟子師事年攷 續. 東方學報 1975, 48: 261-357

ISSUE DATE:

1975-12-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/66528>

RIGHT:

# 朱門弟子師事年攷 續

田 中 謙 二

## 黃 榘 (一一五二—一二二二)

あざなは直卿、勉齋と號し、福州(しばしば雅名の三山で呼ばれる)閩縣(福建省、今名が同じ場合は管轄省名のみ記す)の人。文肅の諡號を贈られる。初期の朱門に在って大きな期待を寄せられた高弟で、朱熹の三女の婿にえらばれた。朱熹自身が、「直卿はわたくしといっしょにあること多年に及んだ」(語類・卷一一九、訓門人)というように、かれは老師の身邊に侍する期間が最も長く、かつ、語録の作成者でもある。しかし、「語録姓氏」にはかれの記錄年次を缺いており、實は所錄の問答は意外に少なく、したがって、そこに登場する同門弟子もきわめて少數である。ただ、かれは老師のもとに侍した期間が長いだけに、他人の所錄に廣汎にわたって現われる。傳記にはおよそ次の四種がある。

黃榘傳 『宋史』卷四三〇

又 『勉齋先生黃文肅公文集』(靜嘉堂文庫藏・宋刊本)付、國史

朱門弟子師事年攷 續

付傳

林羽「行實」 同上付錄

黃宗羲「文肅黃勉齋先生榘」 『宋元學案』卷六十三

まず黃榘の入門期については、かれ自身が「祭晦庵先生文」(黃文肅公文集・卷三十六)中にみずから、榘は丙申の春はじめて先生のもとに入門した——榘丙申之春。師門始登」と語っている。

「丙申」は淳熙三年(一一七六)にあたる。時に黃榘は數え年二十五歳、朱熹は四十七歳であつた。かれが朱門に登るまでの経緯について、『宋史』本傳によってかなり詳しい事情を知りうる。

(父の)珣が亡くなり、榘は清江の劉清之に會ひにでかけた。清之はかれの人物に感心していった、「きみは將來大成する器だ。當世ばやりの學問(科擧受験用の學問)は、きみの生き方を律するものじゃない。」そういったかれは、朱熹の指導をうけるように指示した。家のおきてが嚴格な榘は、母にその旨を告げると、その日のうちに出發した。おりから大雪の降る中をやって來ると、朱熹は他出して不在である。榘はそこで宿に滞在

して、一つベッドに起き臥しし、衣服を解かぬこと二か月に及んで、やっと朱熹が歸來した。

瑀没。榦往見清江劉清之。清之奇之曰。子乃遠器。時學非所以處子也。因命受業朱熹。榦家法嚴重。乃以白母。即日行。時大雪。既至而熹它出。榦因留客邸。臥起一榻。不解衣者二月。而熹始歸。

黃榦の父黃瑀（一一〇九—一六八）については、朱熹が撰した「朝散黃公墓誌銘」（文集・卷九十三）に詳しくその生涯が語られている。瑀は紹興八年（一一三八）の進士で、朱熹が任官後はじめて就任した同安縣主簿の職に在ったところ（一一五三・七一五七・一〇）、隣接する永春縣の知事をつとめており、その後榮進をかさねて監察御史を拜命したが、病氣のため就任できぬまま永逝した。黃榦はその四男であり、父が死んだ乾道四年（一一六八）にはまだ十七歳の少年だった。なお「國史附傳」は、父の瑀を朱熹とごく親密な間がらのごとくに傳えているが、朱熹自身が撰した墓誌には、隣縣の有能な知事に對して敬意をいだいたとあるだけで、親交に進展したとはいっていない。

すでにみたように、黃榦に對して朱門に登ることを勧めたのは劉清之である。劉清之（一一三九—一八九）、あざなは子澄、靜春と號する、廬陵郡清江縣（江西省）の人。朱熹とはすでに親密な關係にあった。黃榦が劉清之に師事したときは、父の死後すでに七年が経過していたが、かれの「祭劉靜春文」（黃文肅公文集・卷三十六）にいう、

わたくしは愚鈍の生まれで、年ゆかぬころから指導者を缺き、二十歳を過ぎてはじめて廬陵にまいり、先生の前にかしこまった。それまでの勉強の経過を問われ、前代の碩學たちのしごとを教わり、この後輩の眼をさまされた。

榦也顯愚。少無師承。年已踰冠。始來廬陵。摠衣趨隅。歷問所學。直指前修。以警後覺。

あたかもそのころ、劉清之には朝命が下り、上京しなければならなくなった。祭文にはつづけていう、

乙未の年（淳熙二年・一一七五）の冬、歲晩の寒い日に、先生は朝命を奉じて上京されることになり、江岸で舟の仕度をしながら、走り書きのことづつて呼び出された、「きみの旅仕度をしまえ。武夷と金華こそ、きみの落着く處だ。その二、三のお偉い方は一世の指導者たる人たちだ。」

乙未之冬。歲莫天寒。奉命造朝。艤舟江干。折簡來呼。治子行李。武夷・金華。惟子所止。二三偉人。爲世宗師。

このとき劉清之にくだった朝命とは、宰相の龔茂良が周必大とともに推薦した結果、かれは孝宗に對して政治的進言を行のうことになったのである（『宋史』卷四三六・劉清之傳および元・王禮「靜春先生傳」「麟原集」卷九）。みぎにみえる「武夷」とは朱熹の寄寓地崇安（福建省）を、「金華」とは呂祖謙・祖儉兄弟のそれ（浙江省金華縣）をさす。にわかに朝命をうけた劉清之は、知友の碩學たちに師事することを黃榦に勧め、かくて黃榦は嚴寒のさなか武夷への旅をえら

②閻丘次孟

②李 閼 祖 1188→

②③楊 道 夫 1189→

劉 砥 1190

⑤童 伯 羽 1190

⑥徐 寓 1190→

⑥陳 淳 1190

⑥陳 淳 1199

黃 榦

①⑦葉 賀 孫 1191

④鄭 南 升 1193

②潘 時 舉 1193→

⑨李 方 子 1188→

③晏 淵 1193

③甘 節 1193→

⑤楊 至 1193

⑤楊 至 1194

③蕭 佐 1194

③龔 蓋 卿 1194

⑤林 學 蒙 1194→

④趙 致 道

②黃 顯 子

劉 智 夫

汪 正 甫

吳 伯 英

蔣 叔 蒙

黃 義 剛 1193→

②林 夔 孫 1197→

②包 揚 1183→

胡 安 之 1185

③程 端 蒙 1179→

陳 文 蔚 1188→

鄭 可 學 1191→

周 明 作 1192→

③蕭 佐 1194

舒 高 1194

②湯 泳 1195

②董 銖 1196→

んだ。そこへたどり着いたときは、年あけて淳熙三年（一二七六）正月、朱熹はこの月の初めから邵武縣（江西省）にゆき、引き返して建寧・崇安へとおよそ四旬の旅をつづけていた（朱熹「答呂伯恭（祖謙）」第三十九書、文集・卷三十三收）。旅舎でひたすら待ちつづけていた黄榦が、やっと朱熹に面會しえたのは、おそらく二月半ばであつたろう。

黄榦の傳記は四種も現存するが、そのいずれも朱熹との交渉の詳細を語ってはいくれない。宋・鄭元肅に「黃文肅公年譜」があるという（姜亮夫・陶秋英『歷代人物年碑傳綜表』引）が、遺憾ながら原本を見る便をもたない。いま、考察するにあたりまず、かれが同席する弟子たちのリストとその相互關係を前ページに表示する。

みぎに掲げた表は、實は、以後の考察の便をはかり、少なからず整理を加えて配列したものである。もしもこれを雜然と配列すれば、黄榦のように師事が長期にわたり、多數の同門と接觸した弟子の場合、その師事期の概略を知ることさえ困難だからである。

さて、氏名の左に示す關係は、朱熹の知漳州期（下限は紹熙二年（一二九一）四月二十九日）以前、右に示す關係はそれ以後に屬する。

かく斷定する根據を挙げると、まず前者については、童伯羽の師事期が知漳州期を下限とすること（前稿 p. 163）と、兩次の師事期をもつ陳淳が徐寓・楊道夫のふたりと同時に同席するケースが、やはり知漳州期に限定されること（前稿 p. 160 以下）である。また後者に

いては、黄榦が葉賀孫・徐寓のふたりと同時に同席する可能性は知漳州期になかったともいえないが、紹熙五年（一一九四）十二月十三日に舉行された釋菜において、かれらの同席が確認されている（前稿 p. 174）から、いちおう漳州期に遡る必要はないとおもわれる。ただ一つ問題になるのは、「語錄姓氏」が淳熙十五年以後（一一八八）の記錄者とする李方子と同席するケースであり、これのみは知漳州期以前に屬する恐れもあるが、李方子の師事は、前稿でふれ本稿でも再確認した（p. 33）ように、資料的にかれの活躍が認められるのはむしろ紹熙四・五年（一一九三・九四）に集中しており、そのことは他の同席弟子の顔ぶれを見ても諒解されるから、みぎの疑念はたちまち解消されるはずである。

淳熙三年（一二七六）春二月朱門に登った黄榦は、超人的な猛勉強を開始した。『宋史』本傳の下文にいう、

黄榦は朱熹にまみえてからは、夜もベッドを設けず、帶も解かないで、少し疲れると椅子にかけて休み、時には明けがたに至ることさえあった。朱熹は人に語った、「直卿は根性がしっかりしていて、かれといっしょにいととても爲めになる。」

榦自見熹。夜不設榻。不解帶。少倦則微坐一椅。或至達曙。熹語人曰。直卿志堅思苦。與之處甚有益。

かくて黄榦は淳熙六年（一二七九）三月末、知南康軍として江西省北の星子縣に赴任する朱熹に隨行したらしく、同年五月五日には

老師とともに廬山に遊んでいる（文集・卷八十五「記遊南康廬山」）。その日の隨行者は、程正思（端蒙）・丁復之（克）・朱在（朱熹の三男）・魏恪（朱熹の甥）であった。

しかし、黃榦はその後南康の朱門を去って歸郷したらしく、朱熹の「答黃直卿」第十五書（續集・卷二）には、淳熙七年（一一八〇）二月二日における知友張栻（欽夫・南軒）の死を哀悼することばがみえ、かついう、

ここ（知南康軍の職）からもし脱け出せますなら、さっそく道ついでに出かけて行って哭し、それから歸郷することにします。

此若得脱。即便道往哭之。而後歸耳。

この書翰には、庚子<sup>二</sup>の付注があるが、それを俟つまでもなく、張栻の死からほど近い時點のものとわかる。さらに、この書翰につづく二通も、おそらく同じ年次のもものと推定される（第三書にみえる早はつの狀況は南康のそれを想わせる）。

やがて朱熹は滿三年の任期を了え、淳熙八年（一一八二）三月二十四日に南康軍を去る。四月六日には周敦頤（濂溪、一〇一七—一七三）が隱棲した廬山の書堂すなわち光風霽月亭に遊ぶ。その際の紀念の題名中に、張揚卿・王沅・周頤・林用中・陳祖永・許子春・王翰・余隅・陳士直・張彥先らとともに黃榦の名も見えているから、かれは朱熹の任内にふたたび老師のもとを訪れていたと考えられる。だが、黃榦はそのまま崇安に歸る老師に隨伴せず、またしても歸郷したようである。朱熹の「答劉子澄」第二書（別集・卷三）にいう、

わたくしは幸いにも變りありませんが、伯恭（呂祖謙）が亡くなり、悲痛の想いは口で申せません。……昨年、敬夫（張栻）を哭したばかりなのに、いまた伯恭がかかることになり、われらが道の衰微はまことに甚だしく、天意やはたして如何、……直卿がちかごろ人を寄こして結納をおさめて來ました。姪<sup>甥</sup>の話はだめになり、わたくしのむすめです。かれとは來春いっしょに金華（すなわち呂氏兄弟のところ）へ旅する豫定になっておりました。いま伯恭の訃報を聞きましたからには、斷然約束どおりやるでしょう。わたくしはいっしょにでかけて伯恭を哭しましろう、やはり前約を破りたくありませんから。

某幸如昨。但伯恭逝去。令人悲痛不可言。……去年方哭敬夫。今伯恭又如許。吾道之衰。一至於此。不知天意如何。……直卿近遣人來納幣。甥女不成。却是某女子也。渠來春同爲金華之行。今既聞伯恭訃。決當如約。某當一與俱往哭伯恭。亦不欲爽前約也。

張栻につづく呂祖謙（伯恭）の死の報せがとどいたのは、淳熙八年（一一八二）八月である（年譜・卷二）。みぎの書翰はそのころのものであるが、奇しくも、郷里に在る黃榦と朱熹の三女との婚約が成立したことを傳えている。

朱熹は同じ月、提舉兩浙東路常平茶鹽公事、いわゆる浙東提舉として浙江省紹興縣に赴任し、翌九年（一一八二）九月十二日まで第三の外任の職にあって天災のあいにくぐ情況のもとで忙しく活躍し、そ

の間十一月己亥(二十七日)には延和殿に召されて、社倉法の推進を孝宗に進言するし、淳熙九年(一一八二)正月十七日には呂祖謙の墓に詣でて哭する(「題伯恭所抹荆公目錄」、文集・卷八十二)。さきの朱熹の「答劉子澄」第二書における黃榦との約束は、異なる情況のもとにおいて交されたものだが、黃榦が同行した形跡はないし、そもそも紹興出向の朱熹のもとには随行しなかったらしい。朱熹の「答黃直卿」第三十七書(續集・卷二)には、「浙中はひどい旱ばつです——浙中旱甚」とか、「江西の任命は封事を上呈したからです——江西除命。緣上封事」とあるのは、淳熙九年の八・九月ごろ紹興に在って書かれたものである。「江西の除命」とは、淳熙九年八月に江南西路提點刑獄を命ぜられたことをさす。さらに、この書翰の冒頭には任伯起(任希夷)の語を引くことから、任伯起がここへ來ました——任伯起來此」と告げる第三十六書も同じころの執筆とわかる。そのころはあたかも黃榦の新婚期であったかもしれない。その後における黃榦の師事情況はどうか。朱熹の「答劉子澄」第七書(ただし文集・卷三十五收)にいう、

七月二十一日、熹<sup>それがし</sup>つしんで通守奉常子澄老兄に拜呈します。……以前はまだしも敬夫(張栻)・伯恭(呂祖謙)から時おり教示を垂れてもらい、啓發してもらえましたが、二友ここに亡く、絶えてそのような言葉を耳にしません。……直卿は長沙へ受験に赴き、清江で病氣になり、幸い向どのに診察してもらいました。先日そのことを聞き、急遽人をやって詳しい情況を探りに

行かせましたが、二旬にもなりますのにまだもどらず、たいへん氣がかりです。しかし、きつともう快方に向かい、西へ旅立っていることでしょう。……

七月二十一日。熹頓首再拜子澄通守奉常老兄。……前時猶得敬夫・伯恭時惠規益。得以警省。二友云亡。耳中絶不聞此等語。……直卿赴試長沙。病於清江。賴向丈診視之。前日聞得。亟遣人往覓信。至今兩旬未還。甚令人懸心。然必是已向安。遂西行矣。……

ここにみえる長沙における受験とは、あきらかに科擧の地方試すなわち解試をさす。朱熹が「二友ここに亡し」と張栻・呂祖謙の死を歎くことばを挿入するこの書翰の執筆時點は、ふたりの死からはなはだしくは経過していいところとおもわれる。とすれば、この解試は淳熙十年(一一八三)のそれであるに違いない。『朱子年譜』(卷二)がみぎの書翰を前年の「壬寅」(淳熙九年、一一八二)に屬せしめているのは、あきらかに誤りである(九年は解試の施行年でない)。

ちなみに、これは本稿にとってあまり重要なことでないが、黃榦が長沙において受けるべき地方試は、通常の解試でなく、轉運使のもとで施行される特別試験、いわゆる漕試であつたらしい。朱熹の「與向伯元(向滄)」書(別集・卷四)にいう、

黃增はすでに三山(福州)に歸り、馬安撫使の招きに應じて行きます。今秋の漕試のことを考えてです。

黃增已歸三山。赴馬帥之招。爲今秋漕試計也。

「漕試」については、わが宮崎市定博士に詳しい解説がある（宋代の文獻では趙升『朝野類要』卷二・漕試がある）。

州の解試を受けんとする者が、若し親戚が其州の官吏であったり、或は試験官であつたりして之を回避せねばならぬ時、及び官吏の子弟が父兄と共に任地に在り本籍を離るること二千里以上にして本州の試験を受けるに不便なる時には、漕司即ち轉運使の許に赴き、その監督下に別の試験官から試験を受ける事が出来る。之を漕試・牒試・或は類試・或は別頭試と呼んだ。

——『科擧』p.133

前掲の朱熹の書翰にみえる「馬帥」は馬姓の安撫使であろうが、誰をさすか未詳である。また、黃榦がなぜ漕試のほうを受けねばならなかったか、その理由もいまは考察するいとまがない。ひごろから「己れの爲めにする學問」を主張する朱熹は、科擧受験に對してしばしば嫌惡をしめすが、みぎの書翰の下文においても、黃榦に對して不滿の意をもらしている。

若い連中は立身出世のことを忘れず、そのために畫策しますのは、やはり笑止の沙汰です。

後生輩未忘進取。爲此計較。亦復可笑耳。

なお、前掲の朱熹の「與向伯元」書によって、黃榦は「今秋の漕試」を受けるために朱熹のもとから、郷里の福州に歸つていったこと、したがって、その上限こそわからぬが、かれは淳熙十年（一一八三）の春ごろまで朱門に在ったことが知られる。

ところで、受験途次における黃榦の病氣は、果たして朱熹が豫想したごとくに快癒して、「西行し」（長沙への旅をつづけ）えたであろうか。この點についてもまったく資料を缺くけれど、つぎに掲げる黃榦の「與晦庵朱先生書」第一（黃文肅公文集・卷二）から察すると、かれは受験を斷念して病軀を故郷の福州へ運んだと考えられる。

榦は母のもとに仕え、幸いに無事であります。病後の疲れがありますので、他のつきあいを絶ち、舊書をひもとき、けつして怠けてはおりません。

榦侍親幸安。病餘倦乏。無他往還。番閱舊書。不敢自廢。

この書翰の末尾に付せられた編者の雙行注にいう、

この書翰には「主管徽猷先生」とあり、また歲晚天寒的時候見舞のことばがある。

書稱主管徽猷先生。又有歲晚天寒之間。

朱熹が「直徽猷閣」の命をうけたのは淳熙九年（一一八二）八月であるが、みぎの書翰は同十年（一一八三）末のものと考えられる。そのころでさえ黃榦はなお病後の衰弱状態にあったのである。

だが、みぎの書翰の下文にはいう、

榦は、來年そちらで塾生をお取りにならぬなら、同志たちでたがいに切磋したいと思ひましたので、年あけの四、五日ごろにここを出發するつもりでおりましたところ、ちょうど彦忠（陳士直）から手紙をもらひ、なんでも來春土地を求めに歸りたいということ、蔡季通（元定）どのも同行されますとか。こ



こへ來ても深いなじみはあるまいとおもいますので、しばらく待たざるをえません。二十日してこへみえなければ、<sup>わたくし</sup> 榦は出發すると約束してありますが、先生のお考えはいかがでしょうか。

榦以來歲彼中不招館客。欲得朋友相切磋。遂欲開歲四五日即離此。適得彥忠書。聞欲來春歸尋地。季通蔡文亦同行。恐其至此無他深密相識。勢須少候。已與之約二十日不到此。榦當即啓行。不審尊意如何。

これに據れば、黃榦は淳熙十一年（一一八四）の新春に崇安の朱熹のもとにやって來たと考えられるが、それを示す直接の資料は見あたらない。われわれは、それから四年をへた淳熙十五年（一一八八）に至って、はじめてかれと同席する記録を残す弟子たちを見いだすのだが、その間、黃榦は終始朱熹のもとに侍していたと推定される。それが冒頭部分に紹介した「いっしょにいること多年に及んだ」という朱熹の述懐の中心を占めるのであろう。

だが、黃榦は淳熙十五年（一一八八）十一月初旬には、朱門を離れていた。その考證は本稿の萬人傑の章にゆずる（p. 280）が、そこに引いた朱熹の「答黃直卿」第二十三書（續集・卷一）の下文にいう、

直卿どのの來年の計畫は、いったいどのように決まりましたか。この人（手紙の傳達者）がもどりますときに報せてください。

もし後山にいらっしゃるなら、この學生たちにも參れるものがありますし、<sup>わたくし</sup> 老拙も時に出かけて行ってもよろしい。

直卿來歲之計。果何所定。此人回幸見報。若在后山。此間諸生亦有能往者。老拙亦時可一到也。

ここにみえる「後山」は雅稱であるかもしれないが、黃榦の朱熹にあてた第十書（黃文肅公文集・卷二）に「復た後山の蔡文の計を聞く」とあるから、蔡元定の出身地建陽（福建省）そのものか、それともその管下の地名をさすに相違ない。黃榦は翌淳熙十六（一一八九）には建陽に來る意志をもちしたのであろう。だが、かれはこの年の十一月、朱熹が知漳州を命ぜられたころまでは、たしかになお郷里にあった。朱熹にあてたかれの書翰・第五信（黃文肅公文集・卷二）にいう、

先生の「將漕之命」は、たぶん廟堂が意を決して、三州（漳州・汀州）の經界法を實施させようつもりですから、ほんとはやはりご辭退なさりにくいでしょうし、もしもそういうことなら、地方にとってまたとないチャンスです。

先生將漕之命。恐是廟堂決意。欲行三州經界。其實亦恐難辭。果爾。鄉邦不世之遇也。

「將漕之命」とは、淳熙十六年（一一八九）八月に發令された江南東路轉運副使の除任をさすであろう。

さらに、朱熹の「答黃直卿」第二十六書（續集・卷二）にいう、  
ちかごろ郡事は次第に簡素化され、歲事（農作情況）も期待

がもてますが、經界法施行の指令はまだ下りません。たぶんデマに揺さぶられているのでしょう。

近日郡事浸簡。歲事亦可望。但經界指揮不下。恐復爲浮議所搖。

この書翰はあきらかに、朱熹が漳州へ赴任して（紹熙元年1190、四月二十四日）、若干の時日を経過したところに執筆されたものであり、そのころも黄榦はなお故郷にあった。

しかし、まもなく黄榦は漳州の朱熹のもとにやって来て、陳淳・徐寓その他、朱熹が漳州で見いだした俊才たちと交渉をもつ。そのことは前掲リストの左に示した關係が如實に物語ってくれる。楊道夫・童伯羽・徐寓・陳淳については、いずれも前稿を参照されたい。また李閔祖は本稿に別章を設けてある。ここでは、閩丘次孟のみについて補説しておく。

閩丘が姓、次孟はあざなで、名諱・出身ともに未詳。學案・同補遺にも収めていないが、語類・卷一二〇・訓門人にみえる。語類では徐寓・楊道夫（2）の所録に現われるだけだから、朱熹の知漳州期における弟子である。

さて、黄榦の漳州滞在は、次に掲げる朱熹あての第三書（黄文肅公文集・卷二）によれば、老師の任期満了時（紹熙二年1191年四月二十九日）までは續かなかつたらしい。この書翰はかれが郷里の福州に歸着してただちにしたためたものである。

榦は二姐（朱熹の次女か、とすれば黄榦の義姉）とごいっしょに、こどもたちをつれて十九日に親許に到着しました。途中おかげをもつて一同つつがなく家につき、兄弟ぜんぶが集まり、親老は大喜びです。

榦同二姐。領兒女輩。以十九日達侍旁。途中頼尊比皆無恙至家。兄弟畢集。親老懽喜。

この書翰の執筆時點は、下文につぎの如くあることによってほぼ推定しうる。

浦城の盜賊が百餘人を呼集し、長江沿いの一交易場がほとんど焼かれましたが、幸いすでに撲滅されました。

浦城之寇。嘯聚百餘人。臨江一市。焚毀太半。幸已撲滅。

みぎの事件は『宋史』卷三十六・光宗紀の紹熙元年十二月戊申（二十八日）の條につぎの如くみえている。

浦城の盜賊張海が叛亂を起す。勅命により提點刑獄の豐誼に逮捕させた。

浦城盜張海作亂。詔提點刑獄豐誼捕之。

すなわち、黄榦の歸郷時點は、紹熙二年（1191）の正月または二月の十九日であつたろう。なお、この書翰には呂祖儉（子約）が藉田令に除せられたことにも言及している。

この時の黄榦の歸郷は、翌三年（1193）まで續いたらしい。朱熹にあてた第四書にいう、

榦、侍旁は幸いに無事です。ひまをぬすんで學習を續けて

おりますが、昨年よりいくらか餘暇にめぐまれたにすぎません。承われば、祠祿の命がすでに下り、ついに閑退の志を遂げられましたこと、われわれ學生たちにとって幸いです。……大哥のお墓、たしかな場所が見つかりましたかどうか。……

餘侍旁幸安。偷閑溫習。比去歲差得暇耳。聞祠命已下。竟遂閑退之志。學者之幸也。……不知大哥寬宥。有定所未邪。……

“大哥”すなわち朱熹の長男塾は、紹熙二年（一一九二）正月二十九日に婺州（浙江省金華縣）において急逝した。朱熹自身が撰した「亡嗣子壻記」（文集・卷九十四）によれば、翌三年（一一九二）十一月甲申（十五日）に埋葬されているが、その墓地の選定に若干の問題があったのだろう。福建地方は特に風水説がやかましい土地柄らしく、父に先だつた塾の場合はいっそう論議されたのもあろう。みぎの書翰に言及する「祠祿の命が下りた」とは、たぶん紹熙三年（一一九二）二月におけるそれをさす（年譜）。

黄榦のこの時の歸郷が少なくとも同じ年の夏まで続いたことは、福州出身で近隣に住み、將來かれが朱熹から委託された禮書の編纂にも協力した鄭文通（あざなは成叔）に與えたかれの書翰によってわかる。その書翰の内容は、鄭から依頼された「怡閣記」（黄文肅公文集・卷七）に關するもので、末尾につきの雙行注がある。

紹熙壬子の年の夏、成叔が「怡閣記」を依頼したのである。

紹熙壬子夏。成叔請怡閣記也。

このように紹熙三年夏ごろなお福州に在った黄榦も、やがて朱門

に復歸する。早ければその年次中であるかもしれないが、確證はない。とにかく、語類中にこれほど多く紹熙四・五年（一一九三・九四）を記録年とする弟子たちとの同席例が見られるからには、兩年次におけるかれの師事は疑う餘地がなからう。ただ、紹熙五年（一一九四）は本稿でもたびたびふれるように、朱熹の最後の外任、知潭州・荆湖南路安撫使としての四か月にわたる長沙出向と、つづく煥章閣待制兼侍講としての二か月足らずの上京があるから、兩年次の師事を連續するものとして考えることは許されない。黄榦の場合は、次章に説くようにあきらかに朱熹の長沙行に隨伴している。しかし、かれも家族を擁しての隨行であろうから、朱熹の上京には同行せず、建陽に引揚げて行つたと想像される。

朱熹は上京中の數次の進言が韓侂胄らの反撥にあつてやがて罷免され、十一月二十四日建陽に歸る。その間、おそらく黄榦も相談にあずかり建築にかかつていたのであろう、十二月には竹林精舍（滄洲精舍）が完成する。そして、十二月十三日には、精舍竣工を記念する釋菜が舉行されたこと、前稿（p. 173）のべたとおりである。その式典にあつて、かれは徐寓・葉賀孫・黄顯子・蔣叔蒙らとともに司祭の役を擔當している。

このときの黄榦の師事は、なお一兩年つづいたろう。湯泳・董銖らとの同席がそれを物語る。もっとも、董銖はその章に説くように、黄榦と相前後して入門し、數次の師事期をもつ古參の弟子であるから、かれとの同席は必ずしもその記録年の起點・慶元二年（一一

九〇に屬するとはいえぬだろう。

湯泳、あざなは叔永、鎮江府丹陽縣（江蘇省）の人。「語錄姓氏」が「乙卯（慶元二年）所聞」とする記録者である。朱門の記録者ではもうひとり同名の胡泳（一一九九）もあるが、編者は胡泳の所録にのみ姓を冠して區別している。湯泳の記録には竇從周（一一八六）・周公謹（二）が登場するだけで、かれは他人の所録の、わずかに竇從周のそれに兩見するにすぎない。竇從周はかれの同郷の先輩であり、その記録年における入門師事と別に長沙期の師事が確認されている（前稿 p. 165, p. 184 および本稿 p. 281）。同郷のふたりが同席するから、相伴なつての師事に相違ないが、湯泳は確認されている竇從周の兩次の師事期に朱門に在った可能性が少ないとあれば、湯泳の記録年次に竇從周が三たび朱門を訪れたのであるかもしれない。なお、周公謹は湯泳の所録にのみ登場し、學案・同補遺にも收めず、名諱・籍貫ともに未詳（著名な周密のあざなも公謹であるが、時代が合わない）。いまはいちおう湯泳の記録年を信ずるほかない。

さて、つぎに確かなデイトをもつて——といっても年次のみにとどまるが、ともかく黃榦の消息がわかるのは、慶元二年（一一九六）である。かれの「與鄭成叔（鄭文通）」第六書（黃文肅公文集・卷七）の末尾に付せられた編者の付注にいう、

慶元丙辰（二年）。先生はこの年、晦翁のところより歸郷され  
た。

慶元丙辰。先生是歲自晦翁所還里。

かれが歸郷した理由は、實は母の死であつた。朱熹の「答蔡季通」第九書（續集・卷三）にいう、

また直卿が不幸のために歸りました。先日、順昌縣へ弔問に行つて來ましたが、かれは、郷家に歸つて葬事が終つてから、履之（劉砥）兄弟とみんな（禮書を）整理しようといつております。……

直卿又以憂歸。前日到順昌弔之。渠云。歸安葬畢。却可與履之兄弟大家整頓也。……

この書翰によれば、黃榦の母は順昌縣（南劍州の屬縣、今名同じ）で亡くなつたのであらう。黃榦は既述のように五人兄弟の四男であり、長兄黃杲は淳熙七年（一一八〇）に死去、末弟杓も天死している（朱熹「朝散黃公墓誌銘」）。次兄の黃東（あざなは仁卿）もやはり朱熹に學んだが、當時は吉州の萬安縣（江西省）知事をしていた（黃文肅公文集・卷三十五「仲兄知縣墓表」）から、母はおそらく三兄黃查の寄寓地で亡くなつたのであらうか。

順昌縣にかけつけたであらう黃榦はやがて歸郷する。朱熹に與えた第九書にいう、

榦は去年（母の靈柩を）護つて家へ歸りました。  
榦去歲扶護還家。

この書翰の下文に據れば、母の柩を埋葬する件について、兄黃東と弟たちとの間に激しい論争が交されたらしい。すなわち、弟たち

は、かつて蔡元定が風水説からみて是とし、また知友の陳孔碩・余元一・潘柄・陳士直・鄭湜（いずれも朱門の弟子）らがみな賛成する墓地を主張したが、兄黃東はこれに頑強に反対して譲らず、ついには蔡元定まで罵倒する始末である。

蔡季通は風水の邪説を信じるから、わが身は流され息子は死ぬというような災難に遭ったんだ。

蔡季通信風水邪説。故有身竄子死之禍。

そして、弟たちがあくまで反対するなら、母の遺骸はそのまま放置して葬るまいとまでいうので、黃榦らはやむなく讓歩して、六月十六日、兄が主張する候補地に埋葬することに話が決まった。さて、この書翰にあつて、われわれが注意すべきことは、黃東は蔡元定が流罪になった消息をすでに知つてゐること、および母の埋葬日が六月十五日だということである。前者の蔡元定は、『儒學の禁』の犠牲者であり、かれが道州（湖南省道縣）編管の處罰をうけたのは慶元二年（一一九六）十二月である。結局かれは慶元四年（一一九八）八月に配所で病死するが、そのことは朱熹にあてた黃榦の第十書ではじめてふれられてゐる。

また、蔡どのの訃報を聞き、胸を叩いて慟哭すること數日に及びました。

復聞蔡丈之訃。拊心號慟。累日不能已。

この第十書は末尾の注記により、慶元四年（一一九八）十一月十九日の執筆とわかる。したがって第九書の時點は、むろん蔡元定の

病死の報知入手以前であり、慶元三・四年いずれかの五・六月の間であると認定される。

ところで、兄が希望する埋葬地に黃榦らが反対したのは、單に風水説にのみ影響されたのでなかった。黃榦の「與鄭成叔（鄭文通）書」第七信（黃文獻公文集・卷七）にいう、

榦は罪深い不孝もの、先妣<sup>はは</sup>の葬事を近日中に行のうことになり、亡父の舊墳をひらいて合葬しようと思ひましたが、お棺が水流に衝きやられております。……

榦罪逆天。先妣葬事有日。欲啓先人舊墳。舉以合葬。棺爲水所舂撞。……

この書翰の末尾には「戊午」という注記があるから、慶元四年（一一九八）のものであるが、前掲の朱熹にあてた第九書にやや先行するとしても、あまり大きな隔たりはないと思われる。とすれば、第九書は慶元四年の五・六月の間に書かれたと斷定しうるし、したがって、第九書にみえる「去年（去歲）」は慶元三年（一一九七）をさすことになる。

だが、慶元二年（一一九六）に亡くなった黃榦の母の遺骸がそれほど長期にわたつて寄寓地に置かれていたはずはないから、母の死は慶元二年の少なくとも後半、どうかすると歳末に近いところであつたのではないか。筆者がかような廻りくどい考證を敢えて行なつたのは、實は、黃榦が朱門を去つた慶元二年（一一九六）も、その多くの部分かれはなお朱門に在つたと考えるべきことを知るためである。

たとえば、前掲表における董銖（二一九六）との同席例などが、そのことと関連する。

さて、郷里の福州閩縣に歸り、母の喪に服していた黃榦の、その後の消息については、既述の如く、慶元四年（二一九八）十一月十九日になお郷里にあることを確認した。この書翰の冒頭には、母の埋葬完了をのべているが、埋葬の地が適地でなかったことは、かれに深い悲しみを刻みつけた。黃榦はつづけていう、

さらに嚴冬も近づき、病軀が寒氣に見舞われましたので、車に乗って郷家へ歸りました。

復迫隆冬。病軀爲寒氣所襲。輿病還家。

黃榦が蔡元定の訃報を聞いたのは、そのように精神的にも肉體的にも打ちのめされていたさなかであったから、衝撃はいっそうこたえた。

そのためわたくしのノイローゼはますますつのり、幾夜も續いて寝につくことができず、紫蘇香附などの疎導薬をたくさん飲み、やっといくらか良くなりました。すぐにも参上して師席に侍りたい存念ですが、病後の體はなお寒さに氣おくれを覺えますので、さらに旬日もせねばことを離れることができません。喪禮はいずれ近日中に携えて参り拜呈いたします。

以是氣疾轉甚。累夜不能就枕。多服疎導藥如紫蘇香附之屬方少瘳。念欲即走侍師席。以病後尙怯寒。更旬日方可離此。喪禮旦夕携往拜呈。

かれはそのころ、病氣からようやく立ち直ったばかりであり、しかも近日中に朱門に赴くことを約している。同じ意志は、末尾に「冬至後二日」と記す「林仲則二子名字序」（黃文肅公文集・卷十九）にもうかがうことができる。

慶元戊午（四年、二一九八）、わたくしは箕山に退居しておりましたとき、林仲則の二子、庚と武というのが栗山から参り、わたくしのもとに學びました。明年わたくしは武夷への旅に出る豫定ですが、ふたりの子息も冠はちになるといので、仲則が手紙を寄こして参りました……。

慶元戊午。予屏居箕山。林仲則之二子曰庚曰武者。自栗山來從予遊。明年予將爲武夷之行。而二子者亦且將冠。仲則以書來……。

しかし、黃榦の訪師は、實際にはなかなか實現しなかった。朱熹あての書翰・第十一信にいう、  
ついに書會（研究集會）にしばらく、まだお側に参れぬことが残念です。

終以書會相絆。未能走侍爲恨。

この書翰の下文には、またつぎの如くいう、  
二三日前にはじめて、退休のご請願がすでに許可になったことを伺いました。

兩日方聞引年之請已下。

朱熹が七十歳を迎えようとして退休願いを提出したのは、慶元四

年（一九八）十二月であり、それが承認されたのは翌五年（一九九）四月である。この書翰の末尾には「五月朔旦の手紙である」という注記があるから、執筆時點は慶元五年（一九九）五月一日とわかる。黄榦はそのころもお福州に在った。

「偽學の禁」が熾烈化するさなか、しだいに衰えゆく肉體を擁していわゆる「禮書」の編纂にのみ生きがいを求めて、残んの生命の火を燃やしつづける朱熹が、ひたすら黄榦の來訪を待つさまは、前に引いたかれにあてた書翰の幾通かによって手に取るごとくにわかる。

筆者は前稿において、朱熹が死の前日（慶元六年＝一二〇〇、三月八日）にしたためた黄榦あての書翰（文集・卷二十九）にみえる、ほとんど絶望的なことばから、「慶元五年の後半以後にふたり（劉砥・劉礪兄弟をさす）が朱門を訪れた可能性はほとんどない」とのべたが、この想定は誤っていた。朱熹が待ち望む黄榦はついに老師を訪問し、劉兄弟のうち少なくとも弟の劉礪はその黄榦に随伴して來たと信ぜられる。まず黄榦の訪師については、かれの「篤孝傳公（傳修）墓誌銘」（黄文肅公文集・卷二十五）にいう、

庚申の春、榦は晦庵先生のお側に侍っていたことがあり、麻經・管履の装いで、衣服をかかえて進み出る人があった。衣服も重たげな憔悴のからだだして、ことも口に出しかねてつらそうだ。姓名をたずねると、それが傳公だった。ちょうど學生た

ちと武夷山のもとで禮を學習されている最中の先生は、傳公のりっぱさが氣に入り、かれが携えて來た從政公（傳公の父）の行狀に書きつけられた、云々

庚申之春、榦嘗侍坐於晦庵先生之側。有麻經・管履扶服而前者。貌不勝衣。言不能出諸其口。問其姓名則公也。先生方與諸生習禮於武夷之下。愛其賢。書其所携從政公之事狀。曰。……「庚申」はすなわち朱熹が死んだ慶元六年（一二〇〇）であり、みぎの墓誌の下文にも「まもなく先生は亡くなられた——未幾先生沒」とある。もっとも、この年の春に黄榦が朱門に在ったことは語類・卷八十四（論修禮書）第三十八條によっても證明される。

庚申の年二月既望、先生に黃商伯（瀾）寺丞に與えられた書翰があり、いう、「伯量（胡泳）はあいかわらず門館におりますか。禮書はちかごろ黃直卿が長樂の一友人とともにここにいてくれ、やっと整理に着手することができました。ただ、（わたしは）病氣でぐったりしている時が多く、それにつきあいや手紙書きに妨げられて、緒に就くことができませんし、直卿は直卿でむこうの地方の人たち用に設ける塾の約束があつて、どうなりますことやら。もしここに殘ることができねば、とくに手のない思ひです。さきごろ伯量に殘つて協力してもらわなかったことが残念でなりません。もしかれが今年書會を作らないのなら、意向を傳えてもらいたいのです、一ど來て數か月留まってもえれば、千萬かたじけないと。」

庚申二月既望。先生有書。與黃寺丞商伯云。伯量依舊在門館否。禮書。近得黃直卿與長樂一朋友在此。方得下手整頓。但疾病昏倦時多。又爲人事書尺妨廢。不能得就緒。直卿又許了鄉人館。未知如何。若不能留。尤覺失助。甚恨鄉時不曾留得伯量。相與協力。若渠今年不作書會。則煩爲道意。得其一來。爲數月留。千萬幸也。

この一條は胡泳（二一九）の所錄にかかり、末尾にはさらにかれによる雙行注が付いている。

手紙を書かれた時は、易簣から數えて二十二日前であり、だからお手紙をいただいてもかけつける間がなかった。

作書時去易簣只二十有二日。故得書不及往。

ここに「庚申二月既望（十六日）」とあり、朱熹の死にさきだつ「二十二日前」とあるから、その「二月」は閏二月である。胡泳の注記は十數年後に書かれたものようであるから、かれの記憶ちがいか、それとも「二十二日前」は「五十二日前」の誤りであるかもしれない。

ともかくも、黃榦は慶元六年（二二〇〇）閏二月ごろ確かに朱熹のもとにあった。黃灝に與えた朱熹の書翰にみえる「長樂の友人」とは、おそらく劉礪（あざなは用之）をさすであろう。劉砥・劉礪の兄弟は福州長樂縣の出身である（前稿p.161）。當時兄弟は黃榦と組んで禮書編纂のしごとに従事していた。その弟のほうだけ黃榦とともに朱門にかけつけたのであろう。朱熹があえて姓名をいわなかった。

たのは、黃灝が劉礪と面識のなかったことを示すだろう。ところで、このとき黃榦が劉礪とともに朱門にあったとすれば、筆者が前稿（p.161）で引用した朱熹の「答陳才卿」第十書にみえる、

禮書は直卿と劉用之がここにいてくれますので、次第に形を成してゆけます。

禮書。得直卿・劉用之在此。漸可整頓。

という言及も、このころの情況をいっただのであろう。

このときの黃榦の訪師はまた、別章（p.313）に詳しくのべたように、包揚が數年ぶりに朱門を訪ねた時の黃義剛の所錄によっても證明される。その際、朱熹はかれが「數年のあいだ三山にいたから、やはり同志たちにずいぶん役だったことだろう」といって、かれに講義を命じている。

それだけでない、ほかに間接的資料の數條、すなわちかれと董銖・林夔孫らとの同席例もそれを證するし、ことにかれが陳淳・黃義剛のふたりと同席する二條は、黃榦らの來訪が前年末か年頭早々であったことを物語っている。なぜなら、陳淳の第二次師事は、慶元五年（二一九九）十一月中旬に始まり、翌六年（二二〇〇）正月五日に終っているからである（前稿p.169）。それに劉礪の記録年次が慶元五年（二一九九）であることも、そのためであろう。

さて、朱熹の死の二十二日前（あるいは五十二日前）朱門にあった黃榦（おそらく劉礪も）は、老師が危惧したとおり、まもなく福州に歸って行った。その時期は不明だが、建陽から福州までの旅程がわ



かれば、ほぼ想定することが可能であろう。朱熹が死の前日にしたためた「與黃直卿書」(文集・卷二十九)の冒頭にいう、

三月八日、熹啓白。使いがもどりお便りを頂戴して、すでに三山(福州)にご到着、ご一行が無事であることを知りました。

三月八日熹啓。人還得書。知已至三山。一行安樂。

朱熹はその翌日、三男在と知友范念徳とともに、黃榦に於てた遺書をもつて永遠に歸らぬ人となった。

以上の考察結果をまとめると、黃榦の師事期はつぎの八次が挙げられる。

- 第一次……淳熙三年(一一七六)二月中旬から同七年(一一八〇)はじめまで、朱熹の知南康軍期に及ぶ。
- 第二次……淳熙八年(一一八二)知南康軍期の末期ごろ。
- 第三次……淳熙十年(一一八三)春ごろ。
- 第四次……淳熙十一年(一一八四)正月から同十五年(一一八八)後半ごろまで。
- 第五次……紹熙元年(一一九〇)、朱熹の知漳州期中期から、翌二年(一一九二)正月または二月はじめまで。
- 第六次……紹熙四・五年(一一九三・九四)。五年における朱熹の知漳州期をもふくむ。なお、上限は紹熙三年(一一九二)のある時點にさかのぼる可能性がある。
- 第七次……紹熙五年(一一九四)十一月二十四日から慶元二年

(一一九六)の後半ごろまで。

第八次……慶元五年(一一九九)末か翌六年(一二〇〇)はじめから、閏二月はじめごろまで。

長沙における弟子たち

紹興十八年(一一四八)春、十九歳で進士に及第、同二十一年(一一五一)春、任官試験をも通過して以來、慶元五年(一一九九)四月、七十歳で致仕するまで、朱熹はずっと官籍に身を置いた。この五十年間の大半は、いわゆる祠祿官として第二の故郷建陽附近に住んでいたが、五たび地方官として異郷に出向した。

- (1)同安縣主簿 紹興二十三年(一一五三)七月から同二十七年(一一五七)十月まで
  - (2)知南康軍 淳熙六年(一一七九)三月末から同八年(一一八二)三月二十七日まで
  - (3)浙東提舉 淳熙八年(一一八二)八月から同九年(一一八三)九月十二日まで
  - (4)知漳州 紹熙元年(一一九〇)四月二十四日から同二年(一一九二)四月二十九日まで
  - (5)知漳州 紹熙五年(一一九四)五月五日から八月末まで
- そのほかに、奏事を命ぜられて首都に滞留したことが、前後四次を数える。

(1) 紹興三十二年(一一六二)八月

(2) 隆興元年(一一六三)十月

(3) 淳熙十五年(一一八八)六月四日

(4) 紹熙五年(一一九四)十月二日から閏十月二十一日まで

さらに、私用により郷里を離れたことも少なくないが、朱熹のそうした他出の機に、滯留地付近の士人が数多く師事したことは、申すまでもない。とりわけ、五次にわたる外任地における朱門の盛況は、本稿の考察にとって重要な役わりを果たしてくれる。その中でも、朱熹の晩十年間における兩次の外任、すなわち知漳州・知潭州としての出向期は重要な意義をもつ。前者の場合は、師事弟子の數量もさりながら、陳淳そのほか質的にすぐれた弟子を得て、朱熹自身にとって最も實のり多い時期であつたらしい。その期間の情況は、前稿の主として陳淳の章を参照されたい。

ここには知潭州期、湖南省長沙における弟子について一括してのべる。

朱熹が知潭州・荊湖南路安撫使に除任されたのは、紹熙三年(一一九三)十二月十日である。年譜によると、黃裳(一一四六—一九四)はもともと朱熹を中央に招く意志をもっていたが、留正(一一二九—一二〇六)は朱熹のはげしい性格が他と摩擦をおこすことを惧れて反對し、かくてとりあえず知潭州として起用することに決したという。ただし、事實や否やは確かでないが、この任用には裏話が秘められていた。この年の正月、新年慶賀のため金に派遣された宋朝の使節

が、金人から朱熹の出處進退を問われ、敵國からマークされているかれの存在がにわかに再認識されて、この發令をみたという(語類・卷一〇六・第四十七條、王過錄)。

辭令をうけた朱熹は例のごとく辭退をくり返す。事實、健康狀態もおもわしくなかった。しかし、翌四年(一一九四)二月に入り洞獠という一小部族が荊湖南路地區に侵攻したので、政府は拜命督促の使令を出し、朱熹はやむなく四月某日長沙への赴任の旅につく。いま、そのおりの赴任途次の經過について、若干の事實を知りうる。本稿の意圖から少しく外れるが、朱門弟子と關連する部分もあるので、ついでに紹介しておこう。

紹熙五年四月二十一日、朱晦庵先生は天子の命を奉じ、安撫使として潭州へ赴任される途中、臨江軍を通過された。長孺は吉州吉水縣の山中から隣境入りして先生を迎え、ごいっしょに進んだ。わたくしが四拜の禮をすると、先生は半ば受け半ば答えられた。わたくしは跪まづいて劄子(なまのし)をさし出した。……長孺が立ちあがると、先生は食事に引きとめ用意の酒が三めぐりして、しばし歡談がつづき、食事がすんで辭去した。後刻これを記す。

紹熙甲寅四月二十一日。晦庵朱先生奉天子命。就國于潭。道過臨江。長孺自吉州吉水縣山間越境。迎見先生與之進。某四拜。先生受半答半。某跪進劄子。……長孺起。先生留飯置酒三行。燕語久之。飯罷辭去。退而記之。——抄本語類・卷一一六、第五十九條(楊長孺錄。通行本は卷一一八・第八十八條、ただしデートを缺く)

みぎは「語錄姓氏」に「甲寅（一一九四）記」と注する楊長孺の、唯一の記録である。

楊長孺、あざなは伯子、東山と號し、諡號は文惠、廬陵郡吉水縣（湖南省）の人。かの楊萬里（廷秀・文節、一一二七—一二〇六）の長男で、父の官蔭により守湖州・廣東經略使・福建安撫使を経て集英殿修撰に至る。かれは家學を修め、がんらい朱門の弟子ではない。臨江軍は贛江と袁水の合流地點に近い清江縣（江西省）を治とする。吉水縣は贛江の上流一三〇キロに在るから、かれが朱熹を出迎えた地點は清江縣であつたろう。

朱熹は清江縣よりさらに西南進してやがて新喻縣を通過する。

紹熙五年の夏、わたくしは長沙に赴き、途中新喻を通り、いまは亡き煥章閣直學士、謝昌國公に拜謁した。云々

紹熙甲寅夏。予赴長沙。道過新喻。謁見故煥章學士謝公昌國。云々——文集・卷八十三「跋郭長陽送書」

謝昌國公とは謝諤（一一二一—一九四）をさす。新喻縣の人で、昌國はそのあざな、『聖學淵源』五卷の著がある。當時は祠祿の官を得て郷里にあった。楊萬里が撰した「謝公神道碑」（誠齋集・卷二二）によれば、この年の十一月九日に病死しているから、朱熹はおそらく病氣見舞に訪問したのであろう。

かくて朱熹は、五月五日長沙に着任する。

さて、知潭州期における朱門の情況は、前稿（三七〇）に引用した龔蓋卿の所録によって一斑を窺うことができるし、年譜によれば、

書は郡事に精勵し、夜は學生たちと學問討論にふけり、しかも六十  
五歳で病身の朱熹は、<sup>いさゝか</sup>略かも倦れる色がなかった。たまたま龔蓋  
卿が入門した當夜の講席に集まった學生は七十名あまりだったが、  
この長沙期にはたしてどういう弟子たちが師事したか。「語類姓氏」  
によれば、紹熙五年（一一九四）を記録年とする弟子の數は、朱熹  
の生涯において最多をかぞえ、十六人にのぼる。

楊驥……淳熙十六年（一一八九）とこの年

楊至……前年とこの年

王過・林學蒙・輔廣……この年を起點とする

龔蓋卿・董拱壽・廖謙・舒高・蕭佐・孫自修・鍾震・吳琮・潘

履孫・李杞・楊長孺……この年のみ

このほかに、前年までを記録年の起點とする弟子も若干ふくまれているはずだし、朱熹が長沙へ出發するまでに建陽で師事した弟子もあるだろう。さらに、長沙出向に續いて天子の命により上京したかれが、十月はじめてから閏十月にかけて、奏事と進講に従つた約五十日間における師事者もあるうし、十一月二十一日に建陽に歸來してから後の師事者もあるだろう。したがって、同じ紹熙五年（一一九四）の師事者でありながら、その内譯はまことに複雑であることをあらかじめ覺悟しておかねばなるまい。いま、前掲のこの年次を記録年とする諸弟子のうち、はたしてどれだけが長沙期の師事者であるかを究明するために、まず、この年次に長沙以外において師事したことが確認される弟子を選別してみよう。

既述のように、楊長孺は朱熹の赴任途上で教えを請うたにすぎぬから、この期の弟子としてはまず除外される。

さらに、李杞はつきにあげるみずからの記録によって、首都における師事があきらかである。

紹熙五年十月、先生が侍講の職から祠祿官に任命され、靈芝寺で辭令を待たれていたとき、杞は行ってお會いした。

紹熙甲寅良月。先生繇經筵奉祀。待命靈芝。杞往見。——語

類・卷一九、第三十五條

李杞、あざなは良仲、木川と號し、平江府（江蘇省蘇州市）の人。かれは上記の下文によって、程端蒙の弟子であることが知られる。

學案・卷六十九にもいう、

朱文公は首都を去り、西湖の靈芝寺に假寓しておられた。見送るものが次第に減るなかで、先生（李杞）のみは獨りお側につき、質問して窮理の學を學んだ。

朱文公去國。寓西湖靈芝寺。送者漸少。惟先生獨從。叩請得窮理之學。

「良月」（十月、左傳にみえる）とあるが、ここは閏十月をさす。年譜にも當時の事情をのべていう、

二日のちの（十月）二十一日、韓侂胄は内侍の王德謙をやり、おすけのき内批を封して下付させた。先生はただちに謝辭の上奏文をわたし、……靈芝寺を出てそのまま旅路につかれた。

越二日戊寅。韓侂胄遣内侍王德謙。封内批付下。先生即附奏

朱門弟子師事年攷 續

謝。……出靈芝寺遂行。

なお、李杞の所録はわずかに四條、同席者としては輔廣、李茂欽が登場するに過ぎないが、輔廣の同席は後述するようにきわめて注目すべき事實である。

李茂欽（一一五三—一二二二）、名は誠之、婺州東陽縣（浙江省）の人、呂東萊の弟子で、のちに饒州教授・常州通判・知郢州をへて知蘄州に就任中、金軍との交戦で戦死する。『宋史』卷四四九および學案・卷七十三に傳記を収める。語類の中では李杞所録に一見するだけである。

孫自修、あざなは敬父（甫）、寧國府宣城縣（安徽省）の人。學案・卷六十九によれば、從弟の孫自新・孫自任とともに朱熹に師事したという。語類・卷一〇七（内任）第三條に、入門時の問答がみえる。

先生にお目見えしたとき、さっそくたずねた、「先生の進み難く退き易き風格は、天下のものがひとしく存知あげております。いま、新帝が位を嗣がれますと、ひらり一轉して中央に來られました。きっと大いに建設的な意見を提出されようとなさってることでしょう。」

先生は笑っていわれた、「あのときまずいことに長沙に出向したもんだから、任地でお召しにあづかり、固辭するわけにゆかないんだ。」

またたずねた、「いま侍従の職名を受けられました以上、すぐ去られることはゆるされませんよ。」

先生「それで弱っているんだ。」

また笑っていわれた、「もし病氣で處置なければ、やはり去るはかないさ。」

初見先生。即拜問云。先生難進易退之風。天下所共知。今新天子嗣位。乃幡然一來。必將大有論建。先生笑云。只爲當時不合出長沙。在官所有召命。又不敢固辭。又問。今既受了侍従職名。却不容便去。先生云。正爲如此。又笑云。若病得狼狽時。也只得去。——孫自修錄

これによれば、孫自修はあきらかに首都において師事したとわかる。しかも、かれは前記の李杞が朱熹を訪ねたとき、すでに老師のもとに侍していた。

程正思（程端蒙、一一四三—九二）の一弟子が會いに來た。坐が定まると、額にしわよせていわれた、「正思は残念なことをした。すがね入りで根性がしっかりしていた。道理を讀みとる點ではまだいささかあらかったが。」

有程正思一學生來謁。坐定疊頰云。正思可惜。有骨筋。有志操。若看道理。也粗些子在。——語類・卷一一七・第四條（孫自修錄）

李杞が西湖の靈芝寺で朱熹に會ったのは、紹熙五年（一一九四）閏十月である（p. 279）。孫自修は朱熹が出發する二十一日まで老師

の側に侍していたらしい。

先生が問われた、「以前もらった手紙では、大いに學問を研究したいということだが、いま言うべきことがあるかね。」

自修わたくし「先生があわただしく都をお立ちになるいま、ご教訓を承わる間がございません。」

「わたし自身があわただしくやっていなければいいだろうか  
な。……」

先生問。前此得書。甚要講學。今有可說否。自修云。適值先生去國匆匆。不及款承教誨。曰。自家莫匆匆便了。——語類・卷一一六、訓門人・第二十四條（孫自修錄）

かれは朱熹に會うより前に書面によって師事を申し入れていたのである。

孫自修の所録もあわせて十九條、葉賀孫が同時記録一條を残すほか、かれの所録には周樸が登場するに過ぎない。周樸については別項（p. 329, p. 333）を参照されたい。

みぎの李杞や孫自修は當人の記録によってあきらかだが、地理的近接からみて同じく首都における師事が想定されるものに、なお潘履孫と輔廣がある。

潘履孫、あざなは坦翁、潘友恭（恭叔）の子。「語錄姓氏」は、婺源の人、紹興に居すむ」と注するが、學案補遺・卷六十九は父友恭と

同じく、「金華（婺州金華縣、浙江省）の人」とする。「婺源」は婺州の誤りであるかもしれない。紹興は紹興府。朱熹に「答潘坦翁」書（文集・卷六十二）があるが、學術問答に終始する。かれの記録は二十九條、他の弟子たちとの同席例はまったくない。

輔廣については、前稿にその入門ないし第一次師事が、記録年の起點の前年（紹興四年、一一九三）にさかのぼる可能性をのべ、さらに、たとえ記録年どおりとしても、かれの八十五日間にわたる第一次師事は朱熹の長沙赴任以前であろうと想定した（前稿p.210）。かれの出身地は嘉興府崇德縣（浙江省）であり、現に李杞の記録によれば朱熹の首都滯在中に李杞と同席しているから、もう一つの可能性として、この時の師事に始まり、歸郷する朱熹に同行して建陽にゆき、そこで八十五日滯在したことも考えられぬではない。

上記の五弟子のほかに、この年を第二の記録年とする楊驥にも問題がある。かれについては前稿で言及し、第一の記録年（淳熙十六年、一一八九）に朱門に在ったことは、童伯羽・楊道夫との少なからぬ同席例があることにより、確かめえた。また、徐容（一一九二）との同席例もあることから、朱熹の知漳州期における師事をも想定した（前稿p.163）。しかし徐容は、葉賀孫・黃卓と同時に師事しており、紹熙二年を記録年とすることに誤りはなからうが、漳州の朱門に師事したとは必ずしも決めえないこと、葉賀孫の章（p.33）に説くとおりである。楊驥は上記の三弟子と同席するのみで、この紹熙五年（一一九四）における弟子たちとの同席例は皆無であり、少

なくとも長沙における師事は、その可能性をまったく缺く。

そこで紹熙五年（一一九四）を記録年とする十六弟子から、上記の七人を除き、かれらの朱門における同席ケースを次ページに表示する。本表はいずれ各人の項で説く九弟子に關する資料をあらかじめ参考しつつ、少なからぬ配慮を凝らして作成したものであり、まずつぎの四點に注目されたい。

第一 上欄の九弟子はさきに除外した七弟子と同席していない。

第二 舒高・吳琮を除く七弟子はたがいと同席している。

第三 「語錄姓氏」が必ずしもこの年を記録年としない記録者すなわち寶從周・李方子・甘節・晏淵、および記録年未詳の記録者すなわち黃榦・吳振が、かれらの半数以上と同席している。

第四 舒高・吳琮は他の七人との同席例こそないが、かれらが同席する弟子と同席している。

みぎの四點を確認するだけでは、なお上欄の九弟子が長沙期の朱門に在ったと斷定できまいから、つぎに九弟子について判明する諸條件を考察するとともに、右欄鄭仲履以下の弟子たちについても検討しておく。なお、寶從周の長沙師事は前稿（p.163）でふれたが、李方子・晏淵・龔蓋卿の同時記録をもつかれの記録、語類・卷七十三・第五十七條が新たに有力な證據を提供する。黃榦・李方子・甘節・晏淵については、本稿各人の項を参照されたい。

龔蓋卿、あざなは夢錫、學案・卷六十九によれば衡州常寧縣（湖南省）の人。「語錄姓氏」（成化刊本）は出身地の部分を塗抹する。「困

1194の記録者		龔蓋卿	蕭佐	董拱壽	鍾震	廖謙	舒高	吳琮	林學蒙	楊至
卿佐壽震謙高琮蒙至	蓋拱	龔蕭董鍾廖舒吳林楊	○ 4 1 3 2	1 1 ○	3 2 ○	2 ○	○	○	1	1 1
周子節淵幹	從方	寶李甘晏黃	1 7 3 2 1	1 2		1 1	1 1		6 2 2 2 2	2 2 2 2 2
振	吳		1							
履臨之傑壽成英永進之之夫約周度	仲叔德唐伯季伯思元節明端彥子公	鄭康李鍾周黎吳李蔣馬蔣曹王劉	7 2 6 4 1 5 3 1 1 1 1	1	1 2	1 1		1		

『學紀聞三箋』卷八・周子靜の條によれば、かれは張南軒（張栻）の弟子でもある。『池州語錄』の編者。かれが紹熙五年（一一九四）八月三日に長沙の郡齋で入門したことは、みづから記している（語類・卷一一六・第十五條、また前稿p.146参照）。ここにはかれが同席する非記録者について説明しておく。

饒幹、あざなは廷老。學案・卷六十九に收める略傳によれば、邵武の人、淳熙年間（一一七四―一一八九）の進士、長沙縣の知事に就任し

ていたとき、ちょうど朱熹が郡守だったので、かれは「早朝に起きて政務を處理し、餘暇ができるとすぐ講義を聞いた——夙興治事。暇即聽講」。のちに知懷安軍の職について死んだという。みぎを裏書きするごとく、龔蓋卿の所録に一見する。ただし、かれのこの時の師事は最初でなく、楊道夫（一一八九―一二）と陳芝（一一九二）の所録にもみえ、陳芝所録の一條には、楊道夫の同時記録の一部を想わせる雙行注も付せられているから、紹熙三年（一一九二）の師事も

想定される。陳芝の所録にはすでに饒幸とあるから、かれは當時から知縣の職にあったのだろう。

康淵、あざなは叔臨、岳州巴陵縣（湖南省岳陽縣）の人。學案・卷二十四による。

鄭仲履、名諱・籍貫ともに未詳。學案補遺・卷六十九に「朱子が易を授けし弟子」とある。龔蓋卿所録の一條に吳琮と登場する。

李德之、名諱・籍貫ともに未詳。學案補遺・卷六十九に收める。

龔蓋卿（6）のほか李方子の所録に一見する（ただし李得之に作る）。

鍾唐傑、名諱・籍貫ともに未詳。學案・同補遺に未收。龔蓋卿の所録に四見するのみ。

周椿、あざなは伯壽、籍貫は未詳。學案補遺・卷六十九に收める。

龔蓋卿・廖謙のほか、甘節の記録にも一見する（龔蓋卿の所録と内容同じ）。

黎季成、名諱は未詳。學案補遺・卷六十九に收め、「寧都縣（江西省）の人」とする。龔蓋卿・鍾震の所録にみえるほか、寶從周が録する語類・卷五十二（孟子公孫丑篇）第七十一條には龔蓋卿所録のつぎの雙行注が付せられている。

後に擧げる蓋卿所録・鍾震所録にかかる、黎季成の質問を記した二條は、詳略の差違があるだけで、同時に聴講した疑いがある。

後蓋卿録・鍾震録記黎季成所問兩條。疑問間而有詳略。

吳雄、あざなは伯英、岳州平江縣（湖南省）の人。學案補遺・卷六十九にいう、

二十歳で臨安に客寓する。蔡西山元定の紹介により考亭で朱文公に目どおりし、そのまま學業をうけた。黃直卿（黃榦）・康叔臨・蔡伯靜（蔡淵）およびその弟仲默（蔡沈）とともに、研究は明晰透徹したものである。

年二十客臨安。因蔡西山元定。見朱文公于考亭。遂受業。與黃直卿・康叔臨・蔡伯靜及其弟仲默。講貫明徹。

龔蓋卿（3、うち一條は黃榦も同席）・蕭佐の所録のほか、李壯祖（10）・李閔祖（一二八八）の記録にもみえる。李閔祖の所録は李壯祖と同時の記録である。みぎの略傳によれば、吳雄の入門は長沙期に先行する。考亭の竣功は紹熙三年（一一九二）六月であるから。

李修己、あざなは思永、隆興府豐城縣（江西省）の人。學案・卷七十二に收める。乾道年間（一一六五―一七三）の進士、陸九齡（子壽・復齋、一二三八―一八〇）の門人、のち朱熹に師事したという。

蔣元進・馬節之はともに名諱・籍貫が未詳。後者のみ學案補遺・卷六十九に收めるが、「朱子が詩を授けし弟子」とあるのみ。

曹彥約については、廖謙の項（928）に詳説する。

蕭佐、あざなは定夫、潭州湘鄉縣（湖南省）の人。學案・卷七十一に略傳を收める。かれが長沙期の朱熹に師事したことは、魏了翁（一二七八―一二三七）の「師友堂銘」（鶴山先生大全文集・卷五十七）の



序にみえる。

湘郷の蕭定夫佐から來た便りにいう、「……佐の亡父は五峯先生（胡宏、一一〇五—五五）に師事して、張宣公（張栻・南軒、一一三三—一八〇）とは同門の友であり、そのゆかりで佐も長沙で宣公にお会いすることがかない、宣公から居敬の一語を授かりました。それから十五年して、朱文公が湖湘の地の安撫使に就任されましたとき、佐は先生のもとに學んで學問品性をみかくとで質問しましたところ、幸い文公は親切に教えてくださいました。」

湘郷蕭定夫佐以書來曰。……佐之先人事五峯先生。與張宣公爲同門友。佐繇是亦獲拜宣公于長沙。宣公授以居敬一言。又十有五載。朱文公師帥湖湘。佐又從受學。以進德修業請問。文公不彼而幸教焉。

かれの所録に一見する吳振も記録者である。

吳振、あざなは子奇、慶元府鄞縣（浙江省）の人（南宋館閣續錄・卷七による）。淳熙十四年（一一八七）の進士。「語錄姓氏」には記録年を缺く。所録は一一五條あるが、同門で登場するものは蕭佐のみ、別に同時記録者として李方子・甘節がある。みぎによる限り、長沙期のみの師事者とみてよからう。

董拱壽、あざなは仁叔、饒州鄱陽縣（江西省）の人。學案補遺・卷六十九に「朱子が詩を授けし弟子」という。その所録はわずかず十

六條にすぎない。

鍾震、あざなは春伯、蕭佐と同郷（湘潭縣）。學案補遺・卷六十九に收めるが、朱門の弟子とするに過ぎない。その所録は二十二條、同席者は表示するものにつきるが、うち康叔臨が登場する記録（卷三十六・第六十六條）は、龔蓋卿にも同時らしい記録がある。かれの所録にのみ登場する蔣明之・蔣端夫・王子周の三弟子は、學案・同補遺ともに收録せず、いずれも名諱・籍貫は未詳。

廖謙、あざなは益仲、衡州衡陽縣（湖南省）の人。學案補遺・卷六十九に「朱子に師事して、南嶽で學問を研究した——從朱子講學于南嶽」という。語類・卷一一六（訓門人）の第十八條は、入門時の問答であるが、その時點を知る手がかりはない。みぎにつづく第十九條にいう、

（先生が）謙に問われた、「かつて戴肖望どのとごいっしょよされたが、どうだった。」

「やはり受験用の文章を話しあうだけでした。云々」

問謙曾與戴肖望相處如何。曰。亦只商量得學子程文。云々  
學案には言及していないが、みぎによって、廖謙ははじめ戴溪に師事したことがわかる。また、語類・卷一〇六（外任）の第四十一・四十四條は、嶽麓書院における講義の情況や長沙城の修築問題を内容としており、長沙に師事した際のものとわかる。かれの所録は

約四十條、同席の弟子は表に示すもののほか、建昌出身の聶縣尉があるが、その名字・籍貫は未詳。また、曹彦約はかれの所録中に曹宰としてあらわれる。

曹彦約（一一五七—一二二八）、あざなは簡甫、南康軍都昌縣（江西省）の人。魏了翁（一二七八—一二三七）に「曹公墓誌銘」（鶴山先生大全文集・卷八十七）があり、それにもとづく詳傳が學案・卷六十九にみえる。その墓誌銘にいう、

朱文公が南康軍の知事になられたとき、兄弟は親炙して、白鹿洞書院の學生となり、その後十四年をへて長沙で文公にお會いし、また知行する所をのべて教えを請うた。

朱文公守南康。兄弟親炙之。爲白鹿洞書院諸生。後十四年見文公於長沙。又述所知行而請教焉。

みぎによれば、かれは朱熹の知南康軍期に兄彥純（あざなは未詳）とともに師事しており、長沙における師事は第二次にあたる。淳熙八年（一一八二）の進士で、廣德軍建平縣尉、桂陽軍錄事參軍をへて辰溪縣令を拜命したが、赴任せぬうちに司法參軍（湖南省）として中央に召された。「曹宰」とよぶのは、すでにこの辰溪縣令を拜命していた時だからであろう。かれは後にさらに各地の州知事を歴任して、侍讀兼禮部侍郎に就任した。

さて、朱熹の知潭州期に師事した廖謙は、朱熹の任期中に長沙を去った。語類・卷一一六・第二十三條にいう、

廖兄がお願いした、「わたくしは遠方から教えを乞うてまい

り、先生の雅言至論をうかがうことができませんでした。退いて味わいまするに、啓發されるところがたいへん多うございます。旅の途次では先生の『大學章句』『同或問』を一とおり拜讀しましたが、み教えの内容はここに盡くされ、學問人格をみがく方法は、これ以上加えることなく、ますます心がけねばなりません。明日はいよいよ師門にお別れいたしますが、さらに一こといただきとう存じます。」

廖兄請問曰。某遠來求教。獲聽先生雅言至論。退而涵泳。發省甚多。旅中只看先生大學章句・或問一過。所以誨人者至矣。爲學入德之方。無以加此。敢不加心。明日欲別誨席。更乞一言之賜。——龔蓋卿錄

この條の記錄者龔蓋卿は、既述のごとく紹熙五年（一一九四）八月三日に長沙で入門し、朱熹が召されて上京するのは、その月末ごろであるから、廖謙が朱門を辭した時點は、同年の八月であったとわかる。

その後、廖謙が朱門を訪れた形跡はまったくない。したがってかれの師事は、紹熙五年（一一九四）五月から八月に至る朱熹の知潭州期のみに限定される。なお、李方子・甘節のふたりも長沙に隨伴していたことが、かれの記錄によって證明される。

舒高、あざなや籍貫はともに未詳。學案補遺・卷六十九に「朱子が易・詩を授けし弟子」とある。その所録はわずか十七條にすぎず、

同時記録者に李方子・晏淵があること（いずれも易に関する問答）は、長沙期に在門した可能性を残す。

吳琮、あざなは仲方、臨川縣（江西省）の人（語録姓氏による）。學案補遺・卷六十九には籍貫を缺く。「語録姓氏」がかれの所録を、楊長孺の場合と同じく「甲寅記見」とするのは、一時の訪問を意味するか。その所録は十五條にすぎないが、かれが長沙の朱門を訪れたことは、つぎに示す語類・卷一〇六（外任・潭州の項）の二條によってあきらかである。

潭州におられたころ、州學に行き教室にいられた。百數十名の學生を抽籤で八班に分け、各班から一人ずつ教壇に出て大學の一章を講義した。

在潭州時。詣學陞堂。以百數籤抽八齋。每齋一人出位。講大學一章。——第三十九條

問う、「先生がここへ來られ、二ど學校にゆかれておりますが、どんなふうに學生に教えられますか、その構想はいかがでしょうが。」

問。先生到此再詣學矣。不知所以教諸生者。規模如何。——

第四十條

さらに、つぎの二條も長沙期の在門を證するものであろう。

鄭仲履がいった、「吳仲方は、太極説の『動極マリテ靜、靜極マリテ復タ動』という説の大意は、動なればすべて動、靜な

ればすべて靜ということであらうと疑っておりますが。」

「かれのはみなでたらめだ。」

鄭仲履云。吳仲方疑太極說動極而靜。靜極復動之說。大意謂動則俱動。靜則俱靜。曰。他都是胡說。——語類・卷九十四、第四十四條（蓋蓋卿錄）

問う、「先だつて劉公度といつしよに、南軒（張栻）が先生に書いてさしあげた『章齋記』を拜見しましたところ、そこに云々」

問。昨與劉公度看南軒爲先生作章齋記。其間說云々——語類・

卷二十六、第七十八條（吳琮錄）

みぎに見える劉公度（名は孟容）もやはり長沙における師事が確認されている。

劉孟容、あざなは公度、臨江軍清江縣（江西省）の人。學案・卷六十九は隆興府（江西省南昌市）の出身とする。朱熹にかれの父劉龜年（且老、？——一一七八）の生涯をのべる「朝奉劉公墓表」（文集・卷九七）がある。それによれば、劉放（公非、一〇三——一八九）の玄孫にあたり、かの劉清之は父の族兄である。學案によれば、かれははじめ劉清之に師事、また陸子にも學んだ。朱熹への師事は劉清之の紹介によるのであろうが、その時點は朱熹の知南康軍期にさき立つであらう。朱熹が撰する父の墓表にいう、

（父が亡くなった）翌年（淳熙六年、一二七九）、孟容は喪服すがたで廬山の下に會いに來て、公（父をさす）の族弟鄂州通守の

清之子澄が作った行狀をさし出し、泣いて告げた、「<sup>わたくし</sup>孟容の亡父は不幸にして先生のもとに師事できませんでした。が、<sup>わたくし</sup>孟容はお側にあつて問學受業ができませんでした。云々」

明年孟容衰經來見予廬山下。奉公族弟鄂州通守清之子澄之狀。泣而以告曰。孟容之先人。不幸不及從先生游。而孟容願得問學承教於左右。云々

この時の來訪は、また朱熹の「與曹晉叔」書（文集・卷二十六）にもみえる。

熹はずいぶん以前から去ることを願っていますが、かないません。……ただ敬夫（張栻）の病氣がたいへん心配だとのこと、このさき申請がかないましたら一ど見舞いにゆくつもりです。もしすでに湖南に歸つておりますなら、江西から道ついでに立ち寄つて歸ります。……劉公度がここへ参りましたが、長くはおれません。その素質は得がたいものです。

熹求去久不獲。……但聞敬夫病殊可憂。前此得請。意欲一往視之。若已歸湖南。即自江西便道以歸也。……劉公度來此。不能久居。其氣質不易得也。

ここに重態を伝えられる張栻は、淳熙七年（一一八〇）二月二日に逝去している。この書翰の時点は、朱熹が知南康軍をつとめる淳熙六年（一一七九）の年末ごろであらう。

林學蒙、あざなは正卿、福州永福縣（福建省永泰縣）の人。「語錄

朱門弟子師事年攷 續

姓氏」に「甲寅以後（紹熙五年、一一九四）所聞」と注する記錄者である。學案・卷六十九に弟林學履とともに收めるが、朱子の弟子とあるにすぎず、履歷その他すべてわからない。まず、同席弟子たちのリストとその關係を表示する。

②	傑子	1180→
⑥	方孫	1188→
⑪	葉賀	1191→
②	晏淵	1193
⑤	林恪	1193
②	甘節	1193→
②	潘時舉	1193→

#### 林學蒙

	董拱壽	1194
	楊至	1193・94
②	黃榘	?
	李壯祖	(師夏)
	趙致道	
	李約之	
	林學履	

林學蒙の記錄年の起點が紹熙五年（一一九四）であることは、かれの最初の師事がいずれの地で實現したかについて、まず考えさせる。だが、ただ一條だけであるが、林學蒙の所錄（卷五十八・第十條）に董仁叔（董拱壽）が登場することは、かれの長沙における師事を確定的にする。したがって、その前年を記錄年ないし記錄年の起點とする弟子——甘節・晏淵・楊至らはもちろん、長沙期の師事があきらかな李方子との同席例も、この年次に屬するとみられる。しかし、林學蒙は上記のほか、長沙期の師事がみとめられぬ萬人傑・葉賀孫・林恪・潘時舉らとも少なからぬ同席例をもつ。これらはあきらかに、かれが記錄年の前年すなわち紹熙四年（一一九三）に建陽の朱門に師事し、翌年三月末、朱熹の長沙出向に隨行したことを示す。萬人

傑とはその第三次師事期(p. 296)に、葉賀孫とはその第一次師事期(p. 326)における同席であり、李壯祖(p. 325)・趙師夏(前稿p. 193)もたしかにその建陽の朱門に在った。かれの記録年は「癸丑以後」と改めるべきであり、既述の甘節・晏淵・楊至・李方子とかれの同席例は、建陽・長沙兩地における兩年次(一一九三・九四)のものが混在すると思われるべきであろう。なお、残る同席者の李約之は學案・同補遺にも收めず、名諱・籍貫ともに未詳。林學蒙の所録に一見するだけである。

さて、林學蒙の師事は、前掲表によるかぎり、長沙期の師事に終ったごとくに見える。事實、正式な師事はそうであつたろうが、その後におけるかれの訪問が一どだけ確認される。朱熹の「答黃直卿」第四十七書(續集・卷二)にいう、

林正卿が湖外より歸り、二晩ほど滞在しました。かれも相當進歩していますが、將來、釋老の道に流れる心配があります。林正卿歸自湖外。少留兩夕。亦頗長進。但恐將來流成釋老耳。湖外とはおそらく湖南をさすだろう(p. 294参照)。林學蒙はそのころまで蔡元定の配所である道州(湖南省道縣)付近にあって、蔡元定と交渉をもっていたらしく、朱熹の「答林正卿(學蒙)」第一書(文集・卷五十九)にいう、

季通(元定)から來た便りにも、正卿が大いに進歩したといつております。

季通書來。亦謂正卿甚進。

さらに、朱熹の「答林正卿」第四書には、蔡元定の死に言及しているから、林學蒙は少なくとも蔡元定が死んだ慶元四年(一一九八)八月九日前後もなお「湖外」にゐたと考えられる。したがって、かれが朱門を訪れた時點は、同年秋冬の間であらうと推定される。林學蒙の弟林學履も朱門の弟子であり、同じく記録者である。必ずしも兄と行動を共にせず、ことに長沙期の弟子との關係は少ないが、ここに付説しておく。

林學履、あざなは安卿、「語錄姓氏」に「己未(慶元五年、一一九九)所聞」と注する記録者である。まず、同席弟子のリストとその關係を表示する。

傑	1180→	林學履	賜	1195→	元五年(一一九九)	かれが記録年の慶元五年(一一九九)に朱門に在ったことは、みぎの表における呂熹・劉礪ないし沈憫との同席によつてもあきらかだし、
人	1188→		憫	1198→		
文	1191→		燾	1199		
蔚	1193		礪	1199		
孫	1193→					
② 陳	② 晏	⑥ 黃	林	⑨ ②		
葉	晏	黃	沈	呂	劉	
② 晏	黃	林	沈	呂	劉	
② 晏	黃	林	沈	呂	劉	

さらにそれを裏づけるものとして、前稿(p. 216)で朱熹の「答黃直卿」第七十二書を引いて考證したように、かれはその年李燾(あざなは敬子)の離門に際して何らかのトラブルを起こしている。ただ、この年における師事はかれの最初のそれではない。みぎの表によれば、かれには晏淵および兄林學蒙との同席も認められる。このふた

りの正規の師事はともに朱熹の長沙期を最後とするし、林學履には兄のような長沙期の他の弟子との交渉が見られない。もっとも、記録を残さなくても、かれも兄とともに長沙へ行ったかもしれないが、とにかくかれは、第一次師事期を紹熙四年（一一九三）に兄とともにもったに相違ない。さらに、林學蒙の項で引用した朱熹の「答黃直卿」第四十七書のすぐ下文にいう、

その弟の學履安卿が中ごろここへ來ました。ちかごろ送つて來ました質問も、見方がよろしい。一どの手紙で返事するのはとてもことです。科擧を受ける友人に申しつけ、かれが城へ來た日にわたしてくれるがよろしい。

其弟學履安卿。中間到此。近寄得疑問來。亦看得好。甚不易一書報之。可分付入試朋友。俟其到城日付之也。

この書翰の時点は、既述のように慶元四年（一一九八）秋・冬の間とおもわれる。ここに林學履の訪問を傳える「中ごろ（中間）」がいつをさすかはあきらかでないが、かれの林陽（一一九五）との同席例はその第二次師事期のものではあるまいか。また、みぎの書翰の時点前後に林學履が質問書を提出して來たとあれば、かれの第三次師事は記録年の慶元五年（一一九九）のみに終始したと考えられる。なお、前掲表における、萬人傑・陳文蔚・葉賀孫・黃義剛らとのかれの同席例には、第一・第三兩次のものが混在する可能性もあることを付言しておく。

最後に楊至（一一九三・九四）は、龔蓋卿・蕭佐との同席例をもつことによって、長沙に隨行したことが明白である。

#### 萬人傑

萬人傑、あざなは正淳、興國軍大冶縣（湖北省）の人。朱門ではかなり早い時期に入門し、しかも朱熹の最晩年まで數次にわたり師事した弟子である。學案・卷六十九にいう、

陸文達公（陸九齡、あざなは子壽、復齋と號する。一一三二—一一八〇）が興國軍軍學教授になると、すぐやつて來て教えを受け、ついで文安公（陸九齡の弟、九淵、あざなは子靜、象山と號する。一一三九—一九二）に槐堂で師事した。……やがて先生（萬人傑）は南康で朱子におめどおりした。

陸文達公爲興國教授。卽來受學。旋事文安公於槐堂。……已而先生見朱子於南康。

すなわち、かれは初め陸氏兄弟に師事した。陸九齡が興國軍軍學教授に就任したのは、淳熙元年（一一七四）であり（陸九淵「全州教授陸先生行狀」、象山先生全集・卷二十七）、朱熹が知南康軍として星子縣（江西省）にあったのは、淳熙六年（一一七九）三月末より同八年（一一八二）三月二十七日に至る滿二か年間である。「語錄姓氏」にかれの所録を「庚子以後（淳熙七年、一一八〇）所聞」とするのは、その入門年を示すし、それは別の資料によっても確かめうる。

大治からは、ちかごろ萬人傑君というのが訪ねてくれ、現在軍學中に留めてあります。素質はとてもよく、議論もくりかえしやれますし、めったに得がたい人物です。かつて交遊させていたのだといっております。

大治近有萬君人傑者見訪。見留之學中。氣質甚美。議論亦可反復。殊不易得。云嘗得從遊也。——朱熹「答吳伯豐」第一書（文集・卷五十二）

この書翰の下文には、張栻（欽夫、吳は南軒、一一三〇—一八〇）の逝去を悼む語が見えるから、その逝去の日（二月二日）から遠からぬころ、萬人傑が南康軍學の朱熹のもとにあったことを知る。ちなみに、この書翰は「語錄姓氏」に記録年を淳熙十五・六年（一一八八・八九）とする吳必大の師事がさらに十年近く遡ること、および吳の籍貫も大冶縣であるらしいことを物語っている。

ついでに付言すれば、朱熹の「答曹立之」書（文集・卷五十二）に「ちかごろ大治の萬正淳が來訪し云々」とあるのも、やはり萬人傑の淳熙七年における師事をさす。この書翰はかの包揚の口禍（や310参照）に關する資料の一つである。なお、曹立之は名が建（一一四七—一八三）、饒州餘干縣（江西省）の人、陸九淵の高弟で、朱熹に「曹立之墓表」（文集・卷九十）がある。それに據れば、かれは早くから朱熹の著作を愛讀して、いちど面會したいと念願していたが、ついに朱熹の知南康軍期にそれを果たした。その際、朱熹のほうもかれの「己の爲めにする學問」が氣に入り、朱門に滞在させようと

したが、やむをえない先約の用件があつて、曹建は立ち去った。

さて、われわれは萬人傑の入門が「語錄姓氏」に注するかれの記録年の起點、淳熙七年（一一八〇）であることを確かめたが、かれの師事は既述のように、朱熹の最晩年に至るまで數次に及んでいる。さいわいにも、萬人傑乃至かれの同席者の幾人かは、朱熹の書翰その他に比較的多く現われるので、それらを利用しつつ、萬人傑が朱門に在った時點と不在の時點をまず確認し、しかる後かれが同席した朱門の弟子たちのリストと對照して考察することにしよう。

〔萬人傑の在門を示す資料〕

①朱熹「答黃直卿」第二十三書（續集・卷一）

ちかごろはここへ來る友人がかなり多く、萬正淳が黃子耕（黃警）・吳伯豐（吳必大）とともに、みなここにおります。連中は陸子靜（九淵・象山）に會つており、ずいぶん議論したそうです。

近日朋友來者頗多。萬正淳與黃子耕・吳伯豐皆在此。諸人皆見陸子靜來。甚有議論。

この書翰の冒頭と末尾には、またつぎの如きいう、

四十枚にちかい奏劄で、申したいことはほぼ盡くしました。

ただ、想い出せぬことがまだありますが、どうしようもありません。いまごろ向うにとどいてずいぶんになるはずですが、お

かみはどう思召しているでしょうか。

近四十紙奏劄。所欲言者。略已盡之。但猶有記不起者。不奈何耳。今必已到彼多日。不知聖意如何。

こちらでは、ちかごろかれ（陸九淵）と太極を論ずる答問書も出来ておりますが、まだ淨書して出す間がありません。

此間近亦有與之答問論太極書。未及寫出。

この「奏劄」とは朱熹の「戊申封事」（文集・卷十二）をさし、それには十一月一日のデートを付す。淳熙十五年（一一八八）正月、朱熹は孝宗から奏事を命ぜられ、再三の辭退が許されず、ついに六月四日延和殿において國事を進言した。その後、江西提刑を命ぜられたかれは、足疾を理由にまたも辭退して第二の故郷崇安に在ったが、孝宗のさらに進言を求める希望は執拗をきわめ、そこでかれは上京せぬままこの奏劄を送りとどけたのである。

また、陸九淵と論争した太極に關する答問書は、「答陸子靜」第四書（文集・卷三十六）をさし、十一月八日のデートを付す。したがって「答黃直卿」第二十三書の執筆時點は、淳熙十五年（一一八八）十一月初旬であると斷定され、そのころ萬人傑は他のふたりとともに、あきらかに朱門に師事していた。

## (2) 朱熹「答黃直卿」第二十五書（續集・卷一）

輔漢卿（輔廣）・萬正淳は、どちらもここに二か月滞在して立ち去りました。その他の友人數名も立ち去りかけています。連中はみな世間のうわさに攻めたてられ、落着いておれずに立ち

去るのです。その實、痛いめに遭わされそうなのは、事實と相違するしかとした證據なんか必要でなく、筆と墨で數十行でっちあげれば、嶺南送りにできるのです。

輔漢卿・萬正淳。皆留此兩月而後去。其他朋友數人亦將去矣。諸人皆爲外間浮論攻擊。不敢自安而去。其實欲見害者。亦何必實有事跡。與之相違。但引筆行墨數十行。便可使過嶺矣。

この書翰には、かの「僞學の禁」が緊迫したころの、朱門弟子たちの浮き足だった情況が、若干の不滿と皮肉をにじませて、如實に語られている。また、その下文にいう、

謝表、書かでものことですがお目にかけます。人に見せないで下さい。はじめはなお數語書き加えてありましたが、あとで元善（詹體仁）に削られました。でも大したことではありません。もし禍を招くというなら、こんなものでも結構導火線になりましょう。

謝表。謾錄去。勿以示人。初時更有數語。後爲元善所刪。然亦無甚緊要。若謂取禍。則只此亦足以發其機也。

ここにみえる「謝表」が朱熹のいずれをさすかは、少しく検討を要する。年譜によれば、かれの晩年の謝表には三篇が挙げられる。

慶元三年（一一九七）春正月。拜命謝表。

〔文集〕落職罷官觀謝表 落祕閣修撰依前官謝表 戊午春

同 五年（一一九七）夏四月。有旨令守朝奉大夫致仕。拜命謝表。



〔文集〕乞致仕表 致仕謝表

これら三篇の謝表はすべて現行文集にみえないが、書翰にいうそれはこの中のどれかを指すに相違ない。そのうち、「致仕謝表」の提出された慶元五年四月には、呂祖儉（子約）はすでに死んでおり、みぎの書翰の上文におけるかれの健在と抵觸するから、前者の二篇のいずれかを指すと断定される。すなわち、朱熹の「答黃直卿」第二十五書は慶元三年（一一九七）正月以後に書かれ、その少し前に萬人傑・輔廣のふたりが二か月の滞在を終えて朱門を立ち去ったことがわかる。このことは實は、すでに前稿でふれた（p.210-211）、道州編管に遭うた蔡元定を見送る日の朱門に萬人傑もいあわせた事實と、まさに一致する。みぎの書翰にみえる詹體仁も、そして輔廣も、たしかに朱門にいた。その時點は、年譜に據れば、慶元二年（新曆では一一九七年一月に入る）十二月である。

〔萬人傑の不在を示す資料〕

(1) 語類・卷一二四、第三十六條（萬人傑錄）

先生が人傑わたくしに問われた、「別れてから陸象山どのに會うてどうだった。」

「都下ひとつきで一月ごいっしよしました。討論でしばしばくい違ふことがありました。」

先生問人傑。別後見陸象山如何。曰。在都下相處一月。議論間多不合。

この資料は、萬人傑が首都臨安で陸九淵（象山）のもとに一か月間いたことを物語るが、陸氏が首都にあった期間は、淳熙九年（一一八二）七月から同十三年（一一八六）十一月末に至る、約四年という幅をもつゆえ、ただちにその時點を定めるわけにゆかない。しかし、語類のみぎに續く一條によって、かれの舊師陸象山との再會は淳熙十年（一一八三）であったことがわかる。

正淳に問われた、「陸氏の説はどうだね。」

「癸卯の年にお會いましたとき、わたくしはそのお言葉にみな半信半疑でございました。」

問正淳陸氏之說如何。曰。癸卯相見。某於其言不無疑信相半。  
（黃螢錄）

ちなみに、みぎの問答二條には、萬人傑・黃螢の同時在問が認められるから、淳熙十五年（一一八八）の所錄と考えられる。

(2) 朱熹「答吳伯豐（吳必大）」第四書（文集・卷五十二）

廬陵の計報は痛恨の極みですが、やけに用事が多くて、いまだに人に行ってもうることができません。……子耕（黃螢）はもう豫章に歸っているはずですが、時おり便りをもらいますか。正淳はきつと本廳に向向しているでしょう。

廬陵之計。令人痛惜。亦苦多事。至今未得遣人去也。子耕當已歸豫章。時得書否。正淳必已赴省矣。

ここにみえる「廬陵の計」とは、朱熹の知友で廬陵出身の劉清之（子澄）の死をさす。ところで、劉清之の卒年は、學案・卷九十七

「慶元黨案年表」によれば、淳熙十六年（一一八九、その九月）であるが、姜亮夫の『歷代人物年里碑傳綜表』は慶元元年（一一九五）とする。後者の備考欄には、「朱熹がこの年に哭する文を書いてい——朱熹于本年有文哭之」と注記するにもかかわらず、現存する朱熹の「祭劉子澄文」（文集・卷八十七）の冒頭には、維<sub>レ</sub>庚戌ノ歲、月朔ノ二十六日とあり、下文には「訃ヲ聞キテ月ヲ累ネ、乃メテ人ヲ使ワスヲ能<sub>タリ</sub>」という。庚戌ノ歲は紹熙元年（一一九〇）であり、朱熹はさきの書翰にいうごとく、實際にも劉清之の死後數か月をへてようやく代人を弔問に派遣したのである。あきらかに姜亮夫の擬定年次は誤りであり、この場合は學案の年表に従うべきである。したがって上記書翰の執筆時點は、劉清之が亡くなった淳熙十六年（一一八九）九月からほど遠からぬ十・十一月の間であり、そのころ萬人傑ら三人は朱門にいなかったことがわかる。正淳はきつともう本廳に出貨してるところでし——正淳必已赴省矣は、むしろかれが省試を受けるために上京したことをいう。その結果は不明だが、翌紹熙元年四月には、たしかに進士の發表があった。また、萬人傑がこの省試に應じたことから、いま一つの事實が判明する——かれは同じ年（一一八九）の解試に應じて合格している。とすれば、かれの不在は少なくとも五月末ごろまで遡りうる。みぎの書翰に「子耕はもう豫章に歸っているはず」とあるのは、黃螢が朱門から最近歸郷したことをも物語るであろう。

なお、姜亮夫の擬定年次がもつくとくところは、劉清之の傳記を

『宋史』卷四三七の本傳によらず、元・王禮の『靜春先生傳』によつたためである。二つの傳記はいずれも卒年を明記していないが、まもなく死に至る病臥の記事を、『宋史』では「光宗即位し、知袁州に起用されたが、清之は病氣になった——光宗即位。起知袁州。而清之疾作」とするのに、王禮は「寧宗即位し、翌月ただちに知袁州に起用されたが、病氣がすでに革<sub>あらた</sub>まっていた」としている。

(3) 朱熹「答黃子耕（黃螢）」第六書（文集・卷五十二）

ちかごろ正淳・伯豐（吳必大）のふたりから便りをもらいました。どちらも學業が進みうれしいことです。泉・漳の間でも將來期待のもてる學生が一、二でき、このたびの出向もむだではありませんでした。ただ經界法の件は、擔當者がなさそうですし、ボス連中は喜ばず、蜂の巣をつついたように異論が起こり、かくてまあおのんびりやるより外ありません。在官一年、民のために利を興すこともやれず、害を除くことも満足にゆかず、それだけが心残りです。

正淳・伯豐。近皆得書。學皆進益可喜。泉・漳之間。亦得一二學者。將來可望。不虛爲此行也。但經界一事。恐未有承當。而豪右不樂。異論譁起。遂且悠悠耳。在官一年。不能爲民興利。而除害亦未能盡。此爲可恨耳。

この書翰は、朱熹の知漳州期（一一九〇・四・二四—九一・四・二九）のものであり、「在官一年」とあるから、その時點は紹熙二年（一一九二）の三・四月ごろと考えられる。その當時、萬人傑だけでな

く吳必大・黃魯の二人も朱門にいなかった。

(4) 朱熹「答吳伯豐」第十三書(文集・卷五十二)

長沙の除命は再度辭退しましたがかないません。なお少しくためられるものがあり、赴任の計を決めかねていますし、あたかも、足の病氣が少し始まり、まだ拜命する氣にまで至りません。まあ十日ばかり様子を見ることにします。……先日手紙を出して、正父に赴任先に來て禮書を編纂するよう誘っておきました。そのころは、長沙に行くことと決めかねていましたが、小さな郡に取り換えてもらうようお願いしてありましたので、いずれ地方に出てゆくものと考えていたのです。いま、もし湖南行きが實現しますと、この約束が守られるはずですが、かれはどうでしょうか。……正淳から便りが來ました。かれも衡嶽の旅に氣があり、有難いことです。子耕(黃魯)はだいぶ前から病氣と聞いており、詳細はつかめませんが、ともかく快方に向かっているのがうれしいです。

長沙除命。再辭不獲。尙有少疑。未敢決爲去計。亦會足疾微動。未容拜受。且看旬日如何也。……前日亦已寄書。約正父來官所。修纂禮書。是時雖未敢決赴長沙。然已乞換小郡。計必在江湖間也。今若成爲湖外之行。當踐此約。不知渠如何也。……正淳書來。亦有意於衡嶽之游。甚幸甚幸。子耕久聞其病。未得端的。且喜向安也。

ここに「長沙除命」とあるのは、紹熙四年(一一九三)十二月十

日における「知潭州・荆湖南路安撫使」の任命をさす。朱熹は例により、翌五年(一一九四)正月にかけて再度辭退を申し出る(年譜)が、結局、洞獠が屬郡を侵犯する事態を憂慮して拜命する。しかし、この書翰の段階ではなお躊躇を示しているから、その時點は紹熙五年(一一九四)の一―三月の間であらう。このころ、萬人傑はかふたりはやはり朱門にいなかった。みぎの書翰に言及する萬人傑の來信中に、朱熹の長沙赴任が實現すれば、萬人傑も長沙に來遊する意志のあることをほめかしているが、知潭州期の朱門にかれが訪れた形跡はない。つぎに掲げる朱熹の「答黃子耕(黃魯)」第十書(文集・卷五十二)が、あるいはそれを證する資料となりうるか。

熹ははじめ、ここへ來ればすぐ人を出して、正淳・伯豐および余、正叔を招くつもりでいましたが、ここは事務繁雜で財政が苦しく、あたかも時論が沸騰して憂慮すべき状態にあり、いかなる計畫を立ててよいかわからぬ結果、そこまで實現することができませんでした。

熹初意到此。卽遣人招正淳・伯豐及余正叔。而此間事繁財匱。時論又方擾擾。令人憂懼。不知所以爲計。遂未能及。

この書翰は、執筆時點を決定する手がかりがないようにみえるが、「到此」の語は朱熹が外任先に來たことを示すであらう。朱熹の外任で知南康軍以後、この書翰の宛名人である黃魯の師事以後におけるそれは、知潭州と知潭州が指摘される。しかし、この書翰に言及する余正叔すなわち余大雅は、すでに淳熙十六年(一一八九)十一月

に死去しており、上記の兩次の外任地に在る朱熹が呼び寄せることはありえない。この「余正叔」はあきらかに余正父の誤りであり、前掲の朱熹の「答吳伯豐」第十三書にみえる「正父」である。そうだとすれば、「到此」は長沙に來たことをさす。實は、これとほぼ同じ内容の事實が、葉賀孫の所錄にもみえている。

禮書（あるいは禮書編纂）は、長沙へ行くなりすぐ、諸公を招いていっしょに處理しようとおもった。その後、むこうでは事務が輻輳し、かつ長居するつもりもなかったので止めにした。その後都下に行ったとき、事態が少し落ちつけば、構想を立てて、全國の禮に詳しい人たちをせんぶ召集して編纂する念願だった。たとえば余正父なんかの連中はみな來させたのだが、今日ではそのままになった。

禮編。纔到長沙。即欲招諸公來同理會。後見彼事叢。且不爲久留討（計の誤り）。遂止。後至都下。庶幾事體稍定。做箇規模。盡喚天下識禮者修書。如余正父諸人皆教來。今日休矣。——語類・卷八十四（論修禮書、第三十六條）

余正父については別項（p. 340）を參看されたい。

さて、われわれは萬人傑の朱門における在・不在の時點の幾つかを把握したが、いまその在・不在の時點を示す表（Ⅰ）と、かれが同席した朱門弟子たちとの關係を示す表（Ⅱ）を對比して次ページに掲げる。ここでまず、二つの點を確認しておかねばならない。

第一は、二つの表には當然のことながら矛盾するところがないこと。第二は、朱熹の晩年における外任、知漳州期（一一九〇・四・二四—一一九一・四・二九）と知潭州期（一一九四・五・五—八月末）の弟子たちとの同席がほとんど認められぬことである。

まず、表Ⅰの入門期における同席弟子を表Ⅱについてみると、金去僞以下の四弟子が考えられる。そのうち、余大雅（一二三八—八九）・周謨（一二四—一二〇二）については、前稿でふれた（p. 189, p. 196）。余大雅の正式の師事は、淳熙六・七年（一二七九・八〇）の知南康軍期であり、周謨も同期における入門師事が確認されている。ここには、金去僞・程端蒙について詳説しておく。

金去僞、あざなは敬直、饒州樂平縣（江西省）の人。學案補遺・卷六十九の略傳に「浮梁の人」というのは、饒州（上饒）の雅名を用いたのである。「語錄姓氏」にはかれの記録を「乙未（淳熙二年、一二七五）所聞」と注するから、初期の弟子に屬する。かれの記録には同門の姓を記さず、すべて「或るひと問う」の形を用いているし、他の記録者の所錄にも一例（周謨錄、金問）を除いてかれはまったく登場しない。わずかにつぎの記録者に同時の記録がある。

萬人傑（七）・周謨（九）・黃贊（一二八八）・董銖（一二九六—一二九七）・呂燾（一二九九、一二〇〇）

周謨との同席はほとんど知南康軍期に屬すると考えてよからうが、周謨の師事も數次にわたっているし、董銖も別項に説くようにその

〔表 I〕

淳熙 7 (1180)	+
淳熙 10 (1183)	-
淳熙 15 (1188) 11月	+
淳熙 16 (1189) 10・11月間	-
紹熙 2 (1191) 3・4月	-
紹熙 5 (1194) 1〜3月	-
慶元 2 (1196) 12月	+
慶元 3 (1197) 1月	+

〔表 II〕

- ⑦ 金去僞 1175  
 余大雅 1178→  
 周謨 1179  
 ② 程端蒙 1179→

萬人傑

- 張洽 1187  
 1193  
 ② 李方子 1188  
 ③① 黃 營 1188  
 ③① 吳必大 1188  
 1189  
 楊道夫 1189→  
 ⑦ 葉賀孫 1191→  
 鄭南升 1193  
 歐陽謙之 1193  
 石洪慶 1193  
 黃義剛 1193→  
 ② 林學蒙 1194  
 ⑨ 輔廣 1194→  
 ③ 林賜 1195→  
 ④ 董銖 1196→  
 ④ 曾祖道 1197  
 沈 憫 1198→  
 李儒用 1199  
 ② 黃義勇  
 輔萬仁  
 詹體仁  
 ③ 包揚 1183  
 -85

師事は記録年よりはるかに早く、淳熙・紹熙の交に程端蒙とともに朱門を訪れた事実もある (p. 287 参照)。したがって確定的なことはいえないが、金去僞の師事はほぼ次の四次にわたるだろう。

- 第一次……淳熙二年 (一一七五)  
 第二次……淳熙六・七年 (一一七九・八〇)  
 第三次……淳熙十六年 (一一八九) か紹熙元年 (一一九〇)  
 第四次……慶元五年 (一一九四)

程端蒙 (一一四三—一九一)、あざなは正思、鄱陽すなわち饒州德興縣 (江西省) の人。朱熹に「程君正思墓表」(文集・卷九十) があり、生卒年はそれによる。學案・卷六十九にも略傳を収める。「語錄姓氏」に「己亥以後 (淳熙六年、一一七九) 所聞」と注する記録者。しかし、かれの入門は記録年の起點より三年遡るはず

で、前記の墓表にいう、

少しく成長すると、博く師友を求めて自己を向上充實させる能力をしめし、かくて文章の才を薦書にうたわれたが、やがて婺源においてわたくしに面會した。

稍長。即能博求師友。以自開益。遂以詞藝名薦書。既乃見予於婺源。

婺源（江西省）は德興縣の東北方五〇キロにある、朱熹の先祖の地である。朱熹は淳熙三年（一一七六）三月十二日墓參のために歸郷して、約三か月間滞在した。みぎはその時の出會いをいうであろう（前稿p.188参照）が、旅先のことであり師弟の交渉はあまりなかったか。程端蒙の本格的な師事は、三年ののち淳熙六年（一一七九）三月末に朱熹が知南康軍として星子縣に赴任したときから始まったと考えられ、かれの記録年はそのことを示す。實際にも、翌七年（一一八〇）三月丁卯（十五日）のデートをもち「題落星寺」（別集・卷七）に、かれはつぎの人たちと名をつらねている。

永仲晦・蔡季通（元定）・汪清卿・鄧邦老・陳彥忠（士直）・萬正淳・俞季清（潔已）・朱在（朱熹の三男）

同じ年の秋、かれは解試を受けて失敗したらしい。學案の略傳にいう、

淳熙七年、郷貢により太學生に補せられたが、對策に合格せず、罷めて歸郷する。

淳熙七年。郷貢補太學生。對策不合。罷歸。

朱門弟子師事年攷 續

かれの所録によれば、同席をしめす弟子は萬人傑のほか、蔡元定（7）・黃榦があるが、それらの記録はみな朱熹の知南康軍期に屬するだろう。ただ、語類・卷十九、第二十三條の楊道夫の記録（童伯羽も同席する）に付せられた雙行注にいう、

端蒙が記録する一條は、たぶん同時の所聞であろう。

端蒙錄一條。疑同聞。

もしもそれに誤りがなければ、程端蒙は淳熙十六年（一一八九）または翌紹熙元年（一一九〇）ごろふたたび朱門に師事したことになる。朱熹の「答滕德粹（滕璘）」第十二書（文集・卷四十九）にいう、  
熹は冬だというのに、幸い健康さみです。正思・叔重（董銖）  
がまいり、數日の歡談がやれましたことも、結構わびしさを慰めることができました。

熹冬來却幸稍健。正思・叔重來。得數日之款。亦足少慰離索。ここにみえる「離索」がもしも朱熹の外任地における生活のさみしさを意味するなら、この書翰の執筆時點は知漳州期の紹熙元年（一一九〇）冬であり、さもないければ、その前年すなわち淳熙十六年の冬であろう。滕璘は前稿（p.188）でのべたように、程端蒙と同じく朱熹が婺源に歸省した際に親しく師事した同門である。

みぎの兩年のいずれかの師事を最後に、程端蒙は紹熙二年（一一九二）十一月一日、かぞえ年四十九歳で世を去る。語類・卷一一七（訓門人）の一條には、訃報に接した朱熹が哀哭したことが報告されている。なお、朱熹には程端蒙に與えた書翰が二十通あり（文集・



(一一九七)に師事している(前稿p.188, p.189)が、ともに慶元五年(一一九七)における師事も認められるから、林賜のかれらふたりとの同席例は、かれの第三次師事期、すなわち李儒用・林學履と同席したころのものを含むかもしれない。

以上によって結論すると、林賜の師事期としては、つぎの三次が挙げられる。

第一次……慶元元年(一一九五)、またはその翌年はじめまで

第二次……慶元三年(一一九七)

第三次……慶元五年(一一九九)

ただし、この三年次の師事は、そのうちに連続する部分を含む可能性をもつ。

鄭思孟、あざなは齊卿、福州寧德縣(福建省)の人。學案補遺・卷六十九の略傳による。清・馮雲濠の案語によれば、黃榦の女婿である。萬人傑のほかには、錢木之(一一九七)の所録に一見されるから、慶元三年(一一九七)に同席したと考えられる。

董銖については、本稿の別章に詳説しておいたし、曾祖道については前稿(p.188)を参照されたい。いずれも、みぎの慶元二・三年の交における在門が確認されている。

さて、以上において、表Iに示す萬人傑の確實な師事期の前後に

おける同席弟子を、表IIによって補充する操作を了えた。そこで、あらためて表IIを見ると、これまでの操作にあってまったく言及されなかった弟子たちがあることに気づかれる。

その一は、紹熙四年(一一九三)を記録年またはその起點とする弟子群——鄭南升・歐陽謙之・石洪慶・黃義剛らであり、その二は慶元五年(一一九七)を記録年とする沈偶・李儒用らである。兩次の記録年をもつ張洽も、おそらく紹熙四年の弟子群とともに、萬人傑と同席したのであろう。また、葉賀孫は表IIに關するかぎり、慶元二・三年(一一九六・九七)の交における同門のごとくにみえるが、かれは紹熙四年(一一九三)にもあきらかに朱門に在った(p.89)から、そのころの同席とも考えられる。さらに李方子は、その記録年である淳熙十五年(一一八八)において萬人傑と同席したが、かれは長沙期をふくむ紹熙四・五年(一一九三・九四)にも朱門に在るから(p.88)、かれが萬人傑・輔廣のふたりと同時に同席する例はこの兩年次の間以外には考えられぬ。李方子は兩年次の師事が最後のごとく思われるからである。ところが、萬人傑には紹熙五年(一一九四)一—三月の間における不在證明がある。もっとも、一—三月の間、というのは筆者のごく大まかな推定にすぎないが、それにしても朱熹が長沙出向に躊躇を示していたころに萬人傑が朱門にいなかったことは、動かせぬ事實である。われわれはここに至って、すこしく慎重な考察を要求される——輔廣のいわゆる「八十五日」に及ぶ第一次師事(前稿p.89)の初期段階には、萬人傑はなお朱門



に在ったのではないか、それが紹熙四年末であるか翌五年はじめてあるかはともかくとして。

張洽（一一六一—一二三七）、あざなは元徳、臨江軍清江縣（江西省）の人。『宋史』卷四三〇と學案・卷六十九に傳記を收め、生卒年はそれらによる。「語錄姓氏」に「丁未（淳熙十四年、一一八七）・癸丑（紹熙四年、一二九三）所聞」と注する記録者であるが、同席を検しうる同門弟子は僅少である。朱熹の死後、嘉定元年（一二〇八）に進士となり、松滋縣尉・袁州司理參軍・知永新縣・通判池州などを歴任、白鹿堂書院長にも就いた後、中央に召されたが辭退しつづけ、直祕閣の身分を帯びて祠祿官を最後に致仕する。

兩次の記録年のうち、その第一次すなわち淳熙十四年（一一八七）はおそらく入門の年であろう。朱熹の「答黃直卿（黃榦）」第三十四書（續集・卷二）は、張洽が初めて師事したころのものである。

ちかごろ臨江軍の張洽という書生が來ました。素質がとてもよく、うれしい限りです。書院は建ったばかりでまだ完成しません。もう二か月もしないと住めぬでしょう。

近有臨江軍張洽秀才來。資質甚好。可喜可喜。書院方蓋屋。未得成就。須更兩月。方可居耳。

黃榦はその章に説くように、最も長期にわたり朱熹に師事していた高弟である。みぎの文面はあきらかに、かつて面識のない張洽を紹介する表現である。その時點がいつであるかは、下文にみえる書

院建築のことが決定しよう。しかし、われわれに年次が判明しているそれは、前稿（註五）に説いたように寒泉精舍（一二六九年某月）・晦庵（一二七五年七月）・考亭（一二九二年六月）・竹林精舍（一二九四年十二月）であり、建築時不明のものに紫陽書院（または堂）がある。みぎの書翰は、ことによると同書院の建立が淳熙十四年（一一八七）であることを證する資料であるかもしれない。だが、それを成立させるためには、この年次に黃榦が朱門を離れていた事實がなければならぬが、この點には若干の不安があり、黃榦は少なくとも、翌淳熙十五年（一一八八）にかけて朱門に在ったらしい。

それでは、語類における間接資料ではどうか。張洽が萬人傑（一一八〇）と同席する一例（卷七十八・第二四六條）が、あるいはその年次に属するようにもみえる。しかし、この一條は『書經』益稷に關する問答である。萬人傑の所録にかかる『書經』關係の問答はあわせて三十三條、その一條は同時記録者に輔廣（一一九四）があるし、萬人傑の記録に登場する同門には、張洽のほか石洪慶（一一九三）・包揚・葉任道（葉賀孫の弟）・林恭甫（名は未詳）らがある。包揚は別章にのべるように、その入門は紹熙四年（一二九三）である。それだけでない、朱門における『書經』の講義は、その記録者から察すると、紹熙四・五年ごろに續けられていたらしい。もっとも、同じ『書經』關係の問答中には、黃榦（一一八八）・吳必大（一一八八・八九）が同席し、したがって淳熙十五年（一二八八）ごろの記録もみえるから、やはり確かなことは申せない。

つぎに、張洽の第二の記録年、すなわち紹熙四年（一一九三）における師事は、この年ないしそれを起點とする記録者——潘時舉（4）・歐陽謙之（2）との同席例があるから、ほとんど疑う餘地はない。上記の二弟子のほか、かれとの同時記録をとどめる林學履（一一九〇）も、實は同じ年次に屬するであろう。この一條（卷七十一・第一〇三條）は『易』大過の卦に關する問答であり、紹熙四・五年（一一九三・九四）ごろは、朱門にあって『易』の講義も『書經』と併行して繼續されていたし、林學履の師事年次がその記録年よりはるかに過ることは、別に考證しておいた（p. 288 參照）。

この第二次師事期におけるかれの來訪をさすのか、朱熹が向涪にあたえた書翰（別集・卷四「向伯元」）にいう、

臨江の書生張洽がわざわざ迂回して訪ねてくれました。若う人で意欲をもつ、これだけのものはなかなかありません。かれの立ついでにこの手紙をことづけ、あわせて引見を乞わせた、ご協力を得てご教導たまわるようお願いします。

臨江張洽秀才。迂道相訪。後生有志。甚不易得。因其行附以此書。并令請見。幸予其進而教誨之。

向涪、あざなは伯元、もと河南省開封の人だが、臨江軍に住む。向子諲（あざなは伯恭・鄉林、一〇八六—一一五三）のむすこで、朱熹の友人である。この書翰の上文が、あるいは、その執筆時點すなわち張洽の訪問時點を告げてくれるかもしれない。

三、四年來、病氣せぬ日とてありません。今年はとりわけひ

どく、頭も疲れきり、筋骨もたるみ、飲食はそれほど落ちていませんのに、肉體は瘦せはそり、日ごと枯槁にちがついて、蒲柳の姿は秋を待たずに逝きそうです。……祠祿の任期が満了しかけ、更めて請願しかねていましたのに、朝廷は心にとどめていて下さり、かくて鴻慶の命が出ました。

三數年來。無日不病。而今年爲尤甚。神思疲憊。筋骸縱弛。飲食不至大減。而肌膚消削。日就枯槁。蒲柳之姿。望秋先頹。……祠祿將滿。未敢再請。而朝廷記憶。遂有鴻慶之命。

「鴻慶の命」とは南京鴻慶宮（道觀）を主管する職、いわゆる奉祀官の拜命をさす。しかし、朱熹はたびたび右職を拜命しているから、いまにわかにその時點を決めがたい。

張洽の第二次師事は、そんなに長くは續かなかつたらしい。朱熹が彭龜年にあてた書翰（別集・卷三「彭子壽」）にいう、

張元德の手紙をもらいました。もれ承れば大施はすでに豫章に次られたとのこと。いまは駕を里門に解かれるべき時です。

得張元德書。竊聞大施已次豫章。今當稅駕里門矣。

彭龜年（一一四二—一二〇六）、あざなは子壽。吏部侍郎に就任していたかれが韓侂胄を罷免するように寧宗に上疏したのは、紹熙五年十二月九日（一一九五・一二〇）である。韓を信賴する寧宗は、一おうけんか兩成敗の形で、まもなく彭龜年を宰相職からおろし、煥章閣待制の資格で知江陵府湖北安撫使に任命、韓侂胄のほうは「一官を進めて在京の宮觀を與え」た（宋史全文續資治通鑑・卷二十八およ

び樓鑰『玫瑰集』卷九十六收「忠肅彭公神道碑」。前掲の書翰に「大旆すでに豫章に次る」とあるのは、知江陵府として赴任する途次をさし、その時點は翌六年（一一九五）の正月ごろと推定される。當時、張洽はすでに郷里の清江縣に歸っていたのである。

その後、張洽が朱門に師事した形跡はない。前掲書翰にみえるかれの訪師は、あるいは朱熹の最晩年ごろに屬するかもしれないが、少なくともかれは慶元四年（一一九八）ごろ郷里にあった。そのことは、吳必大の死を報せる黃榦にあてた朱熹の書翰二通によって知ることができる（p. 308参照）。

さて、以上の考察結果をまとめると、萬人傑の師事期はおおよそつぎの五次に分かたれる。

第一次……淳熙七・八年（一一八〇・八一） その下限はおそらくとも朱熹が南康軍を離任する淳熙八年三月二十七日まで。

第二次……淳熙十五・十六年（一一八八・八九） その下限はおそらくとも淳熙十六年九月まで。

第三次……紹熙四年（一一九三） その下限は翌五年（一一九四）のはじめに及んだかもしれない。

第四次……慶元二年（一一九六）十二月から翌三年（一一九七）一月まで。

第五次……慶元五年（一一九九）

## 吳 必 大

あざなは伯豐、興國軍（湖北省東南部）の人。おそらく萬人傑と同じ大冶縣の出身であろう（p. 300）。かれこそ朱熹から最大の期待を寄せられた高弟であり、また「語錄姓氏」が「戊申・己酉（淳熙十五・十六年、一一八八・八九）所聞」と注する記録者でもある。しかし、その學問が結實せぬうちに死去したためか、『宋史』には立傳されず、學案・卷六十九にもつぎの略傳を収めるにとどまる。

先生（吳必大）は早年に張南軒（張栻）・呂東萊（吳祖謙）に師事し、晩年に文公（朱熹）に師事して、ふかく理學を究めた。

先生早事張南軒・呂東萊。晚師文公。深究理學。

「語錄姓氏」の記録年は、必ずしもかれの入門年次を示すものではないらしい。それが面接によったか書面のみの交渉にとどまったかわからぬが、朱熹への事實上の師事ははるかに遡り、おそらく張栻（一一三三—八〇）・呂祖謙（一一二七—八一）の没年より前であつたろう。そのことも、萬人傑の章を参照されたい（p. 300）。

吳必大の朱門における師事がはじめて確認されるのは、やはりその記録年である兩年次に至つてであり、かれはそのところの問答につねに萬人傑・黃榦とともに登場する。いまかりに、兩年次（一一八八・八九）の師事を第一次とするが、かれは第二次師事期をもつた。それを検討するために、同席弟子のリストと相互の關係を表示する。

- ③① 萬人傑 1180→  
④② 黃 營 1188  
② 李方子 1188→

吳必大

- 周明作 1192→  
林 恪 1193  
楊 至 1193-94  
甘 節 1193→

- 竇從周 1186  
吳必大 1188・89  
李方子 1188→

- ⑦ 葉賀孫 1191→  
⑤ 蔡 懇 1192  
③ 晏 淵 1193  
張 洽 1187・1193  
鄭南升 1193  
② 潘 柄 1193  
石洪慶 1193

林 恪

- ④ 潘時舉 1193→  
楊 至 1193-94  
黃義剛 1193→  
⑤ 林學蒙 1194→  
黃顯子  
趙師夏  
② 郭叔雲  
陳希傑  
② 余宋傑

これに據れば、吳必大は紹熙四年（一一九三）ごろにふたたび朱門を訪れている。李方子もそのころ朱門に在ったが（p. 888）、黃營のほうは郷里に病臥していたはずだから（p. 889）、吳必大の李方子との同席例は、すべてその第一次師事期に屬すると考えられる。周明作については吳雉の章にゆずり、ここでは林恪・甘節について補説しておく。

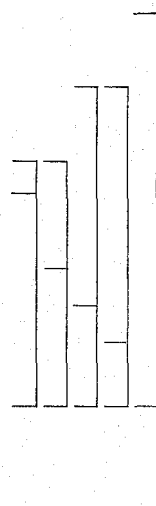
林恪、あざなは叔恭（共）。「語錄姓氏」は「天台の人」といい、學案補遺・卷六十九では臨海の人という。ともに台州の屬縣である（浙江省、今名みな同じ）。「語錄姓氏」に「癸丑（紹熙四年、一一九三）所聞」と注する記録者だが、履歴は一切わからぬから、やはり同席弟子のリストを掲げて考察する。

みぎの表を一べつすると、林恪が朱門に在った時期は紹熙四・五年（一一九三・九四）に限定される。しかし、かれは長沙に同行した

形跡はないから、その下限は紹熙五年の三月末であろう。他の年次を記録年とする弟子たち、すなわち竇從周以下蔡懇に至る數人が兩年次にも朱門に在ったことは、前稿および本稿において考證してある。したがって、黃顯子以下の非記録者の五人も、まずみぎの兩年次に朱熹に師事していたと想定してよからう。

郭叔雲、あざなは子從、潮州揭陽縣（廣東省）の人。學案補遺・卷六十九に收める略傳は上記につきる。林恪の所錄にのみ現れる。陳希眞、名諱・籍貫ともに未詳。葉賀孫（3）・潘時舉（2）の所錄に現われる。

余宋傑、あざなは國秀・伯秀、建昌軍（江西省南城縣）の人。學案・卷六十九および語類・卷一二〇・訓門人にみえる。履歴は一切わからない。語類における同席の弟子は林恪以外に、葉賀孫（5）・潘時舉（3）・沈偶（一一九八→2）・呂熹（一一九九→2）がある。したがって、かれは紹熙四年（一一九三）のほかに、慶元五年（一



- ② ④ ② ④ ③ ② ③ ②
- 李閔祖 1188→  
葉賀孫 1191→  
周明作 1192→  
潘時舉 1193→  
李方子 1188→  
李 淵 1193  
楊 至 1193・94  
黃 幹 ?  
林學蒙 1194→  
龔蓋卿 1194  
蕭 佐 1194  
吳 振 1194

甘 節

- ⑥ ③ ② ②
- 林 賜 1195→  
董 銖 1196→  
曾興宗 (光祖)  
吳仁父 (伯壽)  
周 椿 (志仁)  
張仁叟 (志仁)  
楊復旂  
杜 東兄  
黃 譚

記録年とする記録者たちは、いずれも長沙期に師事した弟子ばかりだからである。そして、おそらくは長沙期の師事を了えて、甘節は歸郷して行ったとおもわれる。林賜(一一九五)や董銖(一一九六)との同席例は、かれの第二次師事を告げるものである。實際にも、かれ自身の所録(語類・卷十・第八十二條)にみえるつぎの朱熹のことは、それを裏づけてくれる。

わたくしは潭州(長沙)より歸つてから、ほ

一九九)に第二次師事期をもつたらしい。

甘節、あざなは吉甫・吉父、撫州臨川縣(江西省)の人。學案・卷六十九には「文公の高弟」とあるのみ。「語錄姓氏」が「癸丑以後(紹熙四年、一一九三)所聞」と注する記録者で、記録年の起點は入門年次であるうが、他に確證はない。つぎに同席弟子のリストとその關係を右に表示して、その後の師事情況を考察する。

まず、記録年が甘節のそれにさきだつ李方子ら四弟子については、いずれも紹熙四年(一一九三)以後の師事も確認されているから、甘節の入門年次は記録年の起點であると考えてよい。この第一次師事の下限を把握することはむづかしいが、少なくとも、それは翌紹熙五年(一一九四)まで繼續し、しかもかれは長沙へ出向する朱熹に隨伴して行つたらしい。かれが同席する紹熙五年(一一九四)を

書。

かのことは少しも申さず、しょっちゅう申して來たのは綿密に讀書するようにということだけだ。

某自潭州來。其他盡不曾說得。只不住地說得一箇教人子細讀

第二次師事期において甘節が同席する可能性をもつものに、みぎの林賜・董銖のほか、李閔祖・葉賀孫らがある。

第二次師事期をもつた甘節も、「偽學の禁」が緊迫したころは、すでに朱門にいなかった。朱熹の「答黃直卿」第二十一書(續集・卷一)にいう、

先日、吉州の王峴に答えた書面の數句は、かなり要領をえたものですが、いま餘計ながら書きつけて送りますから、甘吉父に見せてください。

前日答吉州王峴書中有數句。頗甚簡當。今謾錄去。可以示甘

吉父也。

この書翰の冒頭には、つぎの如く禮書の校訂が思うように進捗せぬ状況をのべていう、

禮書は引越しのごたごたや、城のつき合いで、終日つぶれて對校點檢するひまができません。……「王朝禮」は初めじぶんで整理するつもりでしたが、いまは讀む氣力なく、すでに子約（呂祖儉）に送って校定を頼みました。

禮書。緣遷徙擾擾。又城中人事。終日汨沒。不得功夫點對。

……王朝禮。初欲自整頓。今無心力看得。已送子約。託其□定。

この文章で知りうることは、慶元二年（一一九六）に着手された禮書の改編整理が若干進出した段階であること、および別に考證してあるように（p. 310）慶元四年（一一九八）七月ごろに逝去した呂祖儉がなお健在なことである。黃榦が郷里福州に歸ったのは、その章に説くように慶元二年（一一九六）である。とすれば、みぎの書翰は兩年次の中間あたりの時點、すなわち慶元三年（一一九七）ごろに書かれたのでなからうか。しかも、そのころ甘節は黃榦の故郷福州の近邊にいたのである。

その甘節も間もなく郷里の臨川縣に歸って行つた。朱熹の「答曾景建（曾極）」（續集・卷七）にいう、

季通・子約が相次いで亡くなりました。善人に對する天のころなさがかくまひとは意外です。かれらを念うごとに、いたましくてやる方ない氣持です。さきごろ吉甫が歸郷したことを

聞き、はじめてひそかに疑念をもちましたが、伯豐（吳必大）の子がこんなことは。……

季通・子約相逐而逝。不謂天之無意於善人乃如此。每一念之。輒爲悲愴不能爲懷也。昨聞吉甫之歸。方竊疑之。伯豐之子乃如此。……

この書翰の内容にはわれわれの理解を拒むものを含むが、あきらかに蔡元定の死（慶元四年一一九八年八月）よりほど遠からぬころのものである。ついでに、曾極について説明しておく。

曾極、あざなは景建、甘節と同郷の臨川縣の人。父曾滂（あざなは孟博）は陸氏兄弟と師友として交わり、かれ自身も家學をつぐ。のちに、丞相史彌遠に反抗する題詩がたたり、道州（湖南省道縣）の配所で死ぬ（學案・卷五十七および『宋史』卷四一五・羅必元傳）。朱熹にはかれにあてた書翰八通がある（文集・卷六十一および續集・卷七）。そのほか語類・卷一二五（參同契）第五十六條には、かれの見解に言及されているが、これは朱門に親しく師事していたのではなからう。

さて、紹熙四年（一一九三）の師事を了えて朱門を去った吳必大の、その後はどうか。學案の略傳は冒頭部分にいう、

父の任をもつて官に補せられ、吉水縣丞となる。

以父任補官。爲吉水丞。

吳必大の父がいかなる官職に就いていたか知るべくもないが、か

れはいわゆる蔭補の特典によって吉州の吉水縣（江西省）丞に就任する。その時点については、朱熹の「答吳必大」第十五書（文集・卷五十二）が告げてくれるはずだが、ややめんどろな考證を必要とする。まず、その冒頭部分にいう、

吳轉運使からもらいました手紙では、すでに（任地に）行かれたながら、しばしと歸郷とのこと、ずいぶん心配しております。いまわざわざお使いを立てての便りを忝うして事情を伺うことができ、大いに安心いたしました。ご來翰ではなお去就をきめかねておられますが、お使いの方の話では、すでに近く日をトし、親御を迎えて赴任なさる由、そうあればやはり好つごうですが、いつごろ赴任にきまりましたでしょうか。州知事は楊子直（楊方）ですし、呂子約（呂祖儉）・劉季章（劉黼）・許景陽（許子春）とも交游できます。司法官屬の程允夫（程洵）も任期が満了しておらずまだゆつたりやれますから、楽しいことでしょう。

熹はこの夏、病氣にかかるなり危うく死ぬところでしたが、幸いただ今は少し落着きました。しかし、眼がひどい内障をおこし、左はもう物が見えず、右も次第に視力が衰えてゆき、數か月すればもう本が讀めなくなりましょう。辭職退休のことはまだ申請ができませんし、しかも先ごろ殯陵について意見を提出したわたくしです。いま聞けば、わたくしと前後して意見を提出したものは、みなすでに處分されたそうで、しせん、こ

のままですみそうもありません。先月末、すでに自責の文章を奉呈しておきました。おかみの寛大な思召して罪責をのがれることもありましようが、言路にあるものは決して許してくれますまい。旬日のうちに處分を見るはずです。

得吳漕書乃云。已到而暫歸。深以爲念。今承專使惠書。得聞詳實。殊以爲慰也。來書去住未定。而來人却云。已卜近日。迎侍之官。如此則亦甚便。不知定以幾時到官也。楊子直爲守。呂子約・劉季章・許景陽。皆可與遊。糾據程允夫。官亦未滿。尙得從容。亦可樂也。熹今夏一病幾死。今幸少安。然目苦內障。左已不復見物。右亦漸昏。度更數月。即不復可觀書矣。辭職告老未得請。而向來嘗議殯陵。今聞議相先後者。皆已行遣。勢不容已。前月末間。已上章自劾。寬恩容可追責。言路決不相容。旬日間當有所處。

まず、この書翰にみえる「到官」が吉水縣丞としての赴任をさすことは、下文に列擧される人名によってあきらかである。

楊方、あざなは子直、乾道六年（一一七〇）の記録者とされる朱門の弟子である。かれについては、黃卓の章（p. 323）に詳説してあるが、「守廬陵」すなわち吉州をも管轄する廬陵郡の知事をつとめたことはその傳記にみえる。

呂祖儉、あざなは子約、呂祖謙（伯恭）の弟であり、慶元元年（一一九五）四月二日、韓侂胄の趙汝愚罷免を非難したため韶州（廣東省曲江縣）安置の處分をうけ、五月四日吉州安置に變更、改めて吉州

に送られた (p. 309)。

劉黼、あざなは季章、學案・卷六十九に「景陽許子春とともに廬陵の醇儒であり、朱文公に師事した——與景陽許子春。皆廬陵醇儒。從朱文公學」とある。

程洵(一二三—九六)、あざなは允夫、克庵と號して、婺源縣(江西省)の人、朱熹の祖母(朱森の妻)の兄の孫にあたり、父は程鼎(あざな復亨、韓溪と號する)、『克庵集』(知不足齋叢書收)の末尾に程暄の「程克庵傳」があり、學案・卷六十九はそれにもとづく略傳を収める。時點は明記されていないが、廬陵郡の知錄に任命されたことがみえる。

ところで、吳必大が吉水縣丞に就任した時點は、みぎの楊方の條で寧宗の即位後、すなわち紹熙五年(一一九四)七月以後とわかるが、朱熹の書翰の下文によって、さらに限定することができると。そこにみえる「殯陵」に關する意見書とは、孝宗の陵墓が水に浸って適地でなく、改葬された場所もほとんど變りのないことがわかり、そこで勸告があったにもかかわらず、當局者がそれを握りつぶした、そのことを朱熹がはげしく非難したものである。年譜に據れば、その時點は紹熙五年(一一九四)十月十日で、いま文集(卷十五)にみえる「山陵進狀」がそれである。また、かれがそのことに責任を感じて自効の文章を奉呈したのは、同じく年譜に據ると、翌慶元元年(一一九五)七月であり、同じく文集(卷二十三)に收める「乞追還待制職名并自効不合妄議永阜殯陵事奏狀五」がそれである。したがっ

て、前掲の朱熹の書翰は同年八月ごろの執筆と限定される。そのころといえば、「僞學の禁」がようやく露わな様相を呈しはじめ、既述のごとく趙汝愚・呂祖儉ら道學者に對する彈壓が相次ぎ、現に呂祖儉は吳必大が就任する吉州に流されて來ている。かれが吉水縣に一どは赴任しながら歸郷して、去就を決めかねていたことの背景には、みぎの情況があったからであらうし、朱熹がそのことを憂慮したのは、朱熹に對する吳必大の氣がねを察したからではなかったか。朱熹が危惧した吳必大は、就任するにはした。朱熹の第十六書には城入りされて呂子約・程允夫・許・劉たちに會いましたか——入城曾見呂子約・程允夫・許・劉諸人否とある。だが、當初に躊躇を示した吳必大は結局、辭職を敢行する。學案の略傳にいう、

當局者(？)が朱文公を僞學よばわりしたので、退官した。

屬權指朱文公爲僞學。遂致仕。

慶元元年(一一九五)十一月二十五日に永州安置の處分をうけた趙汝愚は、翌二年(一一九六)一月二十日配所で死ぬし、同年十二月には蔡元定が道州に流され、同じころ、監察御史の沈繼祖が朱熹を彈劾して、朱熹の身邊も危うくなる。吳必大の退官は、みぎの一年あまりの間であらうが、いまその時點を決める直接の資料を缺く。

その後の吳必大については、老いと病いに苦しむ朱熹に無限の哀惜と痛恨をのこして急逝したことを知るのみである。その死はいつか、その時點を知るには、またしても考證の勞が要求される。



吳必大の死に對する朱熹の悲歎のことばは、その書翰の隨處に見ることが出来る。そのうち、逝去の時點を考察するうゑに資するものをつぎに掲げる。

(1)熹、正月前に周益公（周必大）から手紙をもらひ、吳伯豐が瘡を病んで重態だと報せてありました。ついこのごろ子約（呂祖儉）の手紙をもらつて、はじめてその死を聞き、なんとも悲痛のきわみです。……聞けば、死後の始末は老兄あなたと無疑（會三異）どのにすっかりめんどろをみてもらつたそうで、友誼のほどがよくわかります。

熹歲前得益公書。報吳伯豐病瘡甚危。適得子約書。乃聞其訃。深爲傷痛。……聞後事深荷老兄與無疑周全之。足見朋友之義。

——朱熹「答劉季章」第十九書（文集・卷五十三）

(2)江西から手紙をもらいました。吳伯豐は果たして昨年の冬病氣であえなくなりました。かれの透徹した思索と開闊の氣宇は、同志の中でかれに及ぶものはほとんどありません。また子約（呂祖儉）や元德（張洽）からも手紙がまいり、みなかれの自己確立の精神が、とりわけ眞似のできぬことをいっております。儒門衰敗の秋に、あたかもかような人物を喪ひ、まことに歎かわしいことです。

得江西書。吳伯豐果以去冬得疾不起。見其思索通曉。氣象開闊。朋友中少能及之。又子約・元德書來。皆言其自樹立之意。尤不可及。法門衰敗之秋。又適喪如此等人。尤可痛悼也。——

朱熹「答黃直卿」第二十九書（續集・卷二）

(3)一月あまり病いに臥し、もう助かるまいと思ひさだめましたが、夏に入つて少しずつ快くなりました。ただ、現在には後遺症がおそいかかり、かなり仕事もうち捨てています。來年は七十歳になります。禮のさだめから申しても衰殘のはずですから、悲歎にくれることもないのです。ただ、わが儒の道が衰微し、いまや同志たちが固守するべく想いを潛めてくれ、將來を期しうるといふやさきです。この年月、やっと伯豐という誰にもまして望みを託せるものが出て、しかも働きざかりだったのが、急に物故することになり、これを聞いて悲傷にかきたてられ、やる瀬ない想いです。日ごろ深くつきあつていたものの氣もちだけではありません。

伏枕月餘。已分必死。自入夏以來。却稍輕減。但今餘證狂來。頗亦廢事。明年便當七十。據禮而論。亦合衰殘。無足深歎也。但此道衰微。方賴朋友潛思固守。以庶幾於久遠。年來僅得伯豐。最爲可望。乃復盛年。奄至大故。聞之傷悼。不能爲懷。非獨以平日往來遊好之情而已。——朱熹「答黃子耕（黃鑒）」（文集・卷五十二）

(4)一別以來年をかさね、まったく消息を伺いませんが、ちかごろいかがお過ごしでしょうか。……熹は衰殘多病の身、一日とて病いに悩まぬ日はありません。來年は七十歳になります。蔡季通・呂子約・吳伯豐が、相次いで世を去り、悲歎のきわみ

です。

一別累年。都不聞動靜。不審比日爲況何如。……熹衰朽疾病。更無無疾病之日。明年便七十矣。……蔡季通・呂子約・吳伯璽相繼淪謝。深可傷歎。——「興髮亞夫」第三書（文集・卷六十三）

(5) 齋中は昨秋以來、からっぽで一人もいなくなり、手がかからずに幸いでしたが、今はまた訪れるものがあります。

でも数は多くないし、目下のところずば抜けて期待のもてるものは現われません。ただ、江西の吳必大伯豊と申すもの、なが年わたくしに師事して、人なみすぐれた明敏さをもち、なかなか思索もやめましたのが、州縣の政治にたずさわって、事ごと民に及ぼす効果を挙げ、しかも身を持つること勁正、時勢に屈するところなく、めったに得られぬ男でしたのに、いま不幸にして短命で亡くなり、悲しみに堪えません。

齋中自去秋後空無一人。亦幸省事。今復頗有來者。然亦不多。目前未見卓然可望也。唯江西吳必大伯豊者。相從累年。明敏過人。儘能思索。從事州縣。隨事有以及民。而自守勁正。不爲時勢所屈。甚不易得。今乃不幸短命而死。甚可傷悼耳。——朱熹

「答林德久（林至）」書（文集・卷六十二）

みぎの書翰(1)によれば、朱熹が吳必大の死を知ったのは、呂祖儉（子約）の書翰によるが、その呂祖儉は書翰(4)の時點ではすでに亡くなっている。書翰(4)には(3)とともに「來年は七十歳になる」とあるから、その執筆時點は慶元四年（一一九八）と認定される。そこに「相

次いで世を去った」と言及される蔡元定は、まさにこの年の八月に配所の道州で死んでいる。いずれが先後するかはともかく、呂祖儉の死は吳必大や蔡元定の死から遠からぬ時點であることを想わせる。ところが、ここにわれわれの考察を混迷に陥らせる一つの事實がある。『宋史』（卷四五五）呂祖儉傳ではその死を慶元二年（一一九六）としているし、學案・卷九十七の「慶元黨案年表」にあっても、慶元二年丙辰七月の欄に、「呂子約、筠州に卒みまかる」とみえる。もしもこれを信ずれば、吳必大の死は慶元元年（一一九五）十二月ということになる。それでも吳必大―呂祖儉―蔡元定とつづく死を「相次いで世を去った」といえぬわけではないが、呂・蔡の死はいささか間隔があきすぎる。これは呂祖儉の卒年に誤りがあるのでないか。

既述のように、呂祖儉が當初の韶州安置から吉州安置に移されたのが慶元元年（一一九五）五月四日である。『宋史』（卷三十七）寧宗紀の慶元二年（一一九六）七月戊子（十一日）の條には、

情狀を酌量して流人呂祖儉らを内郡に移す。

量徙流人呂祖儉等于内郡。

とある。もしも學案の年表のように「七月筠州で卒みまかった」のであれば、かれは量移されるなり死んだことになる。むろん、そういう事態だってありえぬことではない。だが、ここに、それが誤りであることを知る一つの資料がある。學案補遺・卷五十一の呂祖儉の條に付せられた、清・王梓材の案語にいう、

王忠文がしるす先生の書帖の跋文にはまたいう、「韶州に安

置され、改めて吉州に遷される。その明くる年筠州に移され、越えて四年、筠州の大愚僧舎に卒かる。

王忠文跋先生帖又去。安置韶州。改遷吉州。明年移筠州。越四年卒于筠之大愚僧舎。

「忠文」とは王禕の諡號であり、學案・卷七十一によれば、『華川集』『玉堂雜著』の二著があるというが、いま原本を見ることが困難である。ここにいう「越四年」は「四年を経て」の意であろうが、それだと呂祖儉の死は慶元六年（一二〇〇）となつて、不合理はいさう増大する。姜亮夫の『歷代人物年碑傳綜表』にかれの卒年を一二〇〇年とするのは、おそらくこの案語にもとづいたのであろう。それはともかく、みぎの王禕の跋文は、少なくとも、呂祖儉が筠州に量移されてすぐ死去したのではないことを物語っている。それではどう考えればよいか。筆者は一つの假説を提供する。「越四年」の越字の下に而字が脱するとみて、「一年をとび越えて慶元四年」の意と解する。もしもそうあれば、吳必大の死は慶元三年（一一九七）十二月、呂祖儉の死は翌四年（一二〇〇）七月、そして蔡元定のそれは同じ年の八月、すなわち三人の死が「相次い」だといって少しもおかしくないのである。

結局、吳必大の師事期はつぎの兩次につきる。

第一次 淳熙十五・十六年（一一八八・八九）

第二次 紹熙四年（一一九三）

## 包揚

あざなは顯道、克堂と號し、建昌軍南城縣（江西省）の人。「語錄姓氏」にはかれの記録を「癸卯・甲辰・乙巳（一一八三—五）所聞」とするが、この記録年次には大いに疑惑がもたれる。學案・卷七十七に收める兄包約（許道）・弟包遜（敏道）との合傳によると、兄弟は初め陸九淵（子靜・象山、一一三九—九二）に師事した。そのころ、包揚は朱熹を非難したことがあり、朱熹からの書翰でこのことを知った陸九淵は大いに驚き、朱熹に詫び状を送るとともに、包揚をも書翰でたしなめた。この事件は學案の略傳にみえるが、編者はおそらく陸九淵の「與包顯道」第二書（象山先生全集・卷六）および朱熹の「答曹立之（曹建）」第一書（文集・卷五十二）によって構成したらしい。包揚が陸九淵に師事したのはかなり早く、かつその師事も長期にわたったらしい。陸九淵の「與包顯道」第一書（象山先生全集・卷六）には張栻の死を悲しむ語がみえるから、かれが逝去した淳熙七年（一一八〇）二月二日から遠からぬ時點の執筆とわかる。包揚には約二五〇條の「象山語錄」（象山先生全集・卷三十五收）もある。

さて、學案の略傳は既述の事件を紹介したあと、かれの朱熹への師事にふれていう、

象山が亡くなると、先生（包揚）はその門生を引率して朱子の精舎へ行き、弟子の禮を執った。

及象山卒。先生率其生徒。詣朱子精舍中。執弟子禮。

陸象山すなわち九淵の死は、紹熙（壬子）三年十二月十四日（西紀では一九三一年一月）であるから、學案による限り、かれの入門はそれ以後であつて、「語錄姓氏」の記録年とはなはだしく矛盾する。その記録年を十年ずらして「癸丑・甲寅・乙卯」とするなら、いちおう事實に合いそうにみえる。みぎにいう「弟子の禮を執つた」かれの來訪については、實は語類・卷二一九（訓門人）に語られている。

包顯道が學生十四人をつれてまいり、すでに四日になるのに授業をしてみせない。先生は義剛に、顯道はここへ何しにやつて來たのか、わけをきくようにいわれた。そこで翌日みなが精舍の規定どおり『論語』を講ずることになった。

包顯道領生徒十四人來。四日皆無課程。先生令義剛問顯道所以來故。於是次日皆依精舍規矩說論語。——黃義剛錄

かくて、包揚の引率して來た學生五人が、『論語』を各自一章ずつ講釋して、朱熹の批評を仰いだ。この報告の作成者黃義剛の記録年は、紹熙四年以後（一一九三）であるから、學案の略傳が陸象山の死後とする説と、まさに一致する。

實は、包揚の入門が紹熙四年以後であることは、同席する朱門弟子のリストからも明白であり、ここにかれらの關係を表示する。

筆者は上記において、包揚の記録年を十年ずらせる説を提出したが、みぎの表に據るかぎり、つづく二年すなわち紹熙五年（一一九四）と慶元元年（一一九五）にかれが朱門を訪れた形跡はまったく認

②	廖德明	1173→
③	萬人傑	1180→
③	鄭可學	1190
包揚		
②	葉賀孫	1191→
	潘時學	1193→
⑬	黃義剛	1193→
	輔廣	1194→
	林夔孫	1197→
	沈僩	1198→
②	黃輔符	?
	胡安之	（舜功）（叔器）（元善）
	詹體仁	
	黃仲本	
	德先	

められない。ことに紹熙五年は、朱熹が長沙と臨安へ相次いで出向した八か月をふくむ。それに、包揚は第一次訪問に學生十四人を引率していた。旅費・食糧などの現實的な條件をも無視しえないとすれば、かれの第一次師事はまもなく終焉を告げ、かれはふたたび學生を引率して引き揚げて行つたと想像される。だから、第一次師事の際にかれ自身の記録が残されたかどうかさえ疑わしい。前掲の表をみると、いよいよその疑いは深まる。ともかくも、「語錄姓氏」の記録年は單なる干支のずれでないことがわかつた。どうしてこのような誤りが生じたか、筆者にはまったく見當がつかない。

われわれがふたたび包揚を朱門に見いだすのは、「僞學の禁」に遭うたかの蔡元定を見送る日である（前稿 p. 210）。その時點は慶元二年十二月（西紀では一一九七年一月）であるが、そこには葉賀孫・

萬人傑・詹體仁および輔廣・輔萬兄弟とともに、かれはあきらかに朱門に師事している。前掲表における萬人傑・葉賀孫との同席例は、包揚の第一次師事期中のものを含むかもしれぬが、その多くはこの期に屬すると考えられる。

すでに兩次の師事をみた包揚は、朱熹の最晩年ごろ三たび朱門を訪ずれる。黃義剛が記録する語類・卷一一九（訓門）第八條は、この第三次訪問當初の記録である。

先生が顯道にいわれた、「ながらく會わなんだが、この年月、どんな勉強をしておられたかな。」

「ただ既成の書物を讀んでばかりおりました。」

翌日、先生は親しく精舍にやって来て、大いに學生たちを集められた。林夔孫の記録——顯道が先生にお願いして、學友たちに講書していただくようにいったのである。

先生がいわれた、「顯道や諸兄がはるばる来てくれてありがたいが、わたしが日ごろ申していることでいいのだ。特に何かいおうとすると、またいふべきことがないみたいだ。いま、きみの郷里で日ごろいっていること（陸象山一派の學説をさす）と違ふ點は、讀書するかしないか、義理を講究するかしないかの違いだけだ。わたしの意見は、まず知らなければ行なえぬというのだ。」

先生謂顯道曰。久不相見。不知年來做得甚工夫。曰。只據見成底書讀。……次日先生親下精舍。大會學者。夔孫錄云。顯道請

先生爲諸生說書。先生曰。荷顯道與諸兄遠來。某平日說底便是了。要特地說。又似無可說。而今與公鄉里平日說不同處。只爭箇讀書不讀書。講究義理與不講究義理。如某便謂是須當先知得。方始行得。

以下、長い注意が續いたあと、朱熹は同席する黃榦にむかつて、つぎの如きいう、

「直卿（黃榦）はわたしとなが年いっしょにあつて、日ごろ書物の讀みかたがたいそう綿密だ。數年のあいだ三山（福州）にいたから、やはり（その）同志たちにはずいぶん役だったことであろう。これから一つわたしに講義して聞かせてくれないか。」

直卿與某相聚多年。平時看文字甚子細。數年在三山。也煞有益於朋友。今可爲某說一遍。

おなじ黃義剛（一一九三—）によるこの記録は、同時記録者に林夔孫（あざなは子武）をもつから、まず慶元三年（一一九七）以後のものであると認定され、さらに黃榦が「數年三山にいた」とあるから、これはあきらかに慶元五年（一一九九）末か翌六年春に黃榦が朱門にもどった時のものである（p. 175）。そのころたしかに黃義剛と林夔孫は朱門にあった。黃義剛はまもなく歸郷して行ったらしいが、林夔孫はそのまま朱熹の逝去時まで師事した（前稿 p. 177）。

包揚には、みぎの二條だけでなく黃義剛との同席が顯著である。

黃義剛はすでに包揚の最初の師事を傳えているように、ふたりの同席例には紹熙四年（一一九三）のものがいくらか含まれているだろうが、同時に、包揚の第三次師事期におけるものも少なくないらしい。ふたりが他の一弟子を混えた三人同席の例（4）は、そのすべてが第三次師事期に属する。林夔孫についてはすでに言及した。胡安之（叔器・符叙（舜功）が紹熙五年（一一九四）に師事していることは、前稿を参照されたい（p. 178, p. 201）。

さらに、包揚の鄭可學との同席ケースを考えると、ふたりがさらに他の一弟子を混えた三人同席の例も同様である。沈僩は記録年の起點・慶元四年（一一九四）の師事が翌年まで繼續しているし、廖德明は前稿（p. 188）でのべたように、慶元五年（一一九五）に、潮州通判に赴任する挨拶をかねて朱門を訪ねている。

したがって、前掲表における同席例の大半は、包揚の第三次師事期のものが占めると考えられる。かれの第三次訪師は慶元五年（一一九五）中に實現していたろうし、それはかの黄榦の訪師もこの年次中に實現していたことを證するであろう。

なお、かれの同席者のひとり黄仲本は、學案補遺・卷四十九に略傳を收める、朱熹の友人であって門人ではない。その名諱は未詳だが、復齋と號する邵武の人である。

以上の考察結果を要約すると、包揚の師事はおよそつぎの三次に分かれる。

第一次……紹熙四年（一一九三）

第二次……慶元二年（一一九四）末の前後

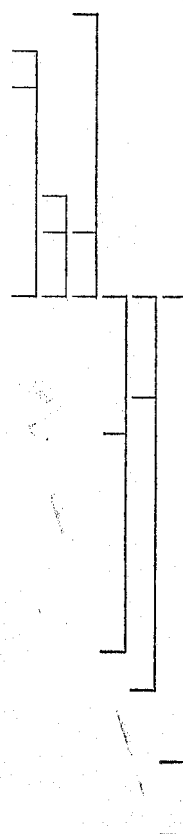
第三次……同 五年（一一九五）末

なお、同時に師事したといわれる兄包約（詳道・弟包遜（敏道）については、包約のみ語類・卷一二〇・訓門人に現われるほか、李方子の所録に一見する。李方子（一一八八）はその活躍の中心が紹熙四年（一一九三）にあるから、學案略傳の説は誤っていないことがわかる。

#### 李 閔 祖

あざなは守約、綱齋と號し、邵武軍光澤縣（福建省）の人。「語錄姓氏」に「戊申以後（淳熙十五年、一一八八）所聞」と注する記録者である。學案・卷六十九に收める傳記に據ると、かれは李呂（濱老、一一三一九）の長男で、弟の相祖（時可）・壯祖（處謙）とともに朱門に登り、かれ自身は西塾（子弟のための家塾）における朱熹の孫たちの指導者にえらばれた。のち嘉定四年（一二二二）進士に合格して、古田縣令・廣西安撫使幹辦公事に就任する。まず同席弟子のリストとその關係を次ページに表示する。

これに據ると、かれの記録年の起點・淳熙十五年（一一八八）における師事は、翌十六年（一一八九）も繼續したらしい。童伯羽がその記録年より少なくとも一年さかのぼることは、前稿（p. 163）に説い



- ② 黃 榦 ?  
 ② 余大雅 1178→  
 ③ 余大猷 (德修) 1188  
 ② 王 黃 1189→  
 ② 楊道夫 1190  
 ② 童伯羽

李閔祖

- ⑩ 葉賀孫 1191→  
 周明作 1192→  
 李壯祖 ?  
 甘 節 1193→  
 黃義剛 1193→  
 輔 廣 1194→  
 陳 壇 (器之)  
 曹叔遠 (器遠)  
 吳伯英 ?  
 林 賜 1195→  
 ② 錢木之 1197  
 ② 林夔孫 1197→  
 沈 偶 1198→  
 李 儒用 1199  
 ⑥ 吳 雉 ?  
 李仲實 (宜之)  
 吳南鼎 (叔和)

物語る。林夔孫は慶元五年から翌年三月の朱熹の死に至るまであきらかに朱門にあったし(前稿p. 191)、沈偶との同席例もおそらくこの年次に属するだろう。また、錢木之(二一九七)との同席例が示す李閔祖の慶元三年における師事が、あるいはこの年まで継続したのではないかと考えられる。

かくて、慶元五年(一一九九)における李閔祖の第何次かの師事が確認されると、實は林夔孫や沈偶だけでなく、かれが黃義剛や輔廣

たとおりだし、紹熙元年(一二九〇)四月末から滿一年間、朱熹は漳州に出向し、しかも李閔祖には童伯羽を除けば、漳州期の弟子との同席が認められぬ。したがって、李閔祖の第一次師事は淳熙十五十六年(一二八八・八九)、おそくとも翌紹熙元年(一二九〇)の、朱熹が漳州へ出發するまで、と推定される。この期における同席弟子は、兩年次を記録年とするもの以外に、余大雅(前稿p. 188)・余大猷(同p. 188)兄弟および王德修(同p. 193)がある。

と同席する問答も、あるいはこの年次に属するのでないかという疑いも生ずる。黃義剛が陳淳の第二次師事に同席したことは前稿(p. 188)で考證したし、輔廣も葉賀孫とともに朱門を訪れている。それだけでない、師事が一次にとどまらぬ他の弟子たちについても、同じ疑惑の眼をむけうるし、かくて同席表のみによる考察ははてしなく混迷に陥ってゆく。そうしたとき、筆者は李閔祖自身の所録にみえる一つのさやかな事實の意味するところに氣がついた。

袁州でのお別れぎわに教えを請うと、先生がいわれた、「守約(李閔祖)兄弟はみな堅苦しすぎる。もすこしゆったりした氣分になるんだな。云々」

上記のごとく、李閔祖の第一次師事期は比較的容易に把握されるが、第二次以後になるといささかめんどうである。ただ、それが第何次師事にあたるかかわからぬが、かれが林夔孫・李儒用のふたりと同時に同席していることは、慶元五年(一一九九)におけるかれの師事を

袁州臨別請教。先生曰。守約兄弟。皆太拘謹。更少放寬。云々——語類・卷二一四(訓門人)第十條

ここに見える袁州とは、いまの江西省宜春縣であり、現在の江西省の中心部から湖南省へゆく交通要路に沿った都市である。別章にのべたように、長沙へ赴任する朱熹は、清江縣から新喻縣をへて、この街道を西進している (p. 276)。李閔祖または李閔祖兄弟が袁州で老師に別れたとあれば、それは朱熹が紹熙五年 (一一九四) 四月に長沙へ赴任するときか、同年八月末ごろかが新帝に召されて上京するときか、そのいずれかの旅の途次でなければならぬ。ところで李閔祖には、朱熹の長沙期における弟子たちとの交渉が見られないから、かれはあきらかに長沙へは行っていない。したがって、  
「袁州における別れ」は長沙出向の往路において實現したと斷定される。おそらく李閔祖または李閔祖兄弟は、朱熹の長沙出向を機として、それまでの建陽におけるおそらく第二次師事をうち切り、しかも、長沙へ赴任する老師を旅の途中まで送り、この袁州で別れたのではないか。もしこの推定に誤りがなければ、かれが葉賀孫・周明作・甘節・黃義剛・輔廣らと同席する諸條も、その多くがやはりこの第二次師事に屬すると考えるべきであろう。既述のように、李閔祖は朱熹が孫たちのために設けた私塾の長を命ぜられていた。かたわら塾長として實現したかれの師事は、おそらく一年そこらの短期間に終るものでなかったであろう。筆者はその時期をば、この第二次師事期にかさねて考える。その上限は紹熙三年のある時點であり、下限すなわち袁州における別離は紹熙五年 (一一九四) のおそらく四月中旬であろう。朱熹は五月五日に長沙に到着している。

それにしても、邵武軍光澤縣の出身である李閔祖が、なにゆえこの袁州まで見送って別れたのか。袁州が朱熹の赴任コースからかれらの郷里へ歸る道の分岐點であればともかく、ここで別れたかれまたはかれら兄弟は、もと來た道をふたたびもどらねばならない。あるいは河川による順航の便があったかもしれぬし、袁州がその街道の江西地區における最後の都市であることが、わずかに注目される。筆者には、朱熹のことばから察せられるかれの律義さと學問熱心が考えられるだけで、その眞相は依然として霧に包まれている。

それはともかく、このときの師事には、朱熹のことばがしめすように、弟李壯祖がいっしょであつたろう。どうしたわけか、次第の李相祖は語類中に現われない。

李壯祖、あざなは處謙、やはり記錄者のひとりだが、「語錄姓氏」の注に記錄年を缺く。學案・卷六十九の略傳には、「守約 (李閔祖) とともに科擧に及第、閩清縣尉に調せられる——與守約同登第。調閩清尉」とある。かれの師事情況も同席弟子の調査を俟つほかない。

記錄者……李閔祖 (一一八八)・汪德輔 (一一九二)・周明作 (一

一九二)・晏淵 (一一九三)・劉炎 (一一八九・一一九四、

2)・沈偶 (一一八九)

非記錄者……吳伯英 (吳雄11)・李堯卿 (李唐咨)・王景仁・徐彥

章・周元卿

みぎに據つても、李壯祖の紹熙三・四年 (一一九三・九四) にお



る師事が推定されよう。筆者は前稿(91頁)において、劉炎の第二記録年のしめす紹熙五年(一一九四)における師事の下限が、朱熹の長沙出向以前であろうと推定した。これはまさに李壯祖(李閔祖も)の前二年における師事がこの年まで繼續していることを裏づけてくれる。だが、ここに一つ、かれと兄李閔祖にもからんで、重大な問題がひそむことに氣づく。

すなわち、李壯祖が十一條に及ぶ同席をしめし、かつそのうちの一條には李閔祖も参加する同門吳雄(伯英)は、まがいもなく長沙期に師事していたことである。これは李閔祖兄弟も長沙の朱門に師事したのではないかという疑いを、われわれにいだかせる。しかも別章に説くように、吳雄は岳州平江縣の出身者で、長沙はかれの故郷である。筆者ははじめ、弟の李壯祖がその吳雄と十一條の同席例をもつため、弟のみ長沙に隨行したと錯覺したが、たとえ一條であっても、兄閔祖もかれらと同席している事實を無視するわけにはゆかない。

だが、この問題はまもなく解消した。その項(98頁)に紹介したように、吳雄が蔡元定の幹旋によりはじめて朱門に登ったのは、『考亭』においてであった(學案補遺の略傳)。考亭における吳雄の第一次師事は紹熙五年(一一九四)まで繼續し、わが郷里の安撫使として赴任する老師にかれも隨行したのである。李閔祖兄弟がかれと同席する問答は、だからすべて建陽ないし朱熹の赴任途次におけるものと考えてよからう。

なお、李壯祖には、兄李閔祖と劉炎のほかに、淳熙十五・十六年(一一八八・八九)の弟子たちとの同席が認められない。したがってかれの場合は、紹熙三年(一一九二)から同五年(一一九四)三月に至る師事が第一次であり、沈偶(一一九八)との同席例が示す師事が第二次であろう。實は、沈偶所録のみぎの一條(語類・卷十五・第一二六條)にかれは登場していないのだが、つぎの雙行注が付けられている。

壯祖の記録は同時所聞の疑いがある。別に掲げる(第二七條をさす)。

壯祖錄疑同聞。別出。

この注記にも疑いをさしはさめぬわけでないが、かれには李唐咨(堯卿)との同席例があり、それはあきらかに、李唐咨が女婿の陳淳と朱門を訪れたかれらの第二次師事期、すなわち慶元五年(一一九四)の歳末前後(すでに一二〇〇年に屬する)に屬する。したがって、李壯祖の第二次師事が慶元五年ごろに實現したことは確實である。かれの第二次師事も、第一次と同じく兄閔祖の第三次師事と同時に實現したらしい。その上限は兄の同席例が示すように、さらに二年さかのぼる慶元三年(一一九七)におきうるかもしれない。

さて、以上の考察により、李閔祖の師事はその第一次(紹熙十五・十六年)を除き、のちの兩次は弟李壯祖と重なることが、ほぼあきらかになった。ここで少しく氣がかりなことは、かれが周明作・林

賜のふたりと同時に同席するケースである。

周明作、あざなは元興、朱熹と同郷の建陽（建寧府嘉禾縣、いま福建省建陽縣）の人。「語錄姓氏」に「壬子以後（紹熙三年、一一九二）所聞」と注する記録者。學案補遺・卷六十九には「朱子が易・詩・禮を授けし弟子」とあるだけで、他の資料を缺く。つぎにかれが同席をしめす朱門弟子のリストを掲げる（李兄弟を除く）。

葉賀孫（一一九一）・甘節・潘時舉（ともに一一九三）・林賜（一一九五）・董銖（一一九六）<sup>5</sup>・吳雉（？）<sup>2</sup>・孟武伯・元翰（李姓か？）<sup>2</sup>

この弟子は同席者が少ないから、師事年次の把握が容易でないが、記録年の起點すなわち紹熙三年（一一九二）の入門をいちおう信ずるとして、この年の師事が翌四年（一一九三）に及んだことも考えられる。とともに、その第二次師事が慶元元年（一一九五）以後のある時期に實現していることも、疑いないであろう。林賜は萬人傑の章（p. 289）に説いたように、記録年の起點のほかに慶元三年（一一九七）と慶元五年（一一九九）ごろの師事が想定される（この兩年次の師事は連續するかもしれない）から、李閔祖が周明作・林賜と同席するケースは、慶元三年（一一九七）に屬するのではないか。

つぎに、李閔祖が同席する師事年次未詳の弟子たちについて検討しておく。そのうち最も重要なものは、葉賀孫に次いで同席例の多

い吳雉である。

吳雉、あざなは和中、同じく建陽の人。かれも記録者であるが、「語錄姓氏」の注には記録年を缺く。朱熹の第二の故郷の出身だから、特別の年次を決めかねたのであろう。學案補遺・卷六十九にも「朱子が禮を授けし弟子」とあるだけで、履歷など一切わからない。つぎに同席弟子のリストを掲げるが、かれには三人以上の同席例がまったく見られない。

同時記録者……李閔祖（一一八八）・曾祖道（一一九七）<sup>2</sup>・林子蒙（？）

吳雉の所録に登場する同門弟子……李閔祖（5、李として）・周明作（一一九二）<sup>6</sup>、うち4例は周として）・林賜（一一九五）・董銖（一一九六）・劉源（3、うち2例は劉として）・蕭增光（3、うち2例は蕭として）・王壬（2、うち1例は王として）・遊開・李維申・陳日善

まず曾祖道については、前稿（p. 188）で紹介したように、當人の所録により慶元三年（一一九七）三月における入門が判明するほか、慶元五年（一一九九）における師事も確認されている。ただ、兩年次の師事が連續するかどうかはわからない。

つぎに、林子蒙も記録年不明の記録者だが、吳雉のほかに沈僞（一一九八）・劉礪（一一九九）・陳文蔚（一一八八）との同席が認められる。そのうち陳文蔚は慶元四・五年ごろに第四次師事期をもつ

から、林子蒙は慶元四・五年（一一九八・九九）に師事した、朱熹最晩年の弟子のひとりと考えてよい。

また、董銖はその章に説くように、黃榦と同じころに入門した古參の弟子であり、その師事は數次に分かれるはずである。ただ、語類において確認されるかれの師事期は、紹熙四・五年（一一九三・九四）と慶元元・二年（一一九五・九六）の兩次であり、後者の場合は慶元三年（一一九七）のはじめに及ぶ可能性がある。のこる周明作と林錫については、上記にのべた。

以上によって考察すると、吳雉の師事期は同郷人であるから一定の時期をきめかねるにしても、ほぼ慶元年間（一一九五—一二〇〇）に限定されるようである。もちろん、連続しないであろうが、それを何次かに分かつことはもはや困難である。

最後に、李閔祖が同席する非記録者について付言する。劉源・蕭增光・王壬・李維申・陳日善の五弟子は、吳雉の所録にのみ登場し、學案・同補遺にも收録されておらず、師事年次は吳雉によって判定される。いまはただ遊開について若干の消息がわかるにすぎない。遊開、あざなは子蒙、やはり建安の人（學案補遺・卷六十九に據る。朱熹の「與張孟遠（張杰）」第三書（續集・卷六）に、定夫先生の從孫とある。定夫とは、程子の高弟遊酢（一一〇五—一一三二）のあざなであり、みぎの書翰にはいう、

老衰と病まいにますます侵され、昨冬以來、脚が弱ってひき

つるやら内臓が痛むやら、それが日ごとひどくなり、藥をのんでも少しも效きめがありません。懸車（七十歳の退休）の年が迫り、すでに郡に申し出て、老年退休の歎願書の奉呈方を申請しておりますが、關係廳は躊躇し、舊友たちもたいてい不可とします。はたしてどうなりますか。しかし、このきもちはもう決まっております、利害得失を考えておれません。友人の遊子蒙が南宮の試験（中央試）に参りますが、たまたま出發期がおくれましたので、衢州（浙江省西安縣）に参つて舟を雇いたいのですが、頼むべき知人がありません。腕のたつ方におさしずたまわり案内を願ひとう存じます。

衰病益侵。自去冬來。脚弱拘攣。心腹痞痛。日甚一日。服藥略無効驗。懸車年及。已言於郡。丐上告老之章。而有司疑之。交舊亦多以爲不可。未知竟如何。然此意已決。不復能顧利害得失也。友人遊子蒙趨試南宮。行期偶緩。過衢欲買舟。而無知識可託。欲丐指麾幹事人相導之。

ここに言及される朱熹の退休申請や科擧の省試實施年次をあわせ考えると、この書翰の時點は慶元四年（一一九八）十一月ごろと推定される。遊開も朱熹の同郷人であるから、師事はその前後の時點に限るまいが、やはり朱熹の最晩年の弟子でなからうか。

以上の考察から結論すると、李閔祖の師事期はつぎの三次が指摘され、弟李壯祖のそれはのちの二次と重複するであろう。

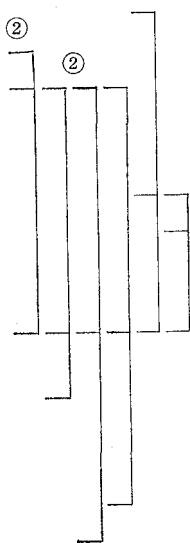
第一次……淳熙十五・十六年（一一八八・八九）

第二次……紹熙三年（一一九二）から同五年（一一九四）四月中旬まで

第三次……慶元三年（一一九七）から同五年（一一九九）まで

## 黃 卓

あざなは先之、學案補遺・卷六十九には別のあざな徳美をもあげ  
るが、語類に關するかぎりこの通稱は現われない。學案補遺には  
“南平の人”という。宋代では四川省南川縣を治とする南平軍もあ  
るが、この“南平”は雅稱として南劍州劍浦縣（福建省南平市）をさ  
すだろう。かれも語録の作成者だが、「語録姓氏」の注記には籍貫  
とともに記録年をも缺く。その履歴は一切わからぬから、まず同席



③ 陳文蔚 1188→  
徐 容 1191  
②② 葉賀孫 1191→  
② 潘時舉 1193→  
甘 節 1193→  
② 郭友仁 1198  
⑬ 沈 偶 1198→  
② 李儒用 1199

## 黃 卓

⑧ 曹器遠（叔遠）  
③ 曾興宗（光祖）  
② 梁 謙  
④ 江 疇（彝叟）  
② 鄭天禧  
周 良

弟子のリストとその關係を表示する。

上掲の表から想定される黃卓の師事期としては、紹熙二年（一一九二）・同四年（一一九三）・慶元四・五年（一一九八・九九）の三次が指摘されよう。記録年の起點が早い陳文蔚も、郭友仁（一一九八）と同席するケースがみられるから、陳文蔚の第四次師事期すなわち慶元四・五年（前稿 p. 197）における同席と考えられる。

ところで、黃卓が慶元四・五年に師事したことは、兩年次を記録年とする弟子たちとの同席例がこれだけそろえば、まず疑う餘地はないが、同時に、想定されるかれの前二次の同席例が、實はこの兩年次に屬するのでないか、という疑念も生ずる。まず、この點について吟味しておこう。

葉賀孫・徐容との同席例は、徐容の師事があまり長くない一次に終り、しかも紹熙四年（一一九三）には及ばぬこと（p. 305）から、黃卓の紹熙二年（一一九二）における師事はまず動かしがたくおもわれる。

また、紹熙四年（一一九三）を記録年の起點とする潘時舉・甘節のふたりは、慶元四・五年（一一九八・九九）ごろ朱門に在った可能性はまったくない（p. 305 および p. 306）。

したがって、上掲の表から想定される黃卓の三次の師事は、ほぼ確實とみてよからう。そこでつぎに、非記録者について検討する。

曾興宗（一一四六―一二二二）、あざなは光祖、贛州寧都縣（江西省）

の人。黃榦に「肇慶府節度推官曾君行狀」(黃文肅公文集・卷三十三)があり、學案補遺・卷六十九には「寧都先賢傳」にもとづく略傳を収めるが、實は、兩者の間にははなはだしい差違がある。まず、學案補遺という、

乾道七年(一一七一)解試に擧げられ、特に奏名にあずかり肇慶府推官を授けられたが、慶元初め僞學が禁ぜられると、先生(曾與宗)は朱子に師事したことがあるというので、辭職して歸郷した。

乾道七年舉解試。特奏名授肇慶推官。慶元初禁僞學。先生以嘗師事朱子罷歸。

これに對して、黃榦が撰する行狀にはいう、

十六七歳のころからもう科擧の勉強をいとい、もっぱら己れの爲めにする聖賢の學を志した。……二度鄉薦にあずかったが(解試を受験した)、合格しなかつたので、科擧の受験を放棄した。慶元五年(一一九五)特例の恩典により進士の資格をうけ、隆興府南昌縣の主簿を拜命した。……任期が満了して肇慶府推官に任命されたが、君はいまや浩然としてもはや仕官の氣もちをなくしていた。……南昌から歸郷すると、住居の南の山を開いて精舍を創建し、「後凋」の意をとって「歲寒」の扁額をかかげ、書籍や食糧を集めて四方の士友をもてなし、老年講切の益をはかった。……晦庵文公朱先生が武夷山下で道を講説されたので、はじめて邪說詭論がのさばらなくなり、後學に師表と仰

ぐところが多かった。眞の學問を知ってから、聖賢のしごとに意欲を燃やす君は、傍郡にわれこそ道を心得たりとするものがあると聞き、でかけて行つて師事したものの、その人の學説は茫洋惘恍として頼むべき何ものもないので、君は千里を遠しとせず文公の門に師事して業を受けた。……僞學の禁が起こり、世の學究は師事した人の名を避けて口にしなかつたが、君はいよいよ熱心に弟子の禮を執り、學問に對する意欲をたぎらせ、少しも怠ることがなかつた。文公が亡くなると、君は晝夜兼行して弔問にかけつけ、三年の心喪に服した。

年十六七時。已厭科擧之習。一意於聖賢爲己之學。……兩預鄉薦不第卽棄去。慶元五年該恩廷對入等。調主隆興府南昌簿。秩滿注肇慶府推官。君於是浩然不復有從官之意矣。……歸自南昌。闢所居之南山。創精舍。取後凋之意。扁曰歲寒。儲書聚糧。以待四方士友。爲暮年講切之益。……晦庵文公朱先生講道於武夷之下。然後邪說詭論無復肆。而後學有所宗師。君自知學以來。既有意於聖賢之事。聞旁郡有以知道自名者。君往從之遊。視其說茫洋惘恍。無所作據。不遠千里。授業於文公之門。……僞學之禁興。一時學者諱名其師。君執禮益勤。厲志益苦。未嘗少懈。文公沒。君星馳而弔。心喪三年。

黃榦が撰する行狀によれば、曾與宗が南昌主簿に就任したのは慶元五年(一一九五)であり、一任期三年をつとめた嘉泰二年(一二二〇)に肇慶府推官を拜命、その就任を拒んでかれは歸郷したという。

ところが先賢傳のほうだと、かれはすでに就任していた肇慶府推官を「僞學の禁」の際にやめている。すなわち、朱熹への師事はそれよりはるかに以前ということになる。みぎの二つの傳記によっても、曾興宗の師事期はあきらかでないし、語類にあっても、かれは葉賀孫(7)・黃義剛(2)・黃卓の所録に登場するのみである。ただ、朱熹の「答楊子直(楊方)」第五書(文集・卷四十五)にいう、

熹の病氣は日ごと惡化しているように思われますのに、どの醫者も回復できると申します。でも藥はいっこうに効きめなく、手の施しようもありません。ただ、安坐拱手して、天命に任せろのみ。曾光祖はここで逐一見ておりましたから、お話できるはずで。當方のこみ入った情況も、いまはくわしくのべている暇はありませんが、それもかれに聞いてくださるがよろしい。

熹病日覺沈重。而醫者咸以爲可治。但服藥殊不見効。亦付之無可奈何。安坐拱手。以聽天命耳。曾光祖在此備見。當能道之也。此間諸況曲折。亦不暇詳布。渠亦可問也。……

みぎの書翰の題下には、つぎの如き雙行注が文集の編纂者によって付されている。

これは庚申(慶元六年、一二〇〇)閏二月二十七日の手紙で、逝去十二日前のものである。

此庚申閏二月二十七日書。去夢奠十二日。

楊方、あざなは子直、汀州長汀縣(福建省)の人。庚寅(乾道六

朱門弟子師事年攷 續

年、一二七〇)の記録者であり、『臨汀志』(永樂大典・卷七八九四)および學案・卷六十九に傳記がみえる。前者にいう、

寧宗の即位後、校書郎に除任されてさらに廬陵郡知事となる。翌年(慶元元年、一一九五)韓侂胄が政權を專斷し、僞學呼ばわりして天下の正士を排斥したり、あるいは忠定公(趙汝愚)の徒黨と見なしたりしたので、ついに辭職し、俸祿の残りをすっかり公用金に寄付して、贛州に退居、門を閉ざして讀書し、仕進のきもちを斷った。

寧宗登極。除校書郎。復守廬陵。明年韓專柄。以僞學排天下正士。或指爲忠定黨。竟罷去。俸餘盡寄公帑。退居章簣。閉門讀書。無復仕進念。

韓侂胄らによる「僞學の禁」がはじまり、趙汝愚・呂祖儉らを流謫處分に付したのは慶元元年(一二九五)四、五月ごろであり、翌二年(一二九六)にかけてかれらの彈壓はいよいよ露骨になる。そのころ楊方が廬陵郡知事に就任していたことは、別項(930)を参照されたい。その年次はわからぬが、楊方は「僞學の禁」の高潮に憤激して廬陵郡知事の職を辭し、贛州に退居した。すなわち、上に引用した楊方あての朱熹の書翰は、曾興宗が朱門を辭してその郷里である贛州寧都縣に歸るときに託せられたものであろう。もしもそれに誤りなければ、曾興宗は朱熹の死の十二日前まで朱門に在ったと考えられる。かれが同席をしめす葉賀孫は、慶元五年(一二九五)の科擧に失敗したあと朱門を訪れ、朱熹の臨終時まで師事しているが、

もうひとりの黄義剛は慶元六年（一一〇〇）のはじめごろに朱門を去っているから、曾興宗のこのときの師事は前年中に始まり、そこで黄卓と同席した。

ちなみに、楊方は語類・卷一九・訓門人に収めるから、編者は朱門の弟子とみなし、また學案の清・王梓材の案語にも、楊楫・楊簡とともに朱門の「三楊」と呼ばれたことが見えるが、學案補遺・卷六十九の清・馮雲濠の案語にもいうとおり、朱熹とは「師友の間」にあつたらしい。かれの所録には朱熹の友人である何鎬（叔京・蔡元定（季通）・林用中（擇之）が登場するのみであり、その内容は先輩學者に對する發言が多きを占めるからである。

つぎに、黄卓が葉賀孫とともに別個に同席する曹叔遠と江疇について考察する。曹叔遠は別章（p. 346）に説くように慶元二年以後の師事が想定されているから、慶元五年（一一九〇）の同席であろう。江疇、あざなは彝叟（語類・卷七十九條および第六十八條による）。學案補遺・卷六十九に収めるが、通稱をあげず、「朱子が詩を授けし弟子」とのみいう。ふたりの記録にのみ登場するから、紹熙四・五年（一一九三・九四）と慶元五年のいずれかの同席であろう。

最後に、のこる梁謙以下の三弟子は、黄卓の所録にしか登場しないから、いずれの年次における同席であるかわからない。

梁謙、あざな・籍貫すべて未詳。學案・同補遺にも收録していない。

鄭天禧、天禧は名諱か通稱か未詳。籍貫も不明。學案・同補遺にも收録していない。單に「鄭」とのみあるのを、筆者ははじめ鄭可學とみたが、のちに鄭天禧をさすことに氣づいた。

周良、あざなは元忠、建昌軍南城縣（江西省）の人。學案・卷七十七によれば、陸象山の門人で後に朱熹に師事したという。嘉定七年（一二二四）の進士。

黄卓の記録には、みぎのほか姓のみであられる弟子（林・黄・劉）があるが、誰をさすかわからない。

## 董 銖（一一五二—一二二四）

あざなは叔重、饒州德興縣（江西省）の人。黄榦に「董縣尉墓誌銘」（黄文肅公文集・卷三十五）があり、それにもとづく略傳が學案・卷六十五にみえる。また、朱熹にかれの父董琦の生涯を語る「迪功郎致仕董公墓誌銘」（文集・卷九十三）がある。董家は德興縣の著姓であり、高祖・曾祖父は官に仕え、父は朱熹の祖母方の親戚である程鼎（復亨・韓溪先生）について春秋を修めたが官途にはつかなかった。その肩書き迪功郎はのちに董銖が縣尉に就いて得たときの位階である。董銖が朱熹に師事したのは、程鼎またはそのむすこで朱熹とも親密な程洵（允夫、一一三五—九六）の紹介によつたのであろう。「語錄姓氏」の注記はかれの記録を「丙辰以後（慶元二年、一一九六）所聞」とするが、入門ははるかに早い古參の弟子である。黄榦

の撰にかかるかれの墓誌にいう、

榦はかつて晦庵先生に師事したときから、いまで四十年になるが、終始いっしょにあり、最も長くつきあい、最も親しかったのは、ほかならぬ叔重である。叔重は學問に身を入れるにつれていよいよ情熱を燃えたたせ、師門に往來すること、おおむね一、二年もせぬうちに一どやって来て、來れば必ず數か月を過して歸った。

榦嘗て游於晦庵先生。今四十年矣。相與始終。周旋最久且厚者。惟叔重爲然。……叔重學益勤。志益苦。往來師門。率不一二歲輒一至。至必越累月而後歸。

黃榦の入門は、別章に説く(p. 261)とく、淳熙三年(一一七六)の春二月である。みぎの墓誌銘の執筆時點は、少なくとも埋葬時、すなわち死歿の翌嘉定八年(一二二五)八月以降である(墓誌にも「先師が歿して十有六年」とある)。みぎの墓誌に「終始いっしょにあり」とあるから、董銖も黃榦と同じところに朱門に登ったと考えられ、どうかすると、記録年の起點「丙辰」は「丙申」の誤りでないかとさえ疑われる。

そこまで遡る資料こそ見あたらないが、少なくとも「語錄姓氏」に注する記録年(一一八九)より以前に、董銖が朱門を訪れていることは確認される。すでに程端蒙の條(p. 267)で引いた朱熹の「答滕德粹(滕璣)」第十二書(文集・卷四十九)がそれである。そこで考察したように、淳熙十六年(一一八九)か翌紹熙元年(一二九〇)いず

れかの冬に、かれは程端蒙とともに、朱熹のもとに數日のあいだ滞在した。程・董のふたりが同門の知友であったことは、つぎにしめす朱熹の「跋程・董二先生學則」(文集・卷八十二)によっても了解される。

番易の程端蒙はその學友董銖とともにこの書(學則)を作り、これによってかれらの郷人の子弟を教えて新しいいぶきを吹きこもうとする。

番易程端蒙。與其友生董銖。共爲此書。將以教其郷人子弟而作新之。

ちなみに、この跋文には淳熙丁未(十四年)十一月甲子のデートが附せられている。

さらに、朱熹の「答程正思(程端蒙)」第十五書(文集・卷五十)にもいう、

ご教示いただいた『孟子』は、先日一二の友人がここまで読んで、その説のあいまいなのを疑いましたたおり、はじめてざっと訂正しましたが、ちようどご教示と一致します。叔重のほうからきつとお報せ申すことでしょう。

所諭孟子。前日因一二朋友看到此。疑其說之不明。方略改定。正與來喻合。叔重必自報去矣。

これは、朱門に在る程端蒙の知友董銖が老師の代りに質問に答える書面を送ったことを指すであろう。

要するに、みぎに挙げた書翰などの類は、すべて董銖がその記録



年の起點より以前、しかも朱熹の知漳州期より以前に朱門に師事していたことを證明する。

ここであれが同席した朱門弟子たちのリストとその相互關係を表示する。

偽孫作節舉至廣賜雉	1175→
去賀明甘潘楊輔林吳	1191→
⑤ 周甘	1192→
⑥ 潘楊	1193→
⑬ 楊	1193→
③ 輔林吳	1193・94
	1194→
	1195→
	?
董 銖	
(致道)	
趙師夏	
④ 吳伯遊	
④ 方毅父	
④ 吳仁父	
② 吳知先	
③ 陶安國	
蕭景昭	
林仲參	
南城熊	

みぎの表によれば、董銖はその記録年の起點・慶元二年（一一九六）より後の年次を記録年とする弟子との同席例がなく、むしろそれ以前を記録年とする弟子とのそれがめだつ。これは、黃榦のことばを裏書きしてその師事がかんり早いことを示す。

記録年の最も早い金去偽との同席例（卷六十・第八十四條）は、あるいは淳熙年間（一一七四—八九）までさかのぼるかもしれないが、記録年がこれに次ぐ李方子とのそれには、潘時舉も加わっているから、あきらかに李方子の第二次師事期——紹熙四・五年（一一九三・

九四）に屬する。また、葉賀孫は記録年の起點より數次にわたって師事している。金去偽との同席例を除き、董銖の同席例は周明作の記録年の起點・紹熙三年（一一九二）以降のものが大半を占めると考えられるが、この年の八月三十日（庚寅）にはかれの父董琦が病死しており（朱熹の墓誌による）、かれがはたして第何次めかの師事をこの年に實現したかには疑念がもたれる。しかし、かれが少なくとも翌四年（一一九三）から五年（一一九四）のはじめに至る間に朱門を訪れたことは、確かである。さきの李方子との同席例はこの兩年次の間に屬し、しかも李方子の師事はこの第二次師事期中の長沙期を最後とするからである。したがって、兩年次に關する記録者たちとの同席例は、このときの師事に屬するものが多いだろう。おそらく、董銖が亡父の墓誌銘を朱熹に依頼したのはそのころであろう。墓誌銘がとどけられたとき、かれは郷里にあらしく、かれは代人を送っていた。朱熹の「答董叔重」第十書（文集・卷五十一）にい

う、  
おたずねにあずかり、かつ長文のお手紙による墓銘依頼の意をうけ、まことに恐縮に堪えません。本年は病氣がちにて目ごろと異なるうえに、新築移轉のごたごたが加わり、特に狀況がおもしろくありません。文章はもとと作る力なく、前後たくさん辭退して來ましたが、叔重にこのように頼まれますと、これだけは辭退するわけに參らず、そこでご使者に留まってもらいました。しかし連日ひまがでさず、しかもこの四、五日は風

邪きみで時おり發熱して、氣分がすぐれませんでした。今日は少し快くなり、やっと大急ぎで草稿を作りあげておとどけできる次第です。……

辱惠問並以長牋喻及墓銘之意。尤以愧仄。今年多病。異於常時。又以築室遷居之擾。殊無好況。文字本不能作。前後所辭甚多。但以叔重如此見屬。獨不可辭。因留來人。累日不得功夫。此三數日又覺傷冷。時作寒熱。意緒尤不佳。今日小定。方能力疾草定奉寄。

ここに言及する「新築移轉」とは、紹熙五年（一一九四）十二月に完成する竹林精舍（滄州精舍）のそれをさすであらう。

董銖がつぎに朱門を訪れたのは、慶元元年（一一九五）以後のことであらう。黄榦が撰したかれの墓誌にいう、

慶元の初め、先生（朱熹）は御進講の席から歸郷されると、毎日學生たちと竹林精舍で學問を論じ、叔重に命じてその事をリードさせられた。學生たちが日々誦習することは、叔重があらかじめかれらと討論をくり返し、それから先生のもとで適確な結論をつけてもらった。

僞學の禁がきびしくなるや、ひごろ師事していながら音信を寄こさぬもの、朱門に學んだことの言及を避けて別人を師呼ばわりするもの、がらりと性行が變り、狂歌痛飲して市井にのさばり墮落するもの、むかし心安くしてもらいながら、推舉されなかったことを恨み、かえって排撃するものがあり、先生から

大いに可愛がられたものまでが、學生たちを朱門から去らせて害から遠ざける工作にけんめいで、學生たちの中には朱門に師事していても、動搖を來たし別の理由をつけてひまを取ろうとするものが出た。叔重は色を正して叱りつけ、道理を説いてきかせ、かくてはじめて學生たちは一齊に落ち着いた。

慶元初。先生歸自講筵。日與諸生論學於竹林精舍。命叔重長其事。諸生日所誦習。叔重先與之反覆辨難。然後即先生而折衷焉。僞學之禁方嚴。有平日從學而不通書者。有諱言其學而更名他師者。有變節改行狂歌痛飲挑達市肆以自汙者。有昔嘗親厚恨不薦己而反擠之者。至其深相愛者。亦勉以散遣生徒爲遠害計。諸生雖從學。亦有爲之搖動欲託辭以告歸者。叔重正色責之。喻以理義。然後諸生翕然以定。

ここには「僞學の禁」のさなかにおける朱門の先輩弟子としての、かれの毅然たる指導ぶりが語られている。黄榦のこの報告は、潘時舉の章（*Ch. 36*）に引用した朱熹の「答潘子善（時舉）」第五書（文集・卷六十）によっても、裏づけられる。そこでは、「僞學の禁」の影響をうけてさびれる朱門の、わずかに残る弟子たちがよき先輩指導者であった董銖をしのぶことが記されている。この書翰の時點は、その章に考證したように、慶元三年（一一九七）の夏四・五月ごろと推定され、そのころかれはすでに朱門を去って歸郷していた。實際にも、前掲表におけるかれの同席者にその年以後の記録年をもつ弟子が見あたらないこと、既述のとおりである。

以上の考察結果をまとめると、確認される董銖の師事期は、紹熙四・五年（一一九三・九四）と慶元元・二年（一一九五・九六）の兩次である。前者はおそくとも朱熹が長沙へ出向する三月末以前であり、後者はおそければ慶元三年（一一九六）のはじめまでであろう。

ところで、前掲表において特に注目される點は、董銖が潘時舉と密接な交渉をもつことである。潘時舉とは同席例が多いだけでなく、三人同席の例にあつても潘時舉の参加するものが大半を占める。潘時舉の師事期はその章に考證したように、三次のいずれの年次においても董銖と同席しうる可能性がある。潘時舉も参加する三人同席の諸例における、もう一人の弟子のうち、吳伯遊・方毅父・吳知先の三人は、學案・同補遺にも收めぬばかりか、董銖・潘時舉の記錄にしか登場しない。ただ、吳仁父（甫）はふたりの記錄のほかに甘節（一一九三）・沈憫（一一九八）・錢木之（一一九七）の所錄に登場するから、あるいは董銖の第二次師事期が錢木之の記錄年（一一九七）まで繼續したことを示すかもしれない。

つぎに吳雉は、記錄年を缺く記錄者であるが、慶元年間（一一九五―一二〇〇）の弟子であり（p. 317）、董銖の兩次の師事期では後者に、また、趙師道は紹熙四・五年（一一九三・九四）の弟子だから（p. 336）、むしろ前者に、それぞれ同席したのであろう。

その他の非記錄者については、資料が乏しいので、同席時點の判定が困難である。たとえば、吳知先・蕭景昭は董銖と潘時舉の所錄にのみ現われ、林仲參・南城熊に至っては、董銖の所錄にのみ現わ

れる。しかも、林仲參が學案補遺・卷六十九に收められるだけで、いずれも名諱・籍貫さえわからない。ただ、陶安國のみは、董銖・潘時舉の所錄のほかに、甘節・廖謙と同席し、また龔蓋卿・黃榦と三人同席の例もあるから、朱熹の長沙期の師事が想定される。おそらく、この弟子も紹熙四・五年（一一九三・九四）にかけて建陽の朱門に師事して、ふたりと同席したのでなからうか。

### 葉賀孫

あざなは味道。學案・卷六十九によれば、あざなのほうがよく通り、後に名を味道、あざなを知道に改めたというが、それは朱熹の死後に屬するだろう。「語錄姓氏」には「括蒼（處州の屬縣、いまの浙江省麗水縣）の人、永嘉（同省）に居む」とあり、『宋史』卷四三八、および學案に收める傳記では、ともに「温州（瑞安府、永嘉縣はその屬縣）の人」との美しい、さらに學案の清・馮雲濠の案語には龍泉縣（處州の屬縣、浙江省）の人とある。「語錄姓氏」の注記に「辛亥以後（紹熙二年、一一九一）所聞」とする有力な記錄者である。その所錄は實に九八〇條におよび、したがって同席弟子もおびただしい數に上る。

この弟子については、すでに前稿において言及するところが多かったが、所錄が豊富で同席弟子も多數に上るため、より詳細な師事情況を知る必要が痛感されていた。このたびかれの所錄の調査をほ

は完了した機会に、あらためてここに一章を設ける。おのずから前稿と重複する部分のあることも免れまいが、あらかじめ諒承を乞うておく。

葉賀孫の記録年の起點、すなわち紹熙二年（一一九二）は入門の年次でもあるが、これを裏づける直接の資料はない。ただ、かれの入門時における朱熹の質問にいう、

あなたはむかし陳君學のところでのようにものを讀んでおられた。

公往前在陳君舉處如何看文字。——語類・卷二四、訓門人・第十九條（葉賀孫錄）

かれの傳記類こそふれていないが、出身地の關係から、かれもかつて永嘉學派の代表學者・陳傅良（君舉・止齋、一一三七—一二〇三）に師事したことをこれは物語っている。さらにつぎの問答をみよう。

（先生が）問われた、「郷里ではどういふふうに學問しておられた。」

賀孫「若いころに親を亡くし、なにかにつけて教えてもらう人がなく、壯年期になってから交渉をもちました師友は、科擧の文章を學習することだけでした。」

問。在郷如何讀書。賀孫云。少失怙恃。凡百失教。既壯。所從師友。不過習爲科擧之文。——語類・卷二四、訓門人・第十五條

これは、かれが朱門に登ったとき、すでに三十歳をかなり超えていたことを示すであろう。

ところで、記録年の起點、紹熙二年（一一九二）が葉賀孫の入門年次だとすれば、われわれはたちまち一つの疑問に逢着する。この年の前三分の一はなお朱熹の知漳州期に屬し、朱熹は四月二十九日に漳州を離れて（前稿頁四七）、五月二十四日に建陽に歸着している（文集・卷二十八「與留丞相（留正）書」）。すなわち、葉賀孫の入門は、はたして漳州・建陽いずれの地において實現したか、という疑問がわくのである。筆者は前稿（頁四七）において、莆田縣令として赴任する廖德明を送り出す朱門に、葉賀孫がいたことを紹介し、あまり慎重な吟味をへぬまま、それをば漳州の朱門と認定した。いま、それに誤りはなかったかという反省に迫られている。この問題を検討するためにも、まずかれが同席した弟子たちのリストとその關係を次ページに表示する。

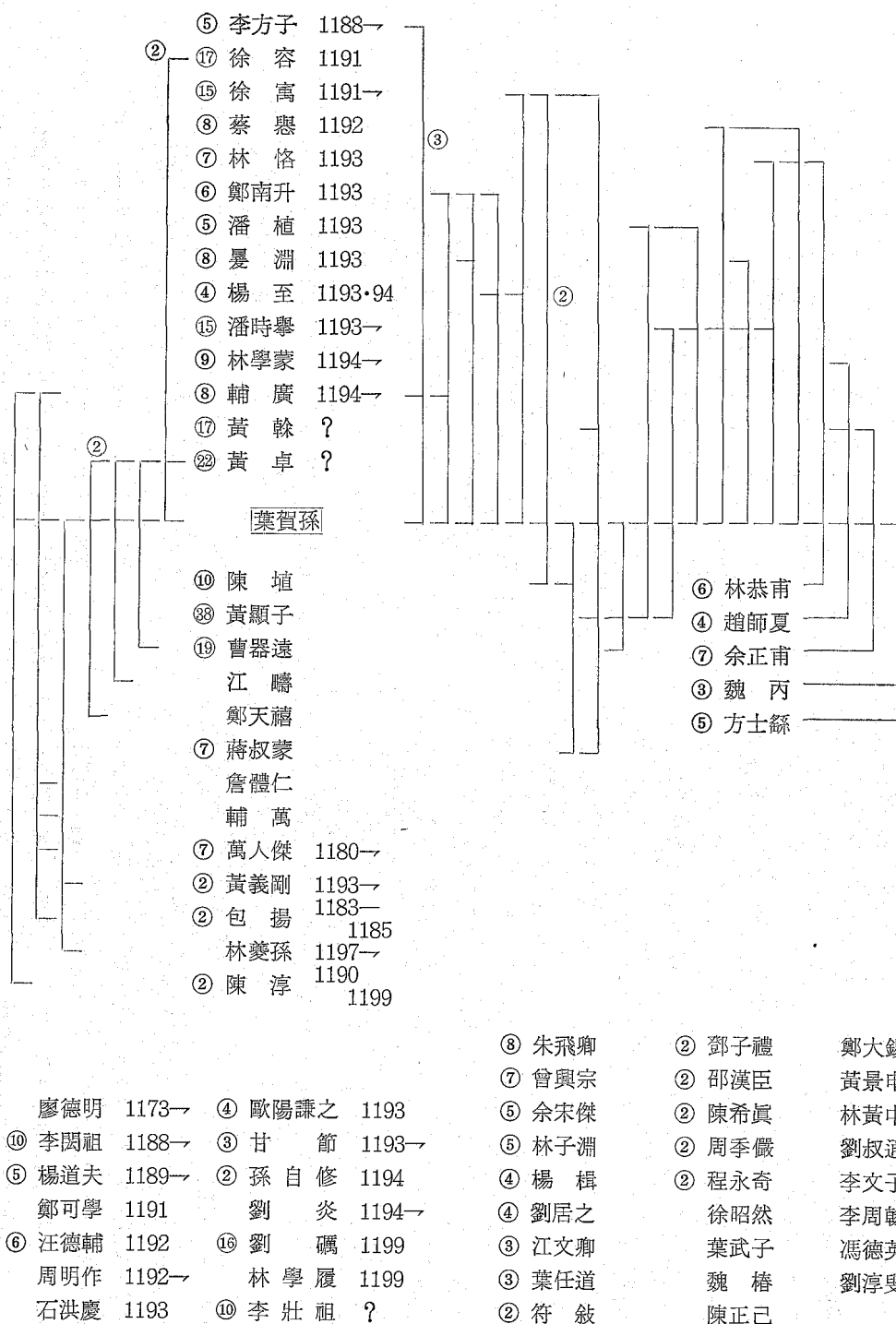
筆者は本表を作成するに際して、葉賀孫との同席例が多く、しかも三人以上の同席ケースが見られる弟子たちに注目して、その點を一目瞭然たらしめるよう特に配慮した。その弟子とはつぎの人びとである。

記録者……徐容（一一九二）・徐寓（一一九一）・潘時舉（一一九

三）・輔廣（一一九四）・黃卓（？）

非記録者……曹叔遠・黃顯子・陳埴

實は、筆者の配慮はあくまで上記の現象に注目したことによるの



だが、いまあらためて一つのことには気づく。すなわち、みぎに掲げる八弟子は、黃卓ただひとり例外として、いずれも葉賀孫の同郷人である。これはおそらく、かれらが相伴って朱門に師事したこと、したがってかれらは講席をも共にし、相互にあい手の質疑とそれに對する朱熹の回答を記録しがちだったからであろう。みぎのうち最も早く師事したのは徐寓であり（紹熙元年、一一九〇年五月、前稿p.112参照）、その影響力の大きかったことも注意されてよからう。

まず、葉賀孫の入門をふくむ第一次師事期について考察する。ここでは當然、かれの入門が漳州・建陽いずれの地において實現したかがまず問われよう。

もはや疑いなく、かれは漳州の朱門において師事していた。ただ一例ではあるが、葉賀孫の所録につきのごとく童伯羽が登場する。

蜚卿（童伯羽）がたずねた、「安卿（陳淳）の質問要目は、孝弟の義を推しすすめて君臣關係のことを説いておりますが、その必要はないとして、よろしいか。」

蜚卿問。安卿問目以孝弟推説君臣等事。不須如此。得否。

——語類・卷十三、第七十五條

童伯羽（一一九〇）は前稿（p.163）で説いたように、その師事は少なくとも前年にさかのぼるはずだが、あきらかに漳州期の朱熹に師事しており、しかも漳州期を最後にその消息を斷つ弟子である。みぎの記録は間接的にはあるが、陳淳との同時をも想定していいの

ではないか。「問目」とは個條書きにした質問書をいい、弟子たちは朱門に親しく師事すると否とにかかわらず、時おりこれを提出し、朱熹は一項ごとに回答を示す。そのサンプルは朱熹の書翰の多くに質問者の「問目」をも添えてみえるし、『朱文公文集・續集』の第九・十卷は劉韜仲と李繼善の「問目」に對する回答を収めている。葉賀孫が漳州の朱門に登ったことには、實は、ほかに無言の證人——非記錄者の朱飛卿がいる。

朱飛卿、名諱は未詳。學案補遺・卷六十九に據れば、漳州の人。

葉賀孫所録（8）の三條に「朱飛卿」と姓を冠してみえるから、單に「飛卿」とのみ稱する他の五條の場合も同一人物をさすはずである。「飛卿」はそのほか楊道夫の所録三條にあらわれるだけで、朱熹に「答朱飛卿」書一通がある（文集・卷五十一）。ところが、語類の編者はこの「飛卿」を童伯羽のあざな「蜚卿」と混同（兩字の發音は同じ）したらしく、語類・卷一一八・訓門人の第八・十四條では童伯羽を扱いながら、あたかもそのまっただ中の葉賀孫所録の第十一條に、姓を冠せぬ「飛卿」が登場する問答を收録している。

念のため申しそえるが、前後の六條（楊道夫らの所録）ではみな「蜚卿」と稱するのに、葉賀孫のこの一條にだけ「飛卿」とある。童伯羽のあざな「蜚卿」は楊道夫（十數條）のほか楊驥・鄭可學・徐寓・黃榦・劉砥および葉賀孫の所録にみえ、もしも飛・蜚兩字が通ずるために同一人視したとしても、楊道夫以外に見いだすことはでき

ない。實は楊道夫も、朱飛卿と童伯羽を明確に區別していたのであり、これはあきらかに語類編者の誤認であつて、さきの「訓門人」部分に葉賀孫の所録を混えたのは、語類編者のミスと斷定される。

かく朱飛卿がもし學案補遺にいうごとく漳州の人であるなら、かれとの同席は、葉賀孫の漳州師事を裏づける有力な證據となりうるだろう。飛卿は葉賀孫・楊道夫の所録以外に現われないからである。

かくて葉賀孫の漳州師事はあきらかになつたから、つぎには漳州期におけるかれの同席弟子を検討する。前掲表によると、かれの記録年の起點・紹熙二年（一一九二）に同席する記録者に鄭可學・徐寓・徐容があり、そのうち徐容を除いたあととふたりと、ほかに陳淳・楊至・楊道夫は、あきらかに漳州の朱門に在つた（前稿參照）。

まず陳淳は、さきに挙げた葉賀孫の所録によつて間接的に同時の師事を知つたが、前掲表にみる陳淳との同席例二條のうち、その一條（卷三・鬼神・第八十條）には、輔廣（一一九四）も參加しているから、これはあきらかに陳淳の第二次師事期（慶元五年末から翌年正月五日に至る）に屬するし（前稿の陳淳の章參照）、他の一條（卷八十九・冠昏喪・第三條）も禮に關する問答であるから、やはり同じ師事期に屬する可能性が多い。朱熹の最晩年には、のちにもたびたびふれるように、禮書の整理改編が關心の中心だつたからである。

つぎに楊至と同席する一條（論語に關する問答）には、鄭南升（一一九三）も參加しているから、紹熙四年（一一九三）のものと認められ

る。他の三條（孟子に關する問答）は討論の對象を異にし、そのうちの一條には徐寓が參加しているから、あるいは漳州期のものであるかもしれない。また、鄭可學との同席例で確認されるものは、鄭可學の所録（卷三十一・第三十四條、論語・雍也篇に關する問答）一條だけである。他はみな「鄭」としてみえ、その一條は黃卓がやはり「鄭」として記録するものと同時の所録であるから、鄭天禧（*Ch. 320*）をさすかもしれない。かりにそれが鄭可學であるとしても、黃卓はその章に説くように、師事年次の把握しづらい記録者のひとりであるし、これだけはいえるだろう——黃卓は南劍州劍浦縣（福建省南平市）の出身であり、朱熹が住む崇安までは一〇〇キロあまり、しかも、河川航路を利用する便もあつたかもしれない。その黃卓が二つのコースのいずれを選んでも、その三倍にも達する迂回路をたどらねばならぬ朱熹の出向先へ赴くことは、まずありえぬようにおもわれる。實際にも、黃卓には漳州期の弟子たちとの交渉がまったく認められないのである。

楊道夫との同席例についても、同様の結論しか導き出せない。すでに前稿（*Ch. 325*）で説いたように、かれは漳州期を含めて紹熙三年（一一九二）まで「數年」問師事したことが確認されており、後述するように紹熙三年には葉賀孫も朱門に師事している。

それでは徐寓・徐容はどうであらうか。

徐寓、あざなは居甫、葉賀孫と同じ永嘉縣の人。この弟子については、すでに前稿で別章を設けて詳説した。「語錄姓氏」の記録年

の起點はさらに一年遡らせるべきで、その第一次師事期は、朱熹の知漳州就任中の紹熙元年（一一九〇）五月から翌二年（一一九一）二月十八日に至る、九か月あまりである。實は、筆者は前稿において、かれが同席する陳埴を紹熙四年（一一九三）の記錄者潘植と誤認する輕率を犯し、この年次をも加えてかれの第二次師事期を紹熙四・五年とした。しかし、徐寓の第二次師事は、資料的には紹熙五年（一一九四）十二月十三日における釋菜時のみが確認されるにすぎない。

筆者の過失はそれだけでなかった。紹熙五年（一一九四）には前後八か月餘に及ぶ朱熹の長沙出向とそれにつく上京があるから、兩年次を連續する師事期とみるには、嚴密な考證が必要である。徐寓・葉賀孫には長沙期の弟子たちとの交渉が認められぬから、かれらはあきらかに長沙へ同行していない。かれらの郷里浙江省永嘉縣から福建省建陽までは直線距離で二五〇キロ、建陽から湖南省長沙まではその倍にあまる五三〇キロもある、という地理的條件を考慮しても、これは容易に首肯される。

徐寓はさらに第三次師事期を、朱熹の逝去時すなわち慶元六年（一二〇〇）三月九日前後に、葉賀孫らとともにした（前稿p. 177）。

そこで、葉賀孫が徐寓と同席するチャンスを考えて、かれがもし紹熙二年（一一九一）二月十八日までに漳州において入門しておれば、確實な後の兩次とあわせて、三たびあったことになる。ただ、前掲表における徐寓をまじえた三人以上の同席例をみる限り、それらはすべて紹熙五年（一一九四）十二月十三日の釋菜時の前後に屬す

るがごとくにみえる。

徐容、あざなは仁甫・仁父、同じく永嘉縣の人。「語錄姓氏」に「辛亥（紹熙二年、一一九一）所聞」と注する記錄者だが、所錄はわずか三條にすぎない。學案補遺・卷六十九にも「朱子が易・詩を授けし弟子」と記すのみである。

實は、朱門にあつて仁甫・仁父をあざなとするものに、吳姓の弟子（名は未詳）もあつて一見まぎらわしいが、徐容は黃卓と葉賀孫の所錄に一例ずつ、姓を冠し「徐仁父」としてみえ、吳姓の弟子のほうは、甘節・潘時舉（ともに一一九三）および董銖（一一九六）・錢木之（一一九七）・沈憫（一一九八）の所錄中に、ただ一例を除きすべて姓を冠してみえるから、ほぼ截然と區別される。

徐容自身の記錄にこそ同門弟子は登場しないが、かれは葉賀孫の所錄（17）のほかに、黃卓・楊道夫のそれに各おの一見され、しかも、黃卓・葉賀孫との三人同席の例も認められる。黃卓と楊道夫には、既述のとおり、徐容の師事が漳州のみとされる確證を求めえない。だが、ここに徐容も參加する葉賀孫所錄の一條がある。

禮樂射御書數のなかでも、數は最も末のことだが、もしもいま經界法を施行する場合、算法だつて大いに役に立つ。

禮樂射御書數。數尤爲最末事。若而今行經界。則算法亦甚有用。——語類・卷十四・第六十二條

これは「仁甫」の質問に對する朱熹の回答の一節である。朱熹は



知漳州期において、經界法という合理的な農地税法の實施に情熱を傾倒し、結局は官僚・地主の強力な妨碍に遭つて挫折する。みぎの問答は、むろん斷定するにはなお躊躇をおぼえるが、經界法の實施如何が討議過程にあつたころのものであるかもしれない。

ところで、われわれは、いま徐容の師事期を考察する場合、かれの同席者ばかりに眼を注いでいてはなるまい。同郷の大先輩である徐寓が、葉賀孫とは少なからぬ同席例（15）を示しながら、徐容とのそれが皆無であるということは、十分注目しに値する。すなわち、徐容は徐寓と完全にすれ違っているのである。徐寓との同席例が多い葉賀孫も、既述のようにもしもそのすべてが紹熙五年（一一九四）ごろのものであるとすれば、徐容と同じ條件をもつ。

將來、みぎの葉賀孫と徐寓との同席例を内容のうえから検討して、みぎの推定が立證されぬかぎり、斷定的なことはいえないが、筆者には、同郷人である葉賀孫と徐容が相伴なつて漳州の朱門に入門し、しかも、その時點は徐寓の離漳（二月十八日）後であつたようにおもわれてならない。さらに想像を逞しうするなら、かれらふたりの師事には、徐寓のアドバイスが大いにあつたこと。

徐容のすれ違いといへば、かれはまた、葉賀孫が多くの同席例をもつ同郷人の潘時舉・陳埴・黃顯子ら（後述のように紹熙四年ごろの師事があきらかである）とも、まったく交渉をもたない。實は、筆者は徐容の師事時點を把握するために、かれが参加する問答を内容から検討する手段も試みた。それらの大半は『論語』學而篇に關するも

のだが、この重要な對象は、朱門に在つてさまざまな時點にくり返し討論され、語類中にはさまざまな弟子の記錄が雜居しており、より精密な検討の必要を想ひ知らされたにすぎない。かくて筆者の試みはみごと失敗に歸したけれど、徐容の討論對象が小範圍にとどまることと、さきの諸弟子とのすれ違いを想ひ合わせ、徐容の師事はあまり長くないただ一次のそれに終つたことを知つた。

なお、語類・卷一一五（訓門人）には、朱熹が徐寓・黃顯子・徐容・包定のことに言及した、葉賀孫所錄の一條がみえる。これは葉賀孫をふくむ五弟子が同時に師事していたことをも想わせるが、いちおうそうでないと判定した。いずれも永嘉出身の弟子たちに對して、一括して行なつた人物評であらうと考える。

徐容のほうはともかく、漳州における入門の確實な葉賀孫の第一次師事は、その下限がいつか。これも難問であるが、いずれにしても、朱熹の漳州離任（四月二十九日）を機に、かれも歸郷するか、それとも老師に隨伴して建陽に行くか、二つのケースしかない。そもそも、徐寓やかれが福建省の南西端に近い朱熹の出向先・漳州に學んだのは、沿海航路の便があつたからではなからうか。そうではなく、陸路を経由するとしても、漳州から朱熹の郷里建陽へは、かれの郷里永嘉へとほとんど等距離にあるから、常識的には徐寓のように歸郷する第一のケースが考えられる。しかし、既述のように、もしかれが徐容とともに師事し、その入門がこの年もかなり進んだ時點であるなら、一、二か月の師事にあき足らず老師の歸郷に同行し

たケースも十分考えうる。というのは、前掲表に見るごとく、かれには翌紹熙三年（一一九二）を記録年ないしその起點とする弟子たちとの同席が認められるからである。すなわち、葉賀孫がかりに漳州からまっ直ぐ歸郷したとしても、かれは翌年すぐ建陽の朱門に登ったのであろう。かれがいずれの道をえらんできたかは、結局わからない。それを解く鍵は、あるいは葉賀孫・徐容のふたりが同席する黃卓が握っているかもしれない。

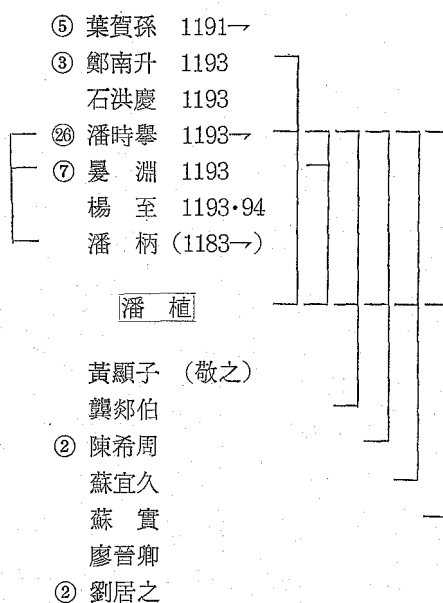
いまは慎重を期して、葉賀孫の漳州師事の下限を見きわめぬまま、かれのその後の師事情況を考察する。既述のように、前掲表によればかれは翌紹熙三年（一一九二）の記録者たちと同席している。實際にもかれは同年十一月・十二月ごろ、あきらかに朱門に在った。

筆者は前稿（p.176）において、紹熙二年（一一九一）正月二十九日（癸酉）婺州（浙江省金華縣）で死去した朱熹の長男塾の、「大祥」の祭り（死後二十五か月め、長子の場合は父母と同様に扱われる）の前後に葉賀孫が師事していることを紹介し、その時點を紹熙四年（一一九三）正月ごろと擬定した。しかし、筆者はうかつにも紹熙三年（一一九二）に閏二月のあることを無視していた。したがって、その時點は前稿における擬定より一か月くりあがり、前年十二月と訂正しなければならない。「大祥の祭り」が實際に行なわれたのはいつか、それは『朱文公家禮』でも調べれば算出するはずだが、いまはその必要がない。さいわい、葉賀孫は「大祥」だけでなく、朱熹の葬儀や禫祭（二十七か月めといわれるが、語類・卷八十九・第六十條によれば、大祥の直後から始まるらしい）などにも居合せた記録を残しててくれる（同卷・第六十六・七十二條）。また、朱塾の埋葬は朱熹の「亡嗣子墳記」（文集・卷九十四）によって、紹熙三年十一月十五日（甲申）とわかる。上記にかれが同年十一月・十二月ごろ朱門に在ったとする所以である。この時の師事は翌年まで繼續する。かれにはまた、紹熙四年（一一九三）を記録年とする多くの弟子たちとの同席がみられるからである。この兩年次の同席者のうち、ここでは蔡愚・潘植・趙師道について補説する。實はこの期の重要な同席者に、既述の同郷人・黃顯子もあるが、かれは次期の同席者でもあり、つごうにより後述にまわす。

蔡愚、あざなは行夫、瑞安府平陽縣（浙江省）の人、やはり葉賀孫と郷里が近い。「語錄姓氏」が「壬子（紹熙三年、一一九二）所錄」と注する記録者である。すでに前稿（p.176）でふれたが、いま補足すれば、葉賀孫のほかに潘時舉（一一九三）の所錄に三見、また林恪（一一九三）の所錄（卷三十七・第十九條）に石洪慶（一一九三）・楊至（一一九三・九四）と登場するから、その師事は翌紹熙四年（一一九三）にもまたがるらしい。

潘植、あざなは立之、福州懷安縣（福建省福州市）の人。「語錄姓氏」に「癸丑（紹熙四年、一一九三）所聞」と注する記録者。黃榦に「處士潘君立之行狀」（黃文肅公文集・卷三十三）があり、學案・卷六

十九にも略傳を收めるが、生卒年次は未詳（享年五十九歳）。學問熱心な父潘滋の命をうけて、弟の潘柄とともに朱門に登ったという。まず、同席弟子との關係を表示する。



みぎの表の記録者についてみると、葉賀孫と弟の潘柄を除き、かれの同席者はすべて紹熙四年（一一九三）を記録年ないしその起點とするから、かれの記録年は誤っていない。

潘柄、あざなは謙之、「語錄姓氏」に「癸卯以後（淳熙十年、一一八三）所聞」と注する記録者。兄と同時に入門したとすれば、この記録年は疑わしい。實際にも、同席者は兄潘植のほか、晏淵・潘時舉・林恪らいずれも紹熙四年（一一九三）ないしそれを起點とする記録者ばかりである。したがって、みぎの癸卯はあきらかに癸丑の

誤りである。學案・卷六十九の略傳にいう、十六歳のとき道學に志し、立之（植）と武夷にでかけて朱子に師事した。

年十六。即有志於道。與立之往事朱子於武夷。

ここにいう數え年「十六歳」がただちに師事した年齢をさすなら、かれの生年は淳熙五年（一一七八）である。

龔鄭伯、名諱・籍貫ともに未詳。卷一二〇・訓門人（第二二條、葉賀孫錄）にもみえる。なお、學案補遺・卷六十九に、「龔鄭あざなは晏伯、寧德の人」を收めるが、はたして同一人物であるかどうか後放を俟つ。

廖晉卿、名諱・籍貫ともに未詳。學案・卷六十九に收めるが、「朱子の門人」とあるのみ。語類・卷一一八・訓門人（第五十四條、訓南升）の双行注にいう、

先生がいう、「潘兄と鄭兄はものを讀まなくちやいかん。あすはまず文振（鄭南升）といっしょに後段から讀んで、それから前のほうを補うんだな、廖兄もここから讀むがいい。……」

先生曰。潘兄・鄭兄要看文字。可明日且同文振從後段看起來。却補前面。廖兄亦可從此看起。……

この双行注には、「潘兄・鄭兄・廖兄」を説明する「潘立之・鄭神童・廖晉卿を謂う」という朱熹の語を添える。「訓門人」條の常としてこの條も記録者の署名を缺く。本來ならば當該の鄭南升の所録とみるべきだが、みぎの付記から察すると、これは別人の同時

記録であり、たぶん葉賀孫の所録であろう。それはともかく、この一條は、潘植・鄭南升・廖晉卿が同時に朱門に在ったことを證する資料である。

陳希周（晞周）、名諱・籍貫ともに未詳。學案・同補遺にも收めていないが、卷一二〇・訓門人（第六十八條、潘時舉錄）に收めて朱門の弟子とする。潘植の所録にのみみえる。

蘇宜久、名諱・籍貫ともに未詳。あるいは蘇實と同一人物か。學案補遺・卷六十九に「蘇宜、朱子が詩を授けし弟子」というが、これは蘇宜久の誤りであろう。潘植・潘時舉の同時記録や葉賀孫の記録にみえるほか、沈憫（一一九八）の記録にも三見、うち一條は陳文蔚（一一八八）とともに登場するし、胡泳（一一九八）所録の一條にもみえる。陳文蔚が慶元四年（一一九八）ごろに第四次師事期をもったことは、前稿で言及した。したがって、蘇宜久の師事期としては、紹熙四年（一一九三）と慶元四年（一一九八）の兩次が考えられる。

蘇實については、潘植の所録に一見するだけで、まったく未詳。劉居之、名諱・籍貫ともに未詳。潘植の所録には單に「居之」としてみえるが、劉姓とわかるのは、朱熹の「答儲行之」第二書（續集・卷上）によってである。その文中にいう、

昨日、劉居之が訪ね、麻沙の状況をくわしく語り、貧民の一部には餓死するものさえ出ているとのこと、聞いて胸が傷みました。今日は文卿（竇從周）がたち寄り、かれも、各地の輸糶

が十分なので、物持ち連は事態がすんだとして、米を持つものももう賣り出さず、とりわけ崇化一郷が心配だといっておりまし、梁文叔（梁瑒）も長平一帯では、民が運び出しているといっております。崇安の早場米は毎日百（石）を下らぬものですから、むこうの土民が途中でさえぎり分取ろうとすれば、やはり騒ぎが持ちあがるのでないかと恐れており、これらのことがすべてたいへん心配です。……

昨日劉居之相訪。具言麻沙事體。云一種貧民。至有餓而死者。聞之惻然。今日文卿相過。亦說諸處輸糶已足。上戸便謂事畢。雖有米者。亦不復糶。最是崇化一鄉可慮。梁文叔亦言。長平一帶小民般運。崇安早穀。日不下百。人或恐彼中土人爭占攔截。亦能生事。此皆可深慮者。……

この書翰は、どうやら建陽付近の飢饉状況を憂慮したものである。麻沙・崇化は宋代以來書籍の版刻地として知られる土地で、いずれも現在の建陽縣の西北にあり、長平は未詳ながら、やはり餘り遠からぬところの小地名であろう。『宋史』（卷六十六）五行志の紹熙四・五年（一一九三・九四）の條を参照すると、この兩年には現在の浙江・湖北・湖南・江西の各省にまたがる大旱ばつが續き、福建省の北部もその圈内に含まれていたであろう。したがって、みぎの書翰の時点は、紹熙四年（一一九三）の「早穀」の收穫時から遠からぬところと推定される。そのころ劉居之はあきらかに朱門を訪れた。

なお、竇從周は前稿（p. 164, p. 184）に言及したが、この時の訪師

は單なる旅行の通りすがりで滞在するに至らなかったのではないか。

梁瑒、あざなは文叔、學案・卷六十九に邵武軍（福建省）の人とある。語類・卷九十四・第三十條に登場するが、その條の記録者名を缺き、師事期についての手がかりはない。

以上、要するに、潘植は紹熙四年（一一九三）のみの師事者と考えるてよい。

趙師道、あざなは致道・至道・志道、台州黃巖縣（浙江省）の人。宋室燕王七世の孫・趙伯淮の四男、長兄の師淵（幾道）、および從兄の師端（知道）・師雍（然道）・師葢（詠道）とともに朱門に學ぶ。『赤城志』卷三十四と學案・卷六十九に略傳を收める。紹熙元年（一一九〇）の進士、大理司直・知南康軍・知撫州・知西外宗正事などを歴任する。朱熹の孫むすめの婿でもある。かれは鄭南升（一一九三・二）・林恪（一一九三）・潘時舉（一一九三）の所録と、董銖（一一九六）の所録にも登場するから、紹熙四年（一一九三）と慶元二年（一一九六）以後の一時期に師事したと考えられる。董銖はその章に説いたように（p. 323）、實際の師事は記録年よりはるかにさかのぼるが、紹熙四年ごろは父の喪中にあり（p. 324）、あるいは郷里に在ったかもしれないから、かれとの同席を鄭南升以下の三弟子と同席した年に屬せしめる可能性は少ない。

いずれの師事期に屬するか不明であるが、朱熹の「答呂子約（呂祖儉）」第三十三書（文集・卷四十八）は、かれと趙師邦（p. 323）の

在門を告げている。

幾道（趙師淵）がとにかく改秩してもらえたことも、ニュースです。その弟がここにおりますが、やはり優秀です。台州からは師邦と申すものがここに來ており、かれも努力することを十分心得て、得がたい男です。

幾道且得改秩。亦是一事。其弟在此亦佳。台州又有一師邦者在此。亦儘知用力。不易得也。

趙師邦は別に説くように、紹熙四・五年（一一九三・九四）ごろの師事者であるから、趙師道の第一次師事期における同門でもある。みぎの書翰には「十一月二十七日」の注記があり、紹熙五年（一一九四）に屬するらしい。

その後の趙師道については、かれも朱熹の禮書編纂に關係し、潘友恭（恭叔）らと組む協力グループの一人であつたらしい。朱熹の「答潘子善」第九書（文集・卷六十）にいう、

「公食禮」は今だに送ってまいりません。すでに恭叔（潘友恭）・致道に通知して、催促してあります。

公食禮。至今未寄來。已報恭叔・致道趣之矣。

この書翰はすぐ下文に、呂祖儉と蔡元定の死を悼むことばがみえるから、慶元四年（一一九八）九月ごろの執筆と推定される。また、朱熹の「答應仁仲（應恕）」第四書（文集・卷五十四）にもいう、

禮書はやつと「聘禮」以前を了り、すでに致道に送って、四明の同志一、二と抄節疏義してつけ加えるようにさせてあります。

おそろく、趙致道の第二次師事に際して、朱熹から協力の依頼があったのだろう。

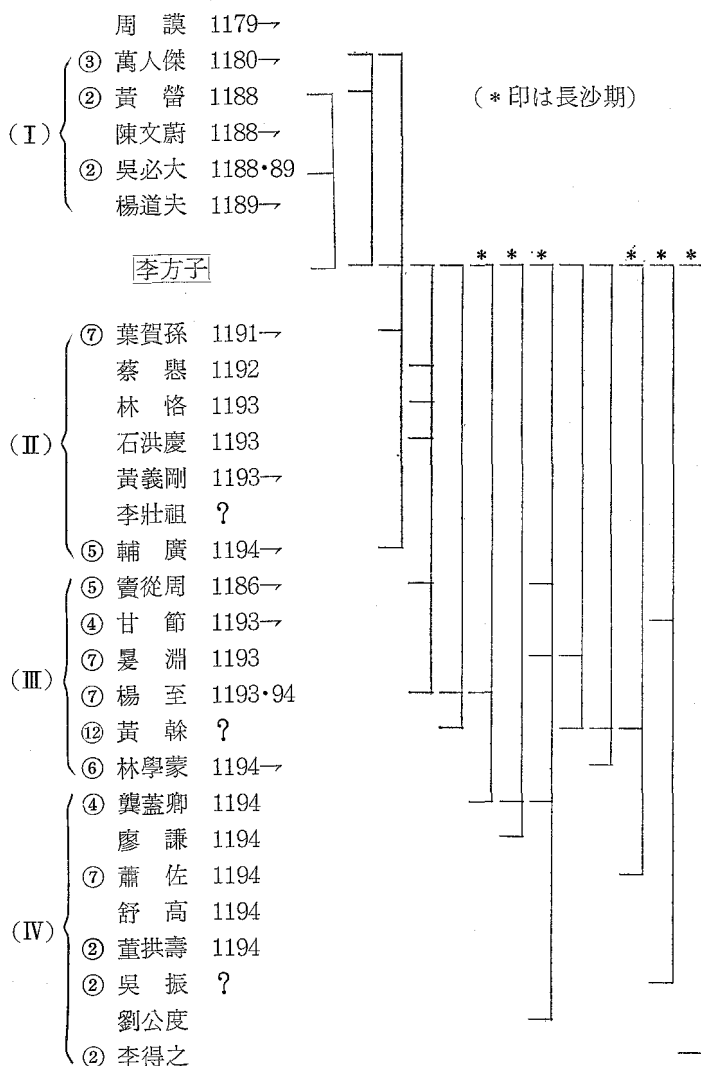
李方子、あざなは公晦、果齋と號する、邵武の人。邵武は軍（州に準ずる）名であり、管下の縣（福建省邵武縣）名でもある。『宋史』卷四三〇および學案・卷六十九に傳記を收めるが、朱門における師事情況に言及していない。かれはなによりも朱熹の年譜の最初の作成者として知られ、また「語錄姓氏」に、戊申以後（淳熙十五年、一一八八）所聞」と注する記録者でもある。その所録には多數の同

者でもある。その所録には多數の同門が登場するとともに、同時記録者も少なくない。特に、三人以上が同席する問答が多く、その師事情況は一見複雑な様相を呈するため、筆者はかつてこの續稿にかれのための一章を設けることを約した。しかし、かれと關連ある弟子の師事情況があまりにさかになるにつれて、實際はさほど複雑でないことがわかったので、ここに付記するにとどめる。

まず、李方子が同席する弟子たちのリストとその關係を上に表示する。

この表に據ると、かれの師事はかなり明確につきの兩次に分かれたる。

第一次……  
淳熙十五・十六年



(二一八八・八九)

第二次……紹熙四・五年(一一九三・九四)

すでに前稿でも指摘したとおり、かれの活躍は特に第二次師事期に顯著であり、しかもそれは朱熹の長沙出向期(紹熙五年五月五日より八月末まで)にも及んでいる。その師事期が明確に兩次に分かれたるだけでなく、かれの場合は三人以上の同席例が多いことも幸いして、ほとんどすべての同席者との同席年次ないし期間を知ることができる。いまそれを四類に分ち、表中の各同席者に該當の記號を付して示す。

(I) 第一次師事期における同席者。ただし、吳必大は紹熙四年(一一九三)に、黃魯は同五年(一一九四)に、陳文蔚はその兩年ともに同席する可能性をもつ。

(II) 第二次師事期の長沙出向以前(紹熙四年より同五年三月末まで)における同席者。

(III) 第二次師事期の兩年次における同席者(すなわち建陽より長沙に同行して師事するもの)。

(IV) 第二次師事期の長沙(紹熙五年五月五日より八月末まで)における同席者

ただし、前掲表のうち、周諫・包詳道のみは同席年次を把握しがたい。周諫については前稿で詳説した(p. 156)。筆者はそのおり、かれの同時記録者に林學蒙(一一九四)があるので、紹熙五年ごろ朱門を訪れたらしいと述べたが、それがいずれの地であるかを考え

なかった。林學蒙は別に考證したように、あきらかに紹熙五年に師事しており、しかも長沙へ同行している。包詳道は名が約、包揚の兄であり、學案・卷七十七に收める。語類では李方子の所録に一見する。包揚の入門が紹熙四年以後である(p. 310)から、かれもあるいは、弟と同時に師事したかもしれない。

李方子のその後における消息はわからない。少なくとも、朱熹の存命中に朱門を訪れた形跡はない。なお、かれの弟李文子も朱門の弟子である。

李文子、あざなは公謹、方子の弟。學案・卷六十九に兄との合傳を收める。紹熙年間(一一九〇—九四)の進士、緜州・閬州・潼州の知事を歴任する。記録者であるが、「語錄姓氏」にも記録年を缺き、その所録はわずか六條にすぎず、同門も登場しない。かれは葉賀孫の所録に一見するだけだから、師事年次の判定はほとんど不可能である。

さて葉賀孫の第一次師事——もしもかれが漳州からまっすぐ歸郷していたなら、第二次師事にあたるが、それはおそらく紹熙五年(一一九四)三月末ごろの朱熹の長沙出向までに終っていたであろう。既述のように、かれには長沙期の弟子たちとの交渉がまったく認められぬからである。ちなみにいえば、語類・卷七十三(易)の葉賀孫が記録した第五十八條の末尾に、これも前條と同時の所聞である

——亦與上條同聞」と注するのは、誤りである。その前條すなわち第五十七條は竇從周の所録で、李方子・晏淵・龔蓋卿の同時記録をもつ。かれら四弟子はあきらかに長沙期の師事が確認される弟子だからである。

葉賀孫が長沙期に師事していないという、この明白な一事がなければ、かれの第一次（または第二次）師事はなお一兩年繼續したものと、把握せねばならなかつたろう。すでに前稿（p.174）で紹介したように、竹林精舍（澶州精舍）の竣功を記念して行なわれた紹熙五年（一一九四）十二月十三日の釋菜に、かれは徐禹・黃榦・黃顯子・蔣叔蒙らとともに司祭の一役をになっている。しかも、これにさきだつ時點におけるかれの師事も、かれ自身の記録によってわかるのである。

先生は黃文叔（黃裳）の死を聞いてかなり歎かれた、「その文章や議論を見ると、率直で痛快な人物だ。惱みの果てに亡くなったのだろう。意見は實現されぬわ、勸告はきかれぬ、去りたくても去るわけにゆかぬというのは、やはりくさるよ。」

そこでいわれた、「蜀中では今年、有名人がずいぶん亡くなった。胡子遠（胡晉臣）や吳挺はみな氣骨のある人で、吳氏はたのもしい邊將だった。」

先生聞黃文叔之死。頗傷之云。觀其文字議論。是一箇白直響快底人。想是懊悶死了。言不行。諫不聽。要去又去不得。也是悶人。因言蜀中今年煞死了係名色人。如胡子遠・吳挺都是氣骨

底人。吳是得力邊將。——語類・卷一三一・本朝、第八十條

實は、この文章には矛盾がある。禮部尙書の黃裳（一一四六—一九四）が四十九歳で死去したのは、紹熙五年九月二十四日である（宋・樓鑰『玫瑰集』卷九十九「黃公墓誌銘」および『宋史全文續資治通鑑』卷二十八）が、他のふたりの死はいずれもその前年に屬する。すなわち、知樞密院事の胡晉臣は紹熙四年（一一九三）六月十三日に、太尉・利州安撫使の吳挺（一一三八—）は同年五月二十七日に亡くなっている（宋史・卷三十六、光宗紀）。これはあきらかに、朱熹の記憶ちがいであるが、ふたりの死を昨日のごとく感じていた日常感覺のあいまいさにもとづく。

ここでの問題は、朱熹が黃裳の訃報を聞いた時點と場所である。

紹熙五年八月末ごろ新帝に召された朱熹は、湖南省長沙を出發して九月三十日に首都の郊外に到着し、十月二日に入京している。九月二十四日に首都で亡くなった黃裳の死が、みぎのいずれかの時點で朱熹の耳に達せぬはずはない。そうだとすると、葉賀孫によるこの記録は、すでに歸郷していたかれが老師の中央入りを知って馳せつけた、首都ないしその付近における師事時の所録であると考えられる。そしてかれは、ほぼ五十日のあいだ首都に滞在する朱熹に侍し、閏十月二十一日、歸郷する老師について建陽に行ったのであろう。それがただちに、既述の釋菜時に接續する、と筆者は考える。この第二次または第三次師事期における同席者で、重要なものに陳埴・余正父・黃顯子・曹叔遠らがある。



陳埴、あざなは器之、やはり永嘉縣の人。この弟子については前稿(p.176)でふれたが、既述のように、筆者はかれを記録者の潘植と混同して、紹熙四年(一一九三)をその第二次師事期と誤認した(p.173 徐寓の表においても)。かれもたしかに第二次師事期をもったが、それは翌五年(一一九四)末のころと推定される。なぜなら、かれは前掲表(p.328)で見るごとく、葉賀孫の所録三條において、それぞれ別個にはあるが、徐寓・黃顯子・蔣叔蒙と同席しており、この五弟子こそ、かの釋榮の儀における司祭のメンバーだからである。なお、かれには錢木之(一一九七)とも同席する記録(12)があるから、かれは慶元三年に第三次師事期をもったらしい。

余正父(甫)、名諱・籍貫ともに未詳、學案・同補遺にも收めていない。葉賀孫(8)の所録にみえるほか、王過(一一九四・2)のそれにみえる「正父」もかれをさすらしい。實は、「正父(甫)」をあらざとする朱門弟子に、建德府遂安縣(浙江省)出身の任忠厚があり、遊倪(一一九三)の所録(語類・卷二〇、訓門人・第六十九條)のほか林恪(一一九三)のそれにみえる「正甫」も、この任忠厚をさすらしい。したがって、王過の所録にみえる「正父」がかならず余姓の弟子であると斷言することもできない。しばらく疑いをとどめておく。ただ、余正父(甫)のほうは禮學に通じ、朱熹の「答吳伯豐」第十三書や「答黃子耕」第十書でみるように(p.293)、禮書の再編を企圖する晩年の朱熹が、長沙赴任を機に呼集しようとした弟子の

ひとりである。そのことは、余正父の入門師事が紹熙五年(一一九四)にさきだつことをも物語るが、その時點はまったく捉めない。かれは長沙にこそ呼ばれなかったが、上京した朱熹のもとに招かれた(p.286)のは、かれの籍貫がいまの浙江省に在ったからであるかもしれない。王過(一一九四)の所録に現われる「正父」が、もしこの余姓の弟子をさすなら、かれもこの機會に首都臨安から歸郷する朱熹に隨行して、翌慶元元年(一一九五)に王過と同席したことが考えられる。王過はこの年確かに朱門に師事している(語類・卷九〇・第一四五條および卷一〇九・第二十三條)から。

その後における余正父の消息は、朱熹の書翰の幾通かが告げられる。いずれも朱熹の最晩年の執筆にかかる。

……余正父も博學で意欲旺盛な、得がたい男です。禮書は、中ごろ話しあって意見のくい違ふ個處が多かったのですが、ちかごろやうとかれのし上げたものを見ましたところ、むかしに比べてさほど改める點がありません。……商伯(黃灝)からはしょっちゅう便りをもらいます。議論は精密でまことに立派なものです。李敬子(李燿)は努力家で根性がしっかりして、特に易がたい男ですが、ちかごろ連中とともに引揚げてしましました。建昌の二呂(呂熹・呂煥兄弟)がここにおり、日夜學問を論じ、いちおう筋が通った議論をやり、けっこうさみしさを慰めてくれます。

……余正父博學強志。亦不易得。禮書中間商量多未合處。近

方見其成編。比舊無甚改易。……商伯時時得書。講論精密。誠可嘉尚。李敬子堅苦有志。尤不易得。近與諸人皆已歸。只有建昌二呂在此。早晚講論。粗有條理。足慰岑寂也。——別集・卷六「馮儀之」書（續集・卷八に、ほとんど同文のものを、「答馬奇之」稿としてみえる）

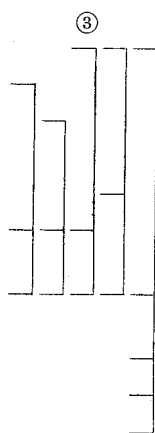
老拙は衰病日ましに以前よりひどく、目下ほかの事はすべて放擲しています。このしごと（禮書の編纂）の完成せぬことだけが氣がかりです。もし余正父のやるとおりにまかせておいたなら、とうのむかしに筆を擱くことになっていたのですが。今後はたして約束どおりやってくれますやら、わたくしは日ごと待ちのぞんでおります。

老拙衰病日甚於前。目前外事悉已棄置。只此事未了爲念。向使只如余正父所爲。則已絕筆久矣。不知至後果便能踐言否。予日望之也。——「答黃直卿」第七十二書（續集・卷一）

老いさき短く病苦に悩む今、この一件の始末がつかずじまいになりそうな氣がして、夢寐の間もやすまりません。ちかごろ、正父の便りをもらいました。目（綱目大綱に對する細目）もいところがあります。その長所はことばが簡明で古えぶりに近いこと、短所はあらうばくて精密を缺き、見識がないことです。覺得歲月晚。病痛深。恐不了此一事。夢寐爲之不寧也。近又得正父書。目亦有好處。其長處是詞語嚴簡近古。其短處是粗率不精緻。無分別也。——又 第八十七書

これらの書翰三通は、内容からみてほぼ同じところに執筆されたものと考えられる。その時點は二呂すなわち呂熹・呂煥兄弟（ともに一一九九）の師事期、慶元五年（あるいは翌年にまたがるか）であろう。結局、余正父の師事は、紹熙五年（一一九四）十月から翌慶元元年（一二九五）にかけて、臨安と建陽において實現したと推定される。

黃顯子、あざなは敬之。これは語類・卷一二〇（訓門人）第二十三條による。學案補遺・卷六十九に「王顯子、あざなは敬之、永嘉の人」とあるのは同一人物をさすだろう。王・黃二姓は南方で發音を同じくするため、しばしば混同される。學案補遺が永嘉の人とするのは、かつて葉賀孫が本籍地における解試（地方試）に應ずるためにかれとともに朱門を辭した事實（前稿215）を裏づける。ただ、その師事情況は一切わからぬから、同席弟子とその關係を表示する。



- ③ 葉賀孫 1191→
- ⑥ 游 倪 1193
- ② 鄭南升 1193
- ④ 林 恪 1193
- ⑨ 潘 植 1193
- ⑨ 潘時舉 1193→

黃顯子

- ⑤ 徐 寓 1190→
- ⑤ 黃 榦 ?
- ⑤ 蔣叔蒙

上掲の表にみえる徐寓はか三弟子との同席例は、かの釋榮時のそれであるから、記錄年の起點が早い徐寓・葉賀孫らと同席する他の條も、既述のように上記の時點の前後に屬する可能性がある。もし

そうであれば、黃顯子が朱門に在った年次は、紹熙四・五年（一一九三・九四）に限定される。しかし、かれもまた葉賀孫と同じく朱熹の長沙出向に同行していないから、みぎの兩年次における師事は分断されるはずである。おそらくかれも葉賀孫とともに、首都から引き揚げる朱熹に随伴して建陽に行ったのでなからうか。

ところで、かれとの關係における葉賀孫の最も大きい問題は、本籍地における解試を受けるために歸郷したふたりの離門時點である。筆者は前稿において、それを慶元四年（一一九八）五・六月の間と推定した。しかし、既述のようにかれの師事期が紹熙四・五年に限定されるなら、筆者はその時點をさらに三年さかのぼらせて、慶元元年（一一九五）五・六月の間と改めねばならない。そうあれば、釋榮時に確認されるふたりの師事が、翌年まで続いたことになり、われわれにとつてもいっそうなっとくし易い。だが、ここに曹叔遠とからんでもう一つの問題が立ちふさがる。

曹叔遠、あざなは器遠、諡號は文肅、瑞安府（管下に同名の縣がある。浙江省）の人。『宋史』卷四一六および學案・卷五十三に傳記を収める。やはり陳傳良（君舉・止齋、一一三七—一二〇三）の門人であることにのみ言及する。しかし、語類では、卷二二〇（訓門人）にかれに關する五條を収めるから、語類の編者は朱門の弟子とも見なす。紹熙元年（一一九〇）の進士、李壁（李熹の長男、季章、一一五九—一二二二）の推舉をうけて國子學錄となるが、韓侂胄にさからって罷免

される。のちに涪州通判・守遂寧・知袁州などをへて禮部侍郎となり、徽猷閣待制に終る。朱門における同席弟子との關係は、葉賀孫の所錄（19）にみえるほか、李閔祖の所錄（卷二三四・歷代一・第五條）に一見する。前掲葉賀孫の表にみるように、かれは黃卓および黃顯子とそれぞれ別個に同席している。

ところで、陳君舉の門人であるかれが朱門を訪れたのはいつであらうか。朱熹の「答黃直卿（黃幹）」第十九書（續集・卷二）にいう、陳君舉の門人曹器遠がここへ來ました。しぜんその學問があまりさらに一秦を生んでいることを、けんめいにのべてやることになりました。

陳君舉門人曹器遠來此。不免極力爲言其學之非。又生一秦矣。朱熹が黃幹にあてた書翰は、その晩十年間にあつては、黃幹が母の死で歸郷した慶元二年（一一九六）以後のものが大半を占め、それ以外では、紹熙五年（一一九四）十月の上京時が考えられる。

もしも、この書翰が慶元二年（一一九六）以後のものであるなら、そこにみえる曹叔遠の師事は、かれが韓侂胄に罷免された後であつたらう。かりにその時點を慶元三・四年（一一九七・九八）ごろとみるなら、かれが同席する葉賀孫・黃顯子もやはりそのころ朱門に在ったことになり、したがって、受験のためのふたりの歸郷時點も前稿の擬定が正しいことになる。ところがこの場合、既述のごとく少なくとも黃顯子はその年次に朱門に在った形跡がない。

つぎに、朱熹の書翰の時點を紹熙五年（一一九四）十月の上京時と

しよう。郷里の近い曹叔遠が、葉賀孫や黃顯子らと首都臨安で師事したことは十分考えられる。だが、この場合における支障は、かれが黃卓や李閔祖とも同席していることである。黃卓は別章に説くごとく現在の福建省南平市の人であり、李閔祖は同省光澤縣の人である。いずれも建陽に近い地點に住むふたりが、わざわざ朱熹の外出先へ出かけることはまず考えにくい。曹叔遠の師事はやはり建陽において、しかも慶元二年（一一九六）以後に實現したと考えなければなるまい。

さて、葉賀孫が受験のために黃顯子と歸郷したのが慶元元年（一一九五）五、六月の間でなかったとしても、かれの第二次または第三次師事は、まもなく終りを告げたであろう。前掲表にあきらかなように、湯泳・李季札（ともに一一九五）・林賜（一一九五）および有力な記録者董銖（一一九六）との同席例がまったく認められぬからである。それに、この兩年は韓侂胄らによる「偽學の禁」の彈壓が激化して、別章にものべるように（p. 309）、朱門は一時文字どおり空堂と化していたからである。

しかしながら、釋菜時からちょうど二年をへた、かの道州編管の處罰を受けた蔡元定を見送る日の朱門に、われわれは三たびかれを見いだす（前稿 p. 211）。筆者はかつてその時點を慶元三年（一一九七）一月ごろに擬したが、蔡元定は建陽附近で逮捕されて直ちに配所へ護送されたのだから、年譜どおり前年の十二月に屬せしめるべきで

あろう。この日の朱門には、葉賀孫のほか萬人傑・詹體仁（あざなは元善、前稿では詹儀之と誤認した）・包揚および輔廣・輔萬の兄弟がいた。

詹體仁（一一四三—一二〇六）、あざなは元善、建寧府浦城縣（福建省）の人。その傳記につき五種がある。

葉適「司農卿湖廣總領詹君墓誌銘」（水心先生文集・卷十五）

魏了翁「司農卿湖廣總領詹公行狀」（西山先生真文忠公文集・卷

四十七）

杜範「詹體仁傳」（杜清獻公集・卷十九）

『宋史』卷三九三「詹體仁傳」

『宋元學案』卷六十九「龍圖詹元善先生體仁」

隆興元年（一一六三）の進士、晉江縣丞・太常博士・湖廣總領・司農少卿・太常少卿、さらに福州・靜江府・鄂州などの知事をへてふたたび湖廣總領に就任する。行狀によれば、朱熹への師事は科擧合格の直後であるから、非常に早い。その後官途をひたすら歩むかれがなぜこのころ朱門に在ったかは、よくわからない。蔡元定見送り前後の朱門を語る葉賀孫の所錄（前稿 p. 210）に、「蔡どののは町（建陽）にとどまって、詹元善がめんどろをみているそうだ——聞蔡留邑中。皆詹元善調護之」とあるのは、あるいは當時湖廣總領に在任中のかれが、現職の地位を利用して蔡元定を庇護したのでないか。かれが當時たしかに朱門に在ったことは、萬人傑の章（p. 301）を

も参照されたい。

また、同じ日に葉賀孫と同席する輔廣については、前稿(p. 209)に別章を設けて説いた。かれの記録年の起點は紹熙五年(一一九四)であり、筆者はかれの「八十五日」に及ぶ第一次師事が、朱熹の長沙出向まえの三か月間に實現したことを想定した。それに誤りなければ、かれと葉賀孫の同席例にはその期間に屬するものもふくむだろうし、さらに臆測を逞しうすれば、輔廣は朱熹の滯京中にもあきらかに李杞とともに侍しているから(p. 279)、その前後における同席例も混っているかもしれない。

蔡元定見送りの日に確認された葉賀孫の第三次または第四次師事は、前掲表に據れば翌慶元三年(一一九七)まで繼續したようにみえる。錢木之(一一九七)や林夔孫(一一九七)と同席するからである。

錢木之、あざなは子山、晉陵(常州の屬縣、いまの江蘇省武進縣)の人、永嘉縣に寓<sup>す</sup>。みぎは「語錄姓氏」の注記によるが、學案補遺・卷六十九にはあざなを「子升」とする。慶元三年(一一九七)の記録者である。

學案補遺がかれのあざなを「子升」とすることには問題がある。語類の「訓門人」部分をひもとくと、卷一一六に「訓木之」と注す

る一條(第三十三條)を收めながら、さらに卷一二〇にいずれも「子升問う」ではじまる錢木之、所錄の三條(第十九―第二十一條)を收めている。すなわち、語類の編者はあきらかに「子升」をあざなとする弟子と錢木之とを別人と見なしている。錢木之の所錄には「子升」が二十五見されるが、記録者がみずからの質問を記す場合にあざなを用いることは、體例からいってほとんどありえぬから、學案補遺が「子升」を錢木之のあざなとしたのは誤認であろう。しかしながら、「語錄姓氏」の「子山」も語類や書翰類にまったく現れない。つぎに、錢木之の所錄に現われる同門弟子を列擧する。このほかに既述の子升の二十五例と葉賀孫の同時記録一條がある。

李閔祖(守約、一一八八―2) 陳埴(器之、12)

林賜(聞一、一一九五―2) 吳仁甫(2)

林夔孫(子武、一一九七―2) 鄭思孟(齊卿、1)

みぎのうち、林夔孫との同席例のみがかれの記録年における在門を證し、他はむしろかれとの同席例をもつことによって、その人たちもその年次に在門したことを知る。林夔孫の師事がその記録年の起點に始まることは、前稿(p. 209)において考證した。ただ、この唯一の證人である林夔孫の師事は、その後も長く繼續して、朱熹の逝去時に至っている(前稿p. 100)から、錢木之の師事が慶元三年(一一九七)のみに終ったかどうか疑問である。したがって、葉賀孫の第三次、または第四次師事期の下限も霧に包まれている。かれが受験のために黃顯子とともに歸郷したのが慶元四年(一一九八)五、六月の間

であるなら、このたびの師事はさらに一年延長されたわけである。たとえそうでなくても、前稿に紹介したように、かれは慶元五年（一一九九）胡紘が委員長をつとめる省試（中央試）を受け、偽學の徒として黜けられているのだから、その前年の解試に應じて合格しているはずで、少なくとも慶元四年（一一九八）五、六月の間から一年あまり朱門にいなかったことは、確實である。

慶元五年の科擧に失敗した葉賀孫が、朱熹の勸め（前稿p.216）にこたえて第四次または第五次師事を實現したことは、『宋史』の本傳が傳えるとおりである（前稿p.116）。前掲表における陳淳・劉礪・李儒用・林學履らとの同席例は、すべてこの期に屬する。同じ科擧に應じた輔廣（前稿p.213）も、かれと陳淳との同席に加わっているから、やはり同じころ朱門を訪れていたに相違ない。さらに、葉賀孫の黃義剛（一一九三）・林夔孫（一一九七）との同席例にも、これらの記録年の起點におけるものと、葉賀孫のこの第四次または第五次師事期のものが混在するかもしれない。黃義剛は、陳淳の第二次師事期にあきらかに朱門に在り、年があけて間もなく去って行ったらしい。

葉賀孫の第四次あるいは第五次師事は、朱熹の逝去時まで繼續したのである。朱熹の死の前日の情況をのべる蔡沈の『夢奠記』には、老師の枕邊に侍するものの名を記している、

林子武夔孫・陳器之埴・葉味道賀孫・徐居甫寓・方伯起・劉

朱門弟子師事年攷 續

擇之成道・趙惟夫・范益之元祐および沈。

以上、葉賀孫の師事年次についてあらためて考察を試みたが、遺憾ながら二、三の重要な問題を解決しえないまま、この論考を終えねばならなかった。ここに不如意ながらも、かれのおよその師事年次を、想像しうる可能性をも付記して提供しておく。

第一次……紹熙二年（一一九二）から同四年（一一九三）まで、おそくとも紹熙五年（一一九四）三月末まで、漳州および建陽にて。

ただし、紹熙二年四月二十九日までの漳州における師事と、紹熙三・四年（おそくとも同五年三月まで）の建陽における師事の兩次に分かれる可能性がある。

第二次（または第三次）……紹熙五年（一一九四）十月から閏十月二十一日まで臨安にて、續いて十一・十二月ごろ建陽にて。翌慶元元年（一一九五）五、六月ごろ歸郷した可能性がある。

第三次（または第四次）……慶元二年（一一九六）十二月ごろ。このときの師事の下限は、おそくとも同四年（一一九八）五、六月の間である。

第四次（または第五次）……慶元五年（一一九九）後半から翌六年三月九日の朱熹の逝去時まで。

最後に、葉賀孫が同席したその他の弟子について附説しておく。陳剛、あざなは正己、學案・卷七十七によれば盱江の人。清・馮

雲濠の案語には、「一に建昌の歐江の人に作る」とある。盱江という地名は未詳、建昌はいまの江西省南城縣を治とする軍。朱熹の「答黃直卿」第三十三書（續集・卷一）にもいう、

陳正己が建昌から來ました。かれも實にあたまの切れる人間です。

陳正己來自建昌。實亦明爽。

學案の略傳や全祖望の案語に據ると、はじめ劉堯夫（淳熙）とともに陸象山に師事して認められ、ついで浙中に遊學して陳亮（同甫・龍川、一一四三—一九四）・呂祖謙（伯恭・東萊、一一三七—八二）にも師事した。進士の資格で教授の職についたという。ただ、朱熹はその學問が氣にいらなかったようである。前掲の書翰の下文にすぐつけていう、

ただ、まるで話の次元が違う。いわゆる伯恭（呂東萊、祖謙）の學がここまで傳えられてるとは、さても恐ろしいことだ。

但全別是一般説話。所謂伯恭之學。一傳到此。甚可懼耳。

この書翰の上文にはまた次のごとくいう、

轉居でござたしておる中でも、一りふたり學生がここにいます。つっこんだ討論がやれたわけではありませんが、大體、學者として立ってゆけそうなのはいません。これは大いに心配です。

遷居擾擾中。亦有一二學者在此。雖不得子細討論。然大抵未有擔荷得者。此甚可慮。

ここにみえる「轉居」がいつのそれをさすか不明だが、陳剛の來訪は、黃榦が慶元二年（一一九六）に歸郷した後であろうから、葉賀孫との同席はその第三次または第四次師事期に屬するだろう。

程永奇、あざなは次卿、徽州休寧縣（安徽省）の人（學案・卷六十九）。かれが登場する語類・卷一二〇（訓問人）の二條はともに葉賀孫の所録にかかる。その一條には蔡元定（季通）も同席するから、慶元二年（一一九六）十二月以前の師事とわかる。

葉武子、あざなは誠之・成之、邵武軍（福建省）の人。學案・卷六十九に略傳を收める。嘉定七年（一二二四）の進士、郴州教授・國子正・知處州・直寶謨閣をへて、淳祐初年（一二四二）に恬退し、挂冠日久しく直龍圖閣・祕閣修撰を加えられて卒かるといふから、朱熹に師事したときはまだ青年期であつたらう。葉賀孫との同席年次はわからない。

李周翰、名諱は未詳。張栻の「答朱元晦」第四十四書（南軒先生文集・卷二十三）に「ちかごろ季克が送って來ました蘄州の士人李周翰の一文を見ますと、まるで統一を缺いています——近見季克寄得蘄州李士人周翰一文來。殊無統紀」とあるから、蘄州（湖北省蘄春縣）の人とわかる。學案・卷六十に收めて、「朱子の門人」といふ。葉賀孫の所録一條にのみみえる。その一條にいう、

李周翰が教えを請い、年を老っていますとどうも時文（科學用の文章）がめんどうだとよくこぼした。

李周翰請教。屢歎年歲之高。未免時文之累。——語類・卷二二

○(訓門人)第五十六條

これによって、かれが朱門を訪れたときはすでに老年であったことがわかる。朱熹にはかれにあたえた書翰が二通あり(文集・卷五十六)、その一通は文中に「今年はちやうど六十歳で、衰病の身はがたがた、もはや四方の志がありません——今歳適満六十。衰病支離。無復四方之志」とあるから、淳熙十六年(一一八九)のものとかかる。葉賀孫との同席はかなり早いのではなからうか。

江文卿、名諱は未詳、朱熹と同郷の建陽の人。學案補遺・卷六十に収める。朱熹の友人李從禮(名諱は未詳、勉仲の一字もある)の女婿である。朱熹の「跋李勉仲詩卷」(文集・卷八十三)にいう、

(わたくしは)晩年に考亭に移り住み、茶坂にでかけたとき、

江文卿と知り合って交友した。

晩歲來居考亭。往茶坂。得江文卿而與之遊。

この文章は慶元元年(一一九五)三月晦日のデイトをもつ。考亭の竣工は紹熙三年(一一九三)六月であるから、江文卿はそれ以後に師事したのであるが、同郷人だから一定の師事期を限ることはむづかしい。葉賀孫の所録にのみ登場する。別に陳文蔚の記録にも、つぎの劉淮とともに詩を能くすることに言及されているが、これは同席ケースではあるまい。

劉淮、あざなは叔通、同じく建陽の人。學案補遺・卷六十九に収める。葉賀孫のほか沈僩の所録にも一見するから、慶元四・五年(一一九八・九九)における師事者であらう。

林恭甫(父)、名諱・籍貫ともに未詳。黃義剛の所録(7)にみえ、うち一條に林恪・葉賀孫と同席するから、紹熙四年(一一九三)の師事者とわかる。學案・同補遺には未收だが、卷一二〇・訓門人に収めている。

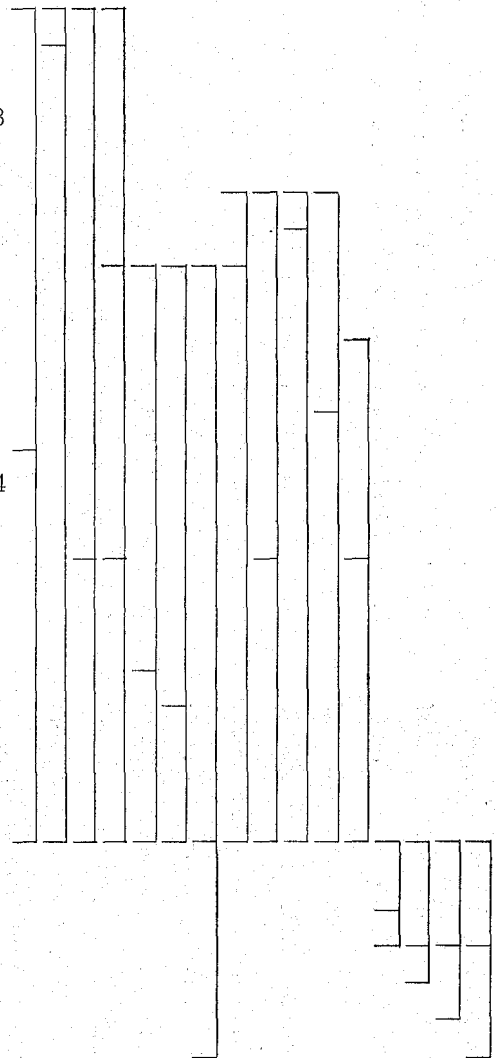
このほかに、葉賀孫の所録にのみ登場する弟子に黃景申(あざなは嵩老、卷五十三・第八十五條による)・馮德英・鄭大錫・周季儼(2)・鄧子禮(2)があるが、いずれも學案・同補遺に収めておらず、名諱・籍貫は知るよしもない。

潘時舉

あざなは子善、台州臨海縣(浙江省)の人。これは學案・卷六十九に據ったもので、「語錄姓氏」には「天台の人」とある。天台も台州の屬縣であるが、あるいは雅稱として台州そのものをさすかもしれない。『嘉定赤城志』卷三十三・人物門(仕進)と學案に略傳を収める。嘉定十五年(一二二二)に上舍の資格によって仕官、無爲軍(浙江省)軍學教授に終る。癸丑以後(紹熙四年、一一九三)の有力な記録者で、三六〇條の記録をとどめる。前稿(p.288)では、單に他人の所録のみに據り、かれが同席する弟子との關係を表示したが、このたびかれ自身の記録の調査もいちおう了えたので、あらためて総合的な表を作成して、以後の考察に資する(次ページ)。

この表を一見するだけでも、潘時舉の師事が紹熙四年(一一九三)





(p. 317)・林學蒙 (p. 387) がこの年に朱門に在ったことは、それぞれの項に考證しておいたから、ここには魏椿について補説する。

魏椿、あざなは元壽、建陽(建寧府嘉禾縣、福建省)の人。

「語錄姓氏」が「戊申(淳熙十五年、一一八八)五夫における所聞」と、特に師事地點を付記する記録者である。「五

夫」とは崇安縣の五夫里、建設時はわからぬが紫陽書堂のある、朱熹がはじめて居をトしたところで、考亭が創建されるまで晦庵・寒泉精舍・武夷精舍とあわせ用いていたらしい。魏椿の所録は二十一條にすぎず、同門の弟子はまったく登場しない。だが、かれは葉賀孫(6、うち五條は魏として)・潘時舉(2)の所録によって、かろうじて實際の師事期が知られる。この兩弟子の師事は、淳熙十五年(一一八八)までさかのぼりえないから、かれの記録年には疑念がもたれるが、「語錄姓氏」の注にわざわざ「五

(元壽) 1190→  
椿 寓 孫 1191→  
賀 孫 1192  
葉 蔡 周 明 作 1192→  
張 林 鄭 南 洽 恪 升 淵 植 之 倪 節 剛 柄 至 蒙 子 夏 邦 久 周 榦 卓  
⑮ ③ ③ ⑮ ⑮ ③ ⑥ ② ② ⑨ ③ ③ ② ② ② ②  
1188・1193 1193 1193 1193 1193 1193 1193→ 1193→ (1193→) 1193・1194 1194→  
? ?

潘時舉

賜 銖 先 父 遊 1195→  
林 董 吳 方 吳 1196→  
⑮ 知 毅 伯

と慶元二年(一一九六)以後の兩次に分かれていることは、ほぼ想定しうる。

いま、その第一次師事期とおもわれる紹熙四年(一一九三)の同門としては、表中かれより上段の記録者たちが指摘される。徐寓(前稿 p. 173)・葉賀孫 (p. 345)・黃卓 (p. 319)・蔡愚 (p. 333)・周明作

稿 p. 173)・葉賀孫 (p. 345)・黃卓 (p. 319)・蔡愚 (p. 333)・周明作

夫の二字を添えるから、やはり記録年次に第一次師事期をもったのであり、葉賀孫・潘時舉との同席は、紹熙四年（一一九三）における第二次師事をしめすだろう。

つぎに、潘時舉の第二次師事については、かれが林賜（一一九五し・董銖（一一九六し）のふたりと同時に同席しているから、この記録年どおり處理すれば、三人が同席する一條は、慶元二年（一一九六）以後に屬すると考えられる。しかし、董銖はその章にのべるように、その前年（一一九五）も朱門にいた可能性がなくもない（p. 386）。いずれにしても、このときの師事をさすとおもわれることが、朱熹の「答潘子善」第四書（文集・卷六十）にみえる。

さきごろ何か月かをのびのびと過ごし、お別れしてから空ろな想いに堪えぬ次第です。秋冷の候となりましたが、とくにご歸宅されて萬事順調にお過ごしのことと拜察します。……この友人たちは去るもの多く來たるもの少しいという情況ですが、とにかく日夜いつもどおり講論しております。

比奉從容累月。別去不勝悵惘。比日秋冷。計還舍之久。諸況安適。……此間朋友去多來少。早晚亦且講論如常。

ここにみえる「去るものが多く來たるものは少い——去多來少」は、「僞學の禁」の熾烈化したころの朱門を想わせるから、第一次師事の直後のものでないことは確かである。すなわち、潘時舉の第二次師事は「累月」にわたり、しかもかれは秋（七月）以前に朱門を

去って行ったことがわかる。語類・卷一一四（訓門人）第三十五條は、おそらくかれが朱門を去る際の記録であろう。

問う、「ながらく、師席に侍り、ましたが、ただいまおいとま致そうと存じます。氣質の偏蔽は、自分自身ではわかりません。終身佩服する心得といたしますため、さらに一言賜わりとう存じます。」

問。久侍師席。今將告違。氣質偏蔽。不能自知。尙望賜以一言。使終身知所佩服。

このときのかれが師門を辭した時點はいつか。朱門ではすでに去るものが多い情況が現われはじめていたが、この段階ではまだ「いつもどおり講論」がつづいていた。われわれはさらに、朱熹の「答潘子善」第五書（文集・卷六十）を見よう。

……純仁（周樸）は氣のどくです。こちらでは蔡季通（蔡元定）が遠流になったと聞いて腹だたいしい思いをしているおりもあり、とつぜんまたこの事を聞き、かれの災難は季通よりひどいので忘れ去ることができません。しかしここではちかごろ新學を改め移して、元の僧坊にし、（聖賢の？）塑像はうちくだかれるは、腕腰はへし折られるは、胸痛むおもいです。かの聖賢でさえこの厄運を免がれぬご時世ですから、われらの徒（の災難）は問題にならぬでしょう。精舍は春ごろ數人の友人がおりましたが、ちかごろはほとんど散り去り、わずかに一人ふたり残っているだけで、期待のもてる努力家はありませんし、あすこ（竹林精

舎)で勉強をリードする兄弟子もなく、まるで無秩序なので、友人たちは董叔重をしのぶことしきりです。

……純仁可念。此間方爲季通遠謫作惡。忽又聞此。其禍乃更甚於季通。使人不能忘懷。然此中近日改移新學。復爲僧坊。塑像推毀。要脅斷折。令人痛心。彼聖賢者。尤不免遭此厄會。況如吾輩何足道哉。精舍春間有朋友數人。近多散去。僅存一二。未有精進可望者。亦緣無長上在彼唱率功夫。殊無次第。諸友頗思董叔重也。

ここには、「僞學の禁」のあらしの被害を想わせる二つの事件が語られている。一つは周樸の身に加えられた何らかの迫害であり、二つは建陽縣學の破壊をさすらしいが、ともに詳細はわからない。ただ、春ごろまで數人いた朱門の弟子も、一兩人を残すだけで散り去ったとあるから、あきらかに第四書より後の段階であると考えられる。その時點は蔡元定の道州編管處分の後であり、しかも「春ごろ」(春間)の情況に言及するから、慶元三年(一一九七)の夏、おそらく四、五月の間であると推定される。したがって、第四書の執筆時點はその前年(一一九六)の秋七月ごろと推定され、潘時舉の第二次師事は翌四年の六月ごろまでに「累月」にわたって實現したのである。われわれはこうして、潘時舉の師事が紹熙四年(一一九三)と慶元二年(一一九六)六月以前の兩次に實現していることを知ったが、實はここに、かれの師事がこの兩年次だけでないことを告げる、かれ自身の記録がある。

先生が問われた、「子善どのは別れてから、なにを勉強された。」

時舉「去年、書院で、『孟子』を告子篇まで讀み、歸郷しましたから、晝は憂患の中にあり(服喪をさすか)ましたが、夜分にはならず一、二章を讀み、今春に至って讀みおわりました。それから『中庸』を讀んで、ただ今は程子の『易傳』を讀んでおります。云々」

先生問云。子善別後做甚工夫。時舉云。自去年書院看孟子至告子。歸後雖日在憂患中。然夜間亦須看一二章。至今春看了。却看中庸。見讀程易。云々——語類・卷一一四・第三十三條

この資料に據るかぎり、われわれは潘時舉が相連らなる兩年にそれぞれ別個の師事期をもったこと、したがって、かれの師事はあわせて三次に分かれることをあらたに知る。その相連らなる兩年としては、紹熙四・五年(一一九三・九四)と慶元元・二年(一一九五・九六)の二つのケースが考えられる。

第一のケースを検討すると、紹熙五年(一一九四)には、朱熹の長沙出向とそれに續く上京がある。潘時舉には長沙期の弟子たちとの同席例がないから、あきらかにかれは長沙へ同行していない。だから、かれがもしこの年に第二次師事期をもったとすれば、朱熹が長沙へ出發するまでのはじめの三か月か、あるいは十月以後の四か月(閏十月を含む)の、首都臨安または建陽におけるそれが考えられる。こ

の場合、かれは前年の第一次師事期中に読み残した『孟子』を、今春に至って読み終り、さらに『中庸』をも讀了しているから、年頭三か月における師事より十月以後の師事のほうがまだしも可能性がある。かれの郷里が首都に近いという地理的條件も、この考察を支持するだろうし、語類における同席例についても、徐寓・葉賀孫・黃顯子・林學蒙らとのそれが、この期に屬すると考えられる。

第二のケースはどうか。この場合は、第二次師事が慶元元年（一九五）に、第三次師事が同二年（一九六）の六月まで、『累月』にわたって、實現したことになる、林賜・董銖と同席したと考えられる。ただ、この第三次師事が成立するためにも、『孟子』を讀了するのが、『今春』の初頭であり、『中庸』を讀了するのが少なくとも春三月中であって、それから直ちに朱門を訪れるということが要求されよう。ここでも、『累月』という表現の實質的時間が問題だが、みぎの内容を盛るには、慶元二年の前半は足りぬようにも思われる。しかも、この場合の第二次師事とされる慶元元年（一九五）は、少なくともその秋ごろ潘時舉は郷里の臨海縣にあったらしい。朱熹の『答潘子善』第二書（文集・卷六十）にいう、

おついでのお便り二ども頂戴いたし、大いに心慰みました。秋涼のこのごろ、お元氣にお過ごしのことと拜察します。熹の躰の衰えは秋に入り快方に向うきざしがみえますが、辭職退休の願いはみなお許しが出ず、日ごと悲歎がつるばかりです。……恭父（趙師鄭）は長らくここにおり、なかなか腰を落ちつ

けてやっておりました。いまたち去る機會にこの便りを書きながら託します。その他のことは恭父がお話できるはず（恭父にきいて下さい）。いまはその暇がありません。云々、

便中兩承惠書。深以爲慰。比日秋涼。所履佳勝。熹衰病涉秋。似有向安之漸。但辭職告老。皆未報可。日深悚惕之懷耳。……恭父留此甚久。儘得從容。因其行草草附此。其他恭父必能言之。未間。云々、

この書翰は、潘時舉と同郷の趙師鄭が、歸郷する際に託されたもので、執筆時點は、『秋涼』のころ、おそらく七・八月の間であろう。みぎの文中とくに注目すべきは、『辭職退休の願いはみなお許しが出ず——辭職告老。皆未報可』という二句である。朱熹はこれまであらゆる除任をうけるごとに辭退を申し出てわれわれを驚かせるが、この場合は、辭職だけでなく退休をも願ひ出ている。退休願ひはむろんこの時だけでなく、七十歳を目前にして慶元四年（一九八）十二月にも提出され、それが翌五年（一九九）四月に至ってはじめて承認されるが、後述のごとく、趙師鄭はそのころ朱門に師事しうるはずもない。ここにいう『辭職退休の願ひ』とは、年譜（卷四）の慶元元年（一九五）夏五月の條に、

復た職名を辭し、并せて致仕を乞う。  
復辭職名。并乞致仕。

とあるのをさすに相違ない。いま文集・卷二十三には、朱熹がその前後に相次いで提出した奏狀などの一部を収めている（申建寧府乞保

明致仕狀・乞追還待制職名及守本官致仕奏狀四。

したがって、朱熹の書翰の執筆時點は、慶元元年（一一九五）秋七月ごろと推定され、そのころ潘時舉は郷里の臨海縣にあった。もっとも、かれがこの年の前半ごろに第二次師事を實現し、兩親いずれかの不幸で歸郷したということも考えられぬでない。しかし、それなら、朱熹の書翰中に、服喪するかれに對するなんらかの挨拶がありそうにおもわれる。さらに、かれがこの書翰の時點以後に朱門を訪れた可能性も全然ないではない。しかし、この慶元元年（一一九五）の春夏の間には四、五十日ばかり朱熹は死に瀕する大病を患っていた（「答黃文叔」書・「答項平父」書・「答徐子融」第四書など）。みぎの書翰中に「秋に入り快方に向かうきざしがみえます」とあるのも、その大病の恢復をさす。老師が大病後の養生さなかにあることを知る潘時舉が、はたして第二の師事を實現したかどうかとも疑わしい。

以上、二つのケースについて検討したが、筆者はむしろ第一のケースをえらびたい。しかし、この第二次の師事が紹熙五年の三月までか、十月以後か、そこまでの推理はさしひかえるとともに、第二のケースの可能性も残しておく。

慶元二年（一一九六）夏の終り（？）に朱門を去った潘時舉は、その後も書面による質疑をつづけたらしく、それらに對する朱熹の回答が現存する（文集・卷六十）。しかし、かれが去りがけに「終身」の戒めとすべきことばを老師に求め、ひそかにそれを最後の師事

と思い定めていたことを裏がきするように、その後かれがふたたび朱門を訪れた形跡はない。年次は不明（たぶん慶元五年）ながら、六月二十七日のデイトをもつ朱熹の「答潘子善」第十一書（文集・卷六十）には、つぎの如くあるのだが。

この友人たちも、十人あまりおり、かなり講論の實を擧げていますが、みんな腰をすえることができません。どうですか、秋冬の間に一ど同志たちをつれて來られ、旬月の集い（ツキノツミ）をやって、言いたい事をぜんぶ吐き出しては。

此間朋友。亦有十餘人。頗有講論之益。然亦皆不能久留也。不知秋冬間能率諸同志。一來爲旬月之集。以盡所欲言者否。

以上を要するに、潘時舉の師事期はおよそつぎの三次に分かれる。

第一次……紹熙四年（一一九三）

第二次……同 五年（一一九四）、三月末までか十月以後か未詳。

もう一つの可能性として慶元元年（一一九五）。

第三次……慶元二年（一一九六）六月に至る「累月」の間

最後に、この章を借りて、趙師邦について詳説しておく。

趙師邦、あざなは其父・恭父（甫）、台州臨海縣（浙江省）の人。

學案補遺・卷六十九に收める略傳にいう、

紹熙元年（一一九〇）の宗室の恩典による進士、臨海縣に住み、

嘉興府判官に終る。

紹熙元年宗室進士。居臨海縣。終嘉興府判官。

語類では、葉賀孫（一一九一）10・林恪（一一九三、3）・潘時舉

(一一九三) 3) および王過(一一九四)の所録にあらわれる。葉賀孫の章にのべたように、紹熙四年(一一九三)と同五年(一一九四)から慶元元年(一一九五)のはじめにかけての兩次の師事が考えられる。朱熹にかれと趙師道の在問を告げる書翰(答呂子約・第三十三書)があり、その題下の注記により、紹熙四年(一一九三)十一月二十七日の執筆とわかる(p. 336参照)。

また、朱熹の「答孫敬甫(孫自修)」第三書(文集・卷六十三)にいう、

天台の友人に趙師卿主簿というのがおり、とくに優秀です。宣城にも共に學ぶべきあい手がありますか。

天台朋友有趙師卿主簿者。尤佳。宣城亦有可與共學者否耶。

孫自修は江蘇省宣城縣の出身で、朱熹が紹熙五年(一一九四)十月に奏事・進講のため臨安に召され、韓侂胄を攻撃した結果、罷免されて歸郷する直前に師事した弟子である(p. 336参照)。みぎの書翰はおそらく翌慶元元年(おそらく夏以後)に執筆されたものであろう。朱熹がなぜ趙師卿のことに言及したかは、わからない。あるいは趙師卿がそのころなお朱門に在ったからであるかもしれない。「天台の朋友」とあるのは、單に出身地をいうのか、あるいは趙師卿がそのころ天台縣の主簿をつとめていたことをさすのであろうか。もしそれならば、孫自修の居住地とあまり遠からぬところにいる趙師卿を紹介する意圖があつたのではないか。

趙師卿はその後、「僞學の禁」に坐したらしく、朱熹の「答黃直

卿(黃幹)」第二十一書(續集・卷二)にいう、

趙恭父までがその事に坐し、部(刑部か)では逮捕するよう指令を出しましたが、何の罪に問うつもりでしょうか。州郡當局はかれの無實を知り、かれのために回申しようとしたが、恭父はそれを望みません。すでに送檢されて行きました。これはいささか意を強うさせてくれます。

趙恭父竟坐其事。部中行下取索。不知意欲坐以何罪。州郡知其無辜。欲爲回申。而恭父不願也。已發去矣。此却差強人意也。『その事』が何を意味するかよくわからないが、上文には禮書の編纂に關する報告があり、つづいていう、

子約(祖儉)がまた王南強の上表文に入っています。この數人といえば、あちこちに出没してどこにでもあらわれ、笑止千萬です。周樸はとても心配です。書物一冊と手紙、お手數ながらついでのおりお渡しいただき、輕舉妄動をせぬがよいと傳えて下さい。

子約又入王南強章疏。只此數人東湧西沒。到處出見。甚可笑也。周樸甚可念。一書并信。煩因便寄與。勿令浮湛爲佳。

周樸が後になんらかの迫害をうけることは、既述のとおりである。趙師卿も周樸もみな呂祖儉の事に關連して彈壓の對象にえられたのであろう。その時點は、吳必大や呂祖儉がなお健在中であるから、少なくとも慶元三年(一一九七)十二月より以前である。

なお周樸は、あざなを純仁という(語類・卷六十二・第一四五條によ

る)。學案・同補遺に收録されていない。その籍貫は未詳だが、上記のごとく呂祖儉(婺州金華縣、浙江省)や趙師鄭・潘時舉(ともに台州臨海縣、浙江省)らとの關係から察すると、そのいずれかと郷里を同じくするのではなからうか。語類では孫自修の所録に一見するにすぎない。

最後に、潘時舉が同席するその他の弟子について付説しておく。

陸濤、あざなは深甫、撫州金溪縣(江西省)の人。陸九思(子彊)の孫で、陸九淵(象山)の門人、開禧末年進士に合格して饒州教官になる。學案補遺・卷五十八に收める。潘時舉の所録に一見するのみ(卷二〇・訓門人・第一五條)。

張仁叟、名諱・籍貫ともに未詳。學案補遺・卷六十九に收める。潘時舉のほか甘節の所録(2)にもみえるから、紹熙四年(一一九三)の師事が考えられる。

このほか、潘時舉と葉賀孫の所録にみえるものに、邵漢臣・陳希眞があり、また潘時舉のみの所録にみえるものに、袁子節・陳仲卿・戴智老があるが、學案・同補遺にすべて未收、これらの名諱・籍貫はともに不明である。

## 附記

本稿は「東方學報」第四十四冊(昭和四十八年二月刊)に發表したものの續稿である。本稿の意圖については、前稿の序説をごらん願

いたい。

前稿執筆の段階では、朱門の有力な弟子二三についての調査が完了しておらず、おのずから若干の過誤を免れなかったが、比較的資料にめぐまれた弟子のみを扱ったこともあって、どうやら大過を犯すに至らなかったらしい。そのことは、本稿の考察過程でしばしば確認することができた。そのかわり、本稿には筆者にとってやっかいな弟子ばかり残り、なかにはついに満足すべき結論を導き出せぬものもある。筆者はまず、前稿では敢えて言及を避けた、朱熹の女婿で師事期間も最も長い黃榦を扱い、ついで、朱熹が知潭州として出向した長沙における弟子を扱った。前稿における筆者の誤りの一つとして、單に同席弟子の表からまったく機械的に紹熙四・五年(一一九三・九四)の師事を一括して考えたことが挙げられる。本稿の隨處に言及するとおり、紹熙五年(一一九四)は、朱熹が長沙出向につづいて奏事・進講のために首都へ行き、さらに挫折して建陽に歸るといふうちに、いわば朱門はめまぐるしく四たび所を変えている。交通の不便な當時にあって、一たびでも所を変える老師に隨行することは、たいへんである。そこで、どうしても長沙期における弟子を究明しなければならぬ必要を感じていた。幸いにもいまはその全貌をあきらかにした。しかも、これに附隨して、わずか五十日の朱熹の滯京期にも、かれは若干の弟子をもっていたことが判明した。これは筆者にとって一つの收穫であった。このように、外任などによる朱熹の出向期が、本稿の考察にとって重要な時期であ

ることは、むろん當初から考えぬわけではなかった。むしろ、南康期における師事者とか漳州期におけるそれとかを、大きな柱にする構成を配慮すればよかったといまは考える。

それから、たとえば偽學の禁が如實に反映した慶元年間前半の情況など、朱門の盛衰消長を知ること、本稿の考察に大いに役だつてあろう。より具體的にいえば、朱熹は異なるあい手に寄せる書翰にしばしば同じ事實を相似た表現で報告する。もしその一つから執筆時點が把握できれば、他の書翰もそれとほぼ前後のころのものとなる、などがそれである。

しかしながら、筆者は結局のところ、筆者が用いてきた方法には限界あることを痛感し、かつ焦燥を禁じえなかった。本稿の考察には、前稿でもふれたように、語類の問答が對象とするテーマそのものから師事時點を究明する方法が導入されねばならない。たとえば、

『論語』の講義はいつに行なわれていたか、などというごく大まかなスケジュールだけでもよい。一例を挙げると、語類の『易』關係の部分では、晏淵の記録が一項も缺けることなく残されて、われわれを驚かせる。かれは紹熙四年（一一九三）から翌五年（一一九四）の長沙期にかけて師事する弟子であるから、この兩年次にわたり、處を更えながら、『易』の講義がつづけられたことがわかる。ただ、上記の手段を導入することは、たいへんな勞苦を伴ない、かつまた本稿の究極の目的に踏み入ることでもある。筆者がその任にまいったくたえぬことは、誰よりも筆者自身がこころえている。數十本の糸じりをたえず握りしめながらの考察過程にあって、筆者はただ、この論考が實際に朱子研究に役だつことをひたすら祈るのみであった。

〔主要人名・索引〕 ゴシック體は一章を立てた弟子、括弧内は前稿にみえるページを示す。

B 包 遜 三二三		曹 建 二九〇	陳 文 蔚 (一九三)	程 端 蒙 二九六
包 揚 三二〇・(二七九)	曹 叔 遠 三四二	陳 希 眞 三〇三	程 洵 三〇七	
包 約 三三八・三一三	曹 彥 純 二八五	陳 希 周 三三五	程 永 奇 三四六	
C 蔡 沈 (二七九)	曹 彥 約 二八五・(一四九)	陳 芝 (一六四)	D 戴 智 老 三五四	
蔡 念 成 (一六七・一七〇)	陳 剛 三四五	陳 埴 三四〇・(二七六)	鄧 子 禮 三四七	
蔡 懇 三三三・(一六四)	陳 淳 (一五三)	陳 仲 卿 三五四	董 拱 壽 二八四	
蔡 元 定 (一八三)	陳 日 善 三一八	陳 仲 蔚 (二七九)	董 銖 三三二・三五〇	



F

寶從周 (一六五・一八四)  
范元裕 (一六九・一七九)

方士繇 (一八三)

方毅父 三三六

馮德英 三四七

符叙 (一〇一)

輔廣 元・三四・(一〇六)

輔萬 (一一一)

G

甘節 三〇四

龔蓋卿 二八一・(一四九)

龔郊伯 三三四

郭叔雲 三〇三・(二〇七)

郭友仁 (二〇六)

H

胡安之 (一七八)

胡泳 (一六二・二二四)

晏淵 (一九六)

黃榦 二六一

黃樵(仲) (一五五・一五六)

黃景申 三四七

黃士毅 (一一二)

黃顯子 三四一

黃義剛 (一七八)

J

黃義勇 (一五〇・一七八)  
黃卓 三一九  
江疇 三三二  
江默 (一八三)

江文卿 三四七

蔣端夫 二八四

蔣明之 二八四

蔣叔蒙 (一七六)

蔣元進 二八三

金去僞 二九五

康淵 二八三

黎季成 二八三

李德之 二八三

李燾 (一六二・二二三)

李方子 三三七・(一九五)

李閔祖 三二三

李杞 二七九

李茂欽 二七九

李儒用 (一六八)

李叔文 (一七三)

李唐卿 (一七一)

李唐咨 (一五五・一五六)

L

黎季成 二八三

李德之 二八三

李燾 (一六二・二二三)

李方子 三三七・(一九五)

李閔祖 三二三

李杞 二七九

李茂欽 二七九

李儒用 (一六八)

李叔文 (一七三)

李唐卿 (一七一)

李唐咨 (一五五・一五六)

K

康淵 二八三

黎季成 二八三

李德之 二八三

李燾 (一六二・二二三)

李方子 三三七・(一九五)

李閔祖 三二三

李杞 二七九

李茂欽 二七九

李儒用 (一六八)

李叔文 (一七三)

李唐卿 (一七一)

李唐咨 (一五五・一五六)

李維申 三三八

李文子 三三八

李修己 二八三

李約之 二八八

李周翰 三四六

李壯祖 三一五

梁謙 三三二

梁瑑 三三六

廖德明 (一八一)

廖晉卿 三三四

廖謙 二八四

劉黼 三〇七

劉礪 (一六一・二二四)

劉淮 三四七

劉居之 三三五

劉孟容 二八六

劉炎 (一九六)

劉堯夫 (一八二・一九二)

劉源 三三八

劉砥 (一六〇・二二四)

劉子翹 (一八四)

林賜 二九八

林恭甫 三四七

林恪 三〇三

林夔孫 (一八〇)

林學履 二八八

林學蒙 二八七

林易簡 (二五五・一五七)

林允中 (一八四)

林用中 (一八四)

林子蒙 三一七・(一七二)

林仲參 三三六

陸濬 三五四

閻丘次孟 二六九

馬節之 二八三

馬子巖 (一九二)

南城熊 三三六

歐陽謙之 (一八七)

潘柄 三三四

潘履孫 二八〇

潘時舉 三四七・(二〇八)

潘植 三三三

錢木之 三四四

饒幹 二八二

S

邵 浩 (一七三)

邵 漢臣 三五四

沈 偶 (二六九)

施允壽 (一五五·一五六)

石洪慶 (一五五·一五六)

舒 高 二八五

蘇 寶 三三五

蘇宜久 三三五

孫自修 二七九

T

湯 泳 二七一

陶安國 三二六

滕 璘 (一九七)

童伯羽 (一六三)

萬人傑 二八九

汪德輔 (一八七)

王 過 三四〇·(一一二)

王 壬 三一八

王時敏 (一九三)

王子周 二八四

魏 丙 (一九二·二〇二)

魏 椿 三四八

吳必大 三〇二·(二〇二)

吳伯遊 三二六

吳 雉 三一七

吳 南 (二〇五)

吳仁父 三二六

吳 雄 二八三

吳 振 二八四

吳知先 三二六

吳 琮 二八六

X

蕭景昭 三二六

蕭增光 三一八

蕭 佐 二八三

徐 琳 (二〇一·二〇五)

徐孟寶 (一九三)

徐 容 三三一

徐 寓 三三〇·(五·一三)

Y

楊長孺 二七一

楊道夫 (一六三)

楊 方 三〇六·三二一

楊履正 (一六五)

楊 楫 (二〇〇)

楊仕訓 (五·五·七)

楊 驥 二八一·(一六三)

楊 至 (一六四)

葉賀孫 三二六·(一七三)

葉任道 (二一〇)

葉武子 三四六

游敬仲 (二〇九)

游 開 三一八

余大雅 (一八九)

余大猷 (一九三)

余宋傑 三〇三

余正父 三四〇

袁子節 三五四

曾 極 三〇五

曾興宗 三一九

曾祖道 三一七·(一六八)

詹體仁 三四三

張 洽 三〇〇

張仁叟 三五四

趙 蕃 (一九七)

趙師道 三三六

趙師卿 三五二

趙師夏 二八八·(一九二)

趙師淵 (一九二)

趙唐卿 (一六五)

鄭大錫 三四七

鄭可學 (二〇一)

鄭南升 (二〇七)

鄭思孟 二九九

鄭天禧 三二二

鄭仲履 二八三

鍾唐傑 二八三

鍾 震 二八四

周 椿 二八三

周公謹 二七一

周季儼 三四七

周 良 三三二

周明作 三一七

周 謨 (一六六)

周 樸 三四九·三五三

朱飛卿 三二九

朱季繹 (二一〇)